
逃走中～体力と頭脳で勝て～

ヨーテル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走中〜体力と頭脳で勝て〜

【Nコード】

N7676V

【作者名】

ヨーテル

【あらすじ】

予選 + 180分に及ぶ逃走劇！

10個のアニメ+オリキャラから選ばれた50人の中から、本選を逃げ切り、賞金を手にするものは現れるのか！？

体力戦！頭脳戦！心理戦！そして運の力！

普通の逃走中+ で心理戦を加えたオリジナル逃走中！ぜひ、

お楽しみください。

逃走者紹介！ 前編

作者評価はS〜Eの6段階で評価しています。ちなみに、個々が持っている特殊能力は逃走中では禁止となっております。

アニメ1ハヤテのごとく！

綾崎ハヤテ

ハヤテのごとく！の主人公。親に1億5千万の借金を押しつけられ、それを肩代わりしてくれた三千院ナギのもとで現在執事として働いている。身体能力は非常に高く、期待ができる。

作者評価 A

ハヤテ「逃げ切れば、わずかだけど、お嬢様に借金をお返しできる！がんばろう！」

桂ヒナギク

白皇学院生徒会長。頭は良く、剣道部に所属しているため身体能力も高い。今回彼女が逃走者候補の一角であることに間違いはないだろう。

作者評価 S

ヒナギク「やるからには逃げ切るわよ！」

マリア

本名は不明。三千院家に拾われてからは、ナギのところハウスメイドとして働いている。身体能力はハヤテよりも低い…いや、もしかしたら高い？ダークホース的な存在だ。

作者評価 ?

マリア「こういうの初めてですからワクワクしますね〜」

愛沢咲夜

愛沢家のお嬢様。関西人でお笑いが大好き。積極的な面があるが、お嬢様のため、普段は守られている側の人間。逃走中では残れるか…？

作者評価 D

咲夜「金もそうやけど、何よりも逃げ切りたいわ。自慢できるしな」

橋ワタル

レンタルビデオ店を経営する実業家。ワタル自身もビデオが大好き。当然逃走中のビデオも何度も見ているため、知識がある。知識力で逃走者を目指す。

作者評価 B

ワタル「少し店がやばいからな、これで穴埋めだ！」

アニメ2 咲 - s a k i -

宮永咲

清澄高校麻雀部の1年生であり、咲 - s a k i - の主人公。槓した後の嶺上牌でツモあがる嶺上開花という役を得意としている。恐ろしいほどの強運を持ったため、逃走者になる可能性あり。

作者評価 B

咲「逃げ切れるように頑張るよ！」

原村和

咲と同じ学校の1年生。麻雀ではデジタルな打ち筋を得意としており、計算が得意。逃走中で計算を活かす要素はあるので、頭脳で逃走者を狙う。

作者評価 B

和「宮永さんと、最後まで…！」

池田華奈

風越女子高校麻雀部の2年生。団体決勝大将戦では40000点以上の点棒を失うものの、数え役満をあげる等見せ場があった。積極的な性格なため、ミッションに期待できる。

作者評価 C

池田「これはもう逃げ切る以外ないし！」

加治木ゆみ

鶴賀学園麻雀部の3年生。打ち方は基本オーソドックスだが、状況に応じてセオリー外のことをするなどなかなか度胸のある人。逃走中でもそれは活かされるのか…

作者評価 C

ゆみ「逃げ切ったら麻雀部の皆と一緒に、何か食べに行くか…」

国広一

龍門渕高校麻雀部の2年生。ボクっ娘。星のタトウシールを頬に貼っている。運動面ではあまり期待できなさそうだが…

作者評価 D

一「ボク苦手だな、こういうの」

アニメ3 しゅごキャラ！

日奈森あむ

しゅごキャラ！の主人公。ガーディアンではJOKERの役職に就く。運動はなかなかできそうだが小学生ということを考慮すると厳しい？

作者評価 D

あむ「キャラチェンジ出来ないし、自信ないなあ…」

辺理唯世

ガーディアンではKの役職に就き、皆を引っ張っている。そして女

子にモテる（ちくしょう！）あむ同様小学生というハンデを考える
と男いうことを考慮しても評価はC止まり。

作者評価 C

唯世「1秒でも長く逃げ切れるように頑張ってみるよ」

三条海里

ガーディアンでは一時Jの役職に就いていたが、今は転校してしま
っている。宮本武蔵を憧れの人物として胸に抱いている。身体能力
はやはり小学生だが、判断能力に優れている。作者のお気に入りキ
ャラNo3！

作者評価 B

三条「何とか逃げ切りたいですね…」

真城りま

ガーディアンではQの役職についている。頭脳は平均的で、体力は
ほとんどないため、普通のスポーツでは期待もできないのだが、逃
走中は何が起こるかわからない。とはいえ、やはり背負ったハンデ
はでかい。

作者評価 E

りま「なんか…予選で落ちそう」

相馬空海

小学生時代はガーディアンでJの役職に就いていたが、中学生にな
るにあたり、ガーディアンを辞める。サッカーをやっており、運動
神経は抜群！知能が加われば最高なのだが…

作者評価 A

空海「逃げるだけ？楽勝だぜ！」

アニメ4 魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s

高町なのは

リリカルなのはの主人公。魔法の才能を持っており、現在は見習い魔道士に魔法を教えている。魔法は強いが逃走中ではどうか注目。作者評価 B

なのは「せめてあと50分！つてとこまでは残りたいな」

八神はやて

リリカルなのはA'sから登場したキャラ。現在は機動六課のリーダーを務めている。運動面というよりかは作戦面で逃走者を狙うのではないか。作者評価 C

はやて「なのはちゃん達には勝ちたいな、リーダーとして」

フェイト・テスタロッサ・H

リリカルなのはの無印時代はなのは敵であったが、今は仲間として機動六課の一員になっている。作者の見解ではなのはよりも強いのではないかと思われる。

作者評価 A

フェイト「うん、頑張る…！」

ユーノ・スクライア

リリカルなのはstrickersではあまり出番のなにかわいそうな人だが、なのはに魔法少女の道を示した貴重な人物。逃走中では普通に逃げるだけだろう。作者のお気に入りキャラNo4！

作者評価 C

ユーノ「僕はどうやって逃げたらいいんだろう…」

クロノ・ハラオウン

リリカルなのはの無印時代から出番があり、A's以降ではフェイトと義理の兄弟になる。が、フェイトから「お兄ちゃん」と呼ばれ

ることには、何年たつても慣れていない。状況判断力に優れており、体力もあるため、期待ができる。逃走者候補の一角だろう。

作者評価 S

クロノ「どうやって逃げるかだが、それは状況によるな」

アニメ5 名探偵コナン

江戸川コナン

数々の事件を解決に導いてきた名探偵。小学生なのに言動が小学生らしくないのは、コナンという存在は高校生の工藤新一が小さくなつた姿だから。知識や判断力は一流だが、体力が少ないため、頭脳戦で勝負ということになるだろう。

作者評価 A

コナン「ぜってー逃げ切つてやるぜ！」

灰原哀

コナンの宿敵、黒の組織から来た女。組織を脱退し、自らの作った薬を飲みコナン同様体が小さくなった。コナンほどではないが、一流の頭脳を持つため、期待ができる。作者のお気に入りキャラNo.5!

作者評価 B

灰原「工藤君、たまにはあなたに勝つわ」

吉田歩美

コナンと同じ帝丹小の生徒。だが、コナンや灰原と違い、純粋な小学1年生なので、逃走中ではかなり不利な立場にいる。

作者評価 E

歩美「歩美、がんばる！」

毛利小五郎

米花町に探偵事務所を開く元警察官。だが、推理の能力は一般人に毛の生えた程度しかない。そのため、体力勝負ということになるが体力もあまり期待できない。

作者評価 D

小五郎「逃げ切れれば大金！？ウヒ、ウヒヒヒヒヒ」

毛利蘭

小五郎の娘。新一のことを好いているが、コナンが新一であるという事実は知らない。空手をやっており、体力には自信がある模様。

作者評価 B

蘭「よし、気合入れていくわよ〜！」

逃走者紹介！ 前編（後書き）

後編に続きます。

作者からのあいさつは後編でさせていただきます。

逃走者紹介！ 後編（前書き）

前編からの続き

逃走者紹介！ 後編

アニメ6 ドラえもん

ドラえもん

日本国民ならだれでも知っている国民的キャラクター。22世紀からのび太の世話をするためにやってきた猫型ロボット。コンピューターの頭脳は逃走中とどのような相性を持つのか。ちなみに、今回はポケットを外して参戦している。

作者評価 B

ドラえもん「僕はともかくのび太君が心配だなあ」

野比のび太

勉強もダメ、スポーツもダメ、女の子にはモテない。彼が逃走中で逃げ切るにはよほどの運が必要だろうが、のび太は×テストで0点をとったことがあるという強者。期待度は低いと言わざるを得ない。

作者評価 E

のび太「よし、頑張るぞ」

源静香

のび太の将来の結婚相手であり、このアニメのメインヒロイン。小学生というハンデを背負っているため、逃げ切りは苦しいか。

作者評価 D

静香「みんなと一緒に逃げ切れたらいいな」

骨川スネ夫

家が金持ちで夏休みによく海外に行ったりしている（ちくしょう！）ずる賢い性格であるため、心理戦という部分だけ見れば、残れる要

素もあるが、やはり苦しいか。

作者評価 D

スネ夫「お金はあって困るもんじゃないからね！自首とかしちゃうっかな」

ジャイアン
剛田武

町一番のガキ大将。うわさでは中学生を相手に喧嘩で勝ったこともあるという。だが、涙もろい一面もあり、そこがまたジャイアンのいいところだ。運動神経は抜群！ただバカなんだよなあ…

作者評価 B

ジャイアン「ハンター？そんなもん全然怖くねえぜ！」

アニメ7 家庭教師ヒットマンリポーン！

ツナ
沢田綱吉

見た目は普通の中学生だが、なんとその正体はマフィア、ボンゴレファミリーの10代目ボス！しかしダメダメです。ある意味のび太的存在。

作者評価 D

ツナ「無理だつて！逃げ切れないうつて！」リポーン「逃げ切れ！」
ドカッ 蹴りを入れる音。

山本武

ボンゴレファミリーの守護者。ツナのクラスメイト性格は気さくでツナとの仲もいい。ただし、ツナとは打って変わってスポーツができる。運動神経は普通の中学生をはるかに超えている。

作者評価 A

山本「逃走中？面白そーじゃん！」

雲雀恭弥

ボンゴレファミリー雲の守護者。ツナの学校の風紀委員長。クールな性格をしているが、相手がいれば徹底的に叩きのめす。群れるのを嫌い、1人で行動するところがある。おそらく逃走成功者候補の一角だろう。作者のお気に入りキャラNo2！

作者評価 S

雲雀「僕を追うものは皆、かみ殺すよ…！」

クローム・ドクロ

ボンゴレファミリー霧の守護者。左目をドクロの眼帯で隠しており、どこか謎めいた雰囲気醸し出している。能力を失うとどうなるのか、少し見ものだ。

作者評価 B

クローム「……骸様のために、頑張る！」

笹川良平

ボンゴレファミリー晴の守護者。ツナが好意を寄せている相手の兄であり、先輩。ボクシング部に所属していることから体力はあると見受けられる。これで頭がよければ間違いなくS評価なのだ…

作者評価 A

良平「ウオオオオッ！どいつがハンターだ!？」

アニメ8 とある科学の超電磁砲

御坂美琴

アニメの主人公であり、学園都市、常盤台中学のお嬢様。学園都市では3番目に強い能力を持つが、今回はそれが使えない。さあ、どう攻略してくるか。

作者評価 B

美琴「上等ね、やってやるっじゃない！」

上条当麻

超電磁砲には一応出てくるキャラクター。彼が主人公のアニメがちやんとあるが、今回は超電磁砲のほうで行かせてもらった。基本不幸体質なので、思わぬ落とし穴にはまることもあるかもしれない。

作者評価 B

上条「逃げ切れれば、3か月分のガス代と電気代と水道代が全部払える！ここは勝負！」

白井黒子

美琴と同居している美琴の後輩。美琴を「お姉さま」とよび、慕っている。学園都市の風紀委員ジャッジメントに所属しており、体力、知力ともに十分な力を備えている。

作者評価 A

黒子「お姉さまと一緒に逃げ切りますの！」

佐天涙子

とある中学校に通う中学1年生。美琴等と違い能力は持っていないが、逃走中にそれは関係ない。持ち前の積極性で逃走成功を狙う。

作者評価 C

佐天「面白そうだね！いつちょやりますか！」

インデックス

本名不明のシスター。現在は上条の家で暮らしているが、食欲旺盛な為、上条の金がどんどん減っていく原因の1つ。体力とかは平均的だがどうにも動きずらそうな服を着ていることが気になる。

作者評価 D

インデックス「賞金とつたらおいしいものいっぱい食べるんだよ！」

アニメ9 逆境無頼カイジ 闘牌伝説アカギ（福本作品2本でアニメ9とする）

伊藤カイジ

特に仕事も探さず、アルバイトで食いつないでいるダメな大人。だが、ギャンブルになり逆境に立たされたとき、その才能は開花する。果たして今回は開花されるか？

作者評価 B

カイジ「おおっ！逃げ切れれば…大金！見てろ、絶対に逃げ切る！」

石田さん

カイジが希望の船エスポワールで出会ったおっさん。ダメな大人だが、人に対する優しさを持っている。

体力的にも逃走成功は難しそう。

作者評価 D

石田「俺は、このチャンスをものにできるのか？」

赤木しげる（以後カタカナ表記でアカギ）

13歳のころに麻雀を覚え、その後勝ち続けてきたギャンブルの天才。以前辻斬りをしていたこともあり、逃走成功に大きな期待がかかる。逃走成功者の筆頭。作者のお気に入りキャラNo.1！

作者評価 S

アカギ「ククク…面白い、ちょっと遊んでみるか」

安岡さん

とある雀荘で見たアカギの才能を認め、以後勝負の場をセッティングしたりする。リスクなしにいくらかの金を拾うというずる賢さは、逃走中で役に立つかもしれない。

作者評価 B

安岡「自分が戦うつてのは、結構緊張するもんだな」

鷲巣巖

昭和時代に日本のすべてを得た天才。昭和の怪物として、天才アカギとの死闘を繰り広げたこともある。その悪魔じみた豪運と…王になつた知力で！逃げ切ることを目標にしている。ただ、老体というのが難点。

作者評価 A

鷲巢「面白い面白い。たまにはこういう遊びもいいもんだ」

オリジナルキャラ

竜崎悠太

県立来夢高校に通う2年生。特に部活はやっていないが、なかなかの身体能力を持つ。勉強面では理数系が得意で、1年の時からテストでは最高点をとっている。それに加え、誰も寄せ付けないような独特のオーラを時々放つため、顔は平均的なのだが、女子からの人気が高い。ただ、竜崎自身が恋愛に鈍感な為、付き合つたことはない。スーパーでバイトをしている。

作者評価 A

竜崎「面白そうなゲームだな、参加してみるか」

沼川康太

竜崎のクラスメイト。入学式で出会つた時から竜崎のことを気に入り、積極的に竜崎に話しかけている。もちろん竜崎もそれに応えている。髪を茶色に染め、ハリネズミのように立たせているが、決して不良などではない。運動面、知能面ともに平均的。

作者評価 C

沼川「賞金！？逃げ切るだけでいいのか！よしやるぜ！」

藤田剣人

竜崎のバイト先の先輩。比較的まじめな性格で、何事にも一生懸命取り組む。そのせいか、国内でも有数のトップ校に通っている。少

し長めの髪からは、男なのにまるで女の子のような香りがして、「君いい匂いだね」と言われた回数も数知れず。そんな彼だが、運動は少し苦手らしい。

作者評価 B

藤田「僕でも参加できるのですか、ならやってみましょうか」

結城秋子

竜崎のクラスメイト。竜崎のことを心から好いているが、本人の前に行くとしても緊張してしゃべれない。ノーマイクだが十分かわい顔をしているので、男子からは人気が高いが、彼女は竜崎一筋で、他の男子など見向きもしない。体力、知力共に中の上。

作者評価 B

結城「これで逃げ切れれば、竜崎君は私のこと、少し意識してくれるかな…？」

一ノ瀬玲奈

竜崎のクラスメイト。基本的にクールな性格をしており、状況判断も的確。彼女は幼いころ一家を詐欺でつぶされた経歴を持っており、人間不信になってしまった。彼女は、人を信じず、自分だけを信じる。それこそが、彼女の性格にも表れているのだと思われる。成績は非常に優秀でオール9。運動もできるため、ダークホース間違いない。

作者評価 A

一ノ瀬「なんか参加してしまったけど、面白いのかしら？」

以上、50名で逃走中を行っていきたいと思います！
誤植などあったらガンガン指摘してください！

逃走者紹介！ 後編（後書き）

どうも、ヨーテルと申します。

前作から見てくださっている方は今作もよろしくお願いします。

今回から見始めたよ！ってひとはこれからよろしくお願いします。

とりあえず、普通の逃走中+ で心理戦をねじ込むという博奕に出たのですがどうでしょうか？

作者はいま、L I A R G A M Eの二次創作も手掛けておりまして、せっかくL I A R G A M Eの作者が書くのなら、心理戦を加えたいなと思いい加えました。

あ、もちろん普通の逃走中が好きな方も普通に楽しんでいただけたらと思います。

これを見て少しでも興味がわいた方は、ぜひ次回からも見てくださ
いゝm(____)mゝ

次回は予選になります。

予選グループ決め

とあるホテルに集められた50名の逃走者たち……いよいよ、逃走中が始まる。

竜崎「なるほど、これだけ逃走者がいるのか」

沼川「お、竜崎！そろそろ始まるらしいぞ！」

ピンポン

その音が鳴り終わると同時に、会場内に放送が流れた。

「これより、逃走中予選を始める。しかし、50人という大人数で予選をやるとなると、いろいろ問題も出てくることだろう。そこで今回は会場をAとBに分けて予選を行う」

上条「分かれるのか。まあ、この人数じゃ確かに大変そうだしな」

のび太「もしかして、ドラえもんも別の会場かもしれないってこと！？」

良平「AとBとはなんだ？」

1人明らかに問題発言をしていることに、いろんな意味で周りが見えなくなる。

「説明を続ける。誰がどちらの会場になるかだが、それはくじで決めてもらう。しかし、今回は人数が多いため、1人ずつ引くと何か

と面倒。そこで、チーム単位でくじを引くことにした。いまから、5人1組のチームを組み、そのチームの代表者がくじを引いてもらい、その結果に応じて会場をわける。ということで、5人1組のチームを今作ってもらおう」

放送はそこでいったん途切れた。とりあえず、チームを作ってくじを引けばいいとのこと。

.....

チームは5分と掛からないうちに決まった。もともとこの場に知り合いが4人しかいないため、皆知り合いと組んで終わるというわけだ。

男「チームが決まったら、とつととくじを引け！」

箱を持って態度の悪い男が現れた。

美琴「何あの男、感じ悪いわね」

鷺巣「このわしに命令するとは、ひれ伏させてやるうか……」

カイジ「まあまあ、落ち着いてくださいよ鷺巣さん」

皆男をいやな目で見る。そんな中、逃走者の中からツナが男に近寄った。

ツナ「ねえ、獄寺君じゃない？」

獄寺？「ギクツ！いやいや、違いますよ10代目！」

ツナ「10代目って言うてるし…」

完全に、墓穴を掘った…

獄寺「しまった！もういいか…では10代目、くじを引いてください！」

ツナ「わかった、……………えいっ！」

ツナが引いた紙にはBという文字が書かれていた。

獄寺「10代目達はB会場ですね！ご健闘をお祈りします！」

これで一気に会場空気が温くなり、チームの代表者は続々とくじを引いていく。

そして最後にくじを引きに来たのは、アカギ。

アカギ「1枚しかないんだから、引く必要はないように思えるが…」

獄寺「決まりなんだよ、さっさと引け！」

アカギ「ククク…」

アカギが引いたくじにはBと書いており、アカギやカイジはB会場だということが分かった。

ピンポン

「これで逃走者の予選会場がこのように決まった」

設置されていた大型スクリーンに逃走者の名前が映し出された。

A会場

しゅごキャラ！

日奈森あむ

辺理唯世

三条海里

真城りま

相馬空海

B会場

ハヤテのごとく！

綾崎ハヤテ

桂ヒナギク

マリア

愛沢咲夜

橘ワタル

魔法少女リリカルなのは *striker s*

咲 - s a k i -

高町なのは

宮永咲

フェイト・テスタロッサ・H

原村和

八神はやて

池田華奈

ユーノ・スクライア

加治木ゆみ

クロノ・ハラオウン

国広一

ドラえもん

家庭教師ヒットマンリボ

ーン！

沢田綱吉

ドラえもん

山本武

源静香

雲雀恭弥

骨川スネ夫

クローム・ドクロ

剛田武

笹川良平

とある科学の超電磁砲

アカギ&カイジ

上条当麻

伊藤カイジ

御坂美琴

赤木しげる

白井黒子
佐天涙子
インデックス

安岡
石田
鷲巣巖

オリジナル

名探偵コナン

江戸川コナン

竜崎悠太

沼川康太
藤田剣人
結城秋子
一ノ瀬玲奈

灰原哀
吉田歩美
毛利小五郎
毛利蘭

予選グループ決め（後書き）

逃走者紹介の時に書き忘れたので今ここで書いておきたいことがあります。

今回のアニメ、気づいた方もいるでしょうが、老若男女誰でも楽しんでいただけるようにオールジャンルで選びました。（さすがに老はきついかもしれないけど）

そのため、絶対によくわからないアニメが1つや2つくらいはあると思いますが、その点はご了承ください。

なので、このすべてのアニメを知っていてなおかつ見るとい方は少ないと思います。もしかしたらいないかもしれませんが。

もしもいたら、自分はその方と2人でおいしいミルクティーを飲みながらアニメと逃走中の話で盛り上がりたいですね（作者未成年だから酒はだめよ）

次回はよいよ予選が始まります。お楽しみに！

予選A会場1 予選スタート

「これより、会場ごとに予選を行う。A会場とはこのホテルのことなので、B会場の人のみ移動することになる。A会場の人はその場で待機。B会場の人はいくじを持った男についていき、そこで指示を待て」

B会場の人間が、獄寺の指示に従いながらホテルを出て行った。

.....

B会場のすべての人間が出て行ったことを確認したのか、再び放送が流れた。

「それでは、Aブロック予選を始める。まず、予選に必要なアイテムを支給する。全員即座に装着するように」

全員にアイテムが配られた。

静香「これって…腕時計？」

スネ夫「でも、時間なんて表示されてないよ」

藤田「腕輪…かな？」

フェイト「でも、変な機械ついてるし、ちょっと怖い…」

配られた腕輪には、小さいスクリーンみたいなものがついており、そこにはOptと表示されていた。

「その腕輪同士を接触させると、p tが1増える。少し試してみてください」

つまり、自分の腕輪で誰かの腕輪に触ればいいということだ。

ユーノ「なのは、ちょっとやってみよう」

なのは「うん、いいよ」

2人が腕輪を接触させた。しかし、接触させても何の音も出ない。ふつう何らかの音が出るものだと思ってしまっが、どうやらこれは出ないらしい。

ユーノ「あ、p tが1になってる」

なのは「私もだよ」

腕輪同士を接触させると、お互いのp tが1増える仕組みになっていることが確認された。

その行為を主催者が確認したのか、2人のp tは0に戻った。

「それは個人の持ち点となる。この予選は、25名がこのホテルの別々の場所からスタートして、他の逃走者を捜し、接触してポイントを増やしていくことが目的となる。60分予選を行い、ポイントが多い上位15名が本戦進出となる。なお、ホテル内には2名のハンターがあり、捕まると8ポイントを減らされてしまう」

予選A会場 ルール

逃走者は別々の場所からスタートし、他の逃走者を見つけ、接触によりポイントを増やす。

接触は同じ相手と2回以上はできない。

予選は60分行い、予選終了時にポイントが多かった上位15名が本戦進出。

尚、ホテル内にはハンターが2体いる。

ハンターにつかまっても失格にはならないが、ポイントが8減ってしまう。

この予選では、携帯電話の使用はメールの受信以外使用不可とする。

.....

このホテルは、旧館と新館に分かれている。旧館は15階建て、新館は20階建てと何とも立派なホテルだ。その構造がこれだ。

旧館		新館	
1 5階	ホール	2 0階	ホール
3 階 ~ 1 4階	客室	1 9階	VIPルーム
2 階	事務室	3 階 ~ 1 8階	客室
1 階	フロント・売店	2 階	事務室
		1 階	フロント・売

そしてついに、予選開始のカウントダウンが始まった…

5

6

7

8

9

1
0

竜崎「いよいよ始まったか…」

スタート!

1

2

3

4

新館12階からスタートした竜崎。接触をするためにとりあえずほかの逃走者を探す。

竜崎「このホテルは旧館と新館を合わせると階層の数は35…とすると、大体1、4階に1人いる計算になる。序盤は動けば誰かと会えるか…」

素早い計算で、序盤の動きを決めた竜崎。

竜崎「問題は下か上に行くかだが…上にするか」

そう思いエレベーターの前にやってきた竜崎。しかし、そのエレベーターは、動かない…

竜崎「故障中？エレベーターでの移動はさせないってことか」

竜崎は仕方なく、階段で上を目指す。そして竜崎の1個上、新館13階にいるのは…

上条「この階にはほかの人はいないのかね」

上条当麻だ…

彼は今、同じ階に人がいないか探している。だが、同じ階からのスタートは、絶対はない…

竜崎「あ、お前は確か上条だったな」

竜崎が、階段を上ってきた。

上条「そつちは確か、そう竜崎だ！やつと人に会えた…よし！接触するか」

竜崎「ああ、そうだな」

竜崎悠太・上条当麻 接触完了

2人の腕輪が重なり合い、2人のポイントは0から1に増えた。

そしてその頃、他の場所でも頻繁に接触が行われていた。

はやて「お、白井さんやん。接触せーへんか？」

黒子「わかりましたわ！」

八神はやて・白井黒子 接触完了

空海「結城だよな？接触しようぜ！」

結城「いいですよ」

相馬空海・結城秋子 接触完了

ドラえもん「あ、のび太君！大丈夫？」

のび太「ドラえもん！まあ、今は何とかなってるよ。それより、接触しようよ」

ドラえもん「そうだね」

ドラえもん・野比のび太 接触完了

クロノ「君は確か…三条君だね。接触するかい？」

三条「クロノさん…そうですね、とりあえずは」

クロノ・ハラオウン ・ 三条海里 接触完了

ジャイアン「なんか誰もいないな〜よし、俺の歌でみんなを引き寄せよう！」

スネ夫「やめてよジャイアン！僕が接触してあげるから……ね？」

ジャイアン「おお、そうか…」

骨川スネ夫・剛田武 接触完了

スネ夫「間に合ってよかった〜」

一方、誰とも会えない者もいる中、逃走者たちにとって最初の試練が始まるうとしていた…

予選A会場1 予選スタート（後書き）

昨日だけで400アクセス以上！作者もびっくりしております。

まだ予選すら始まっていないのにお気に入り小説に入れてくださった方もいるようで、感謝の気持ちで胸がいっぱいです。

読者の皆様の期待に応えられるかはわかりませんが、100パーセントの努力で書いていきたいと思しますので、これからもよろしくお願ひします。

P・S おそらく何人かは気づいたでしょう。今回の予選はLIAR GAMEの天使と悪魔ゲームというゲームを改造したのになります。LIAR GAME大好きなんで（笑）

予選A会場2 ハンターとの戦い

順調に進む接触。だが、運の悪い者は誰とも会えず接触ができない状態になっていた。

そんな状況下に陥っている人が、ここにも1人…

インデックス「始まってから5分、誰とも会えないよ…」

インデックスだ…

インデックスは開始早々下の階へと向かったが、ちょうど下の階にいた日奈森あむが下に行ってしまったため、運悪く会うことが出来なかったのだ。

予選の序盤、まずは運の勝負…

インデックス「あ、でも誰かいたよ！おーい！」

インデックスがだれかを見つけた。その人物はインデックスの声に反応して振り返る。

ハンター「……………」

ハンターだ…

当然ハンターはインデックスを追う。

インデックス「うそ!?!」

インデックスは逃げる。だが、もとの運動能力と服のせいで、まったく速く走れない！ハンターとの距離は、5秒弱で0になった。

インデックス「いやあああ！」ポンッ

インデックス確保 ポイント - 8

ハンターは、陸上選手以上の脚力と持久力を持ち、視界に入った逃走者を、見失うまでを追い回す。見つかったら、逃げ切るのは容易ではない…

.....

プルルルル…プルルルル…

藤田「おや、メールですか。しかも2通も届いていますね」

1通目は、確保情報。

上条「なになに『旧館7階にてインデックス確保。インデックスのポイントが8点減点される。』あいつ捕まったのか、速いな…」

2通目は、本部からの通達だ。

唯世「ミッションじゃないみたいだね。えーと『早くも1人が確保されてしまった。これからどんどん確保者数が増えることを想定すると、最終結果のポイントがマイナスだらけになることが想定される』うん、たしかにそうだね」

空海「そこで、今から10分間ハンターに対抗するアイテムを1階の売店で売ることにした」ハンターと戦えるのか！すげえ！」

美琴「アイテムはポイントと引き換えで購入できる。買った結果ポイントがマイナスになっても問題ない。ただし、購入できるアイテムは1人1つまでだ。尚、アイテムは本戦には引き継がれない」
……よし！」

本部通達 ハンターに対抗せよ！

確保者の増加を避けるため、売店でハンター対策アイテムを買える。ポイントと引き換えで買うため、当然買うと勝ち上がりの可能性が減る。

購入できるアイテムは1人1つまで。

予選でアイテムを使わなくても、そのアイテムは本戦には引き継ぐことはできない。

買うか買わないかは、逃走者次第だ……

……

一ノ瀬「そろそろ、動こうかしら？でもここ17階なのよね……」

始まってから1歩も動いていない一ノ瀬。売店は1階にあるため、アイテムを購入するためには階段を多く降りなければいけない。

一ノ瀬「仕方ない、行きましょっか」

一ノ瀬はアイテムを買いに行くために、階段を駆け下りた。

一ノ瀬「あと少しね……あら？あれはなにかしら」

階段を下りていると、4階と5階の間に人だかりを発見した。

一ノ瀬「何をやってるの？あなたたち」

沼川「お、一ノ瀬か。みんなアイテム欲しさに階段下りてたらさ、なんか集まっちゃまって、今接触してるんだ。お前も加われよ！」

一ノ瀬のクラスメイト、沼川…

一ノ瀬「なるほどね…」

集まっている人数は一ノ瀬を除くと6人。つまり、ここで接触に加われれば、一気に+6ptだ。

一ノ瀬「そうね、接触するわ」

この集団の中にいたのは、真城りま、相馬空海、ユーノ・スクライア、佐天涙子、竜崎悠太、沼川康太、一ノ瀬 玲奈の7人。この7人は、一気にポイントが+6されたことで、優勢になった！

.....

7人は売店に到着した。売店には客はおらず、この7人が最初の客のようだ。

店員「いらっしやいませ。ハンター対策用のアイテムはこちらとなります」

店員は3つのアイテムをとりだし、説明を始めた。

無敵サングラス 価格 3pt

逃走中でおなじみのアイテム。かけるとハンターに逃走者と認識されなくなり、追いかけられない。効果は1分間続く。(一時しのぎ用)

ハンター剤 価格 5pt

殺虫剤のハンター版。ハンターにかけるとハンターが苦しみ走力が小学生レベルまで半減する。3回使えるため無敵サングラスよりお得かも? 注 小学生にすら勝てない人の使用はご遠慮ください。

金の小判 価格 7pt

ハンターを買収出来る。使用者はそのハンターから予選中ずっと追いかけられずに済む。

店員「どういたしますか?」

佐天「無敵サングラス頂戴」

沼川「ここは金の小判だ!」

竜崎「効率的に言えばここは、ハンター剤だな」

皆が好きなアイテムを購入していく。そして、購入結果はこうなった。

無敵サングラスを購入した人

佐天 涙子 ユーノ・スクライア 真城りま

ハンター剤を購入した人

竜崎悠太 一ノ瀬玲奈

金の小判を購入した人

相馬空海 沼川康太

りま「……………ハンターよ！」

6人「え！？」

ハンターの存在に気づき7人は2階への階段を駆け上る！2階で止まった人、さらに上の階に逃げようとする人、行動は様々だが、それでも最終的に追いかけられたのは…

ユーノ「えええ！僕！？」

最後まで階段を上り続けた、ユーノ。必死に階段を上り続けたのに、なんと哀れな男だ…

ユーノ「しょうがない…か」

ユーノはたった今購入した無敵サングラスをかけ、何とか乗り切った。

予選開始からすでに15分。アイテムを買った7人と、確保されたインデックスを除いた逃走者は、思うように他の逃走者と会えず、ポイントが2〜4で止まっていた。

果たしてこの先どうなるのか……………！

予選A会場2 ハンターとの戦い（後書き）

アイテム出しました！

アイテムは無敵サングラスのみ逃走中からの引用で、他の2つは作者自身が考えました。そのおかげでずいぶん変なアイテムが出来ましたね……

予選A会場3 新たな通達

美琴「ハンター剤買ったはいいけど、3回も使う機会あるのかしら……」

御坂美琴は、旧館の売店でハンター剤を購入し、現在は旧館3回にて他の逃走者を探している。

そこに、1人の逃走者が現れた。

なのは「うん。次はどっちに行ってみようかな？」

高町なのは…彼女は最初の5分こそ数人の人に会えたが、それから10分は誰とも会えないでいた。

そんな彼女の前に、ハンター…

なのは「ふえ！？ハンター！逃げないと！」

場数を踏んでいる者の経験か、なのははハンターより一瞬早く反応し、まっすぐな廊下を一直線に走る。

しかし、当然ハンターはなのはより速い。最初にあつた2人の距離が嘘のように縮まっていく。

美琴「って、こっちに来ないでよっ！」

なのはが逃げた先には美琴がいた。

美琴「ここが使いどころね…」

美琴はハンター剤を構える。このアイテム、ハンターに接近して使わなくてはいけないため、使うのに失敗した場合、文句なく確保されるだろう。

美琴「えいつ!」

シューー

ハンター「……………!」

ハンター剤は命中したようだ…

美琴「なのはさん、逃げましょう!」

美琴はなのはの手を引っ張り階段を下りる。そして、新館と旧館をつなぐ廊下を渡り、新館の中に入った。

ハンターは、追ってこない。どうやら、撒いたようだ…

美琴「はあ…どうやら、効いたようですね、ハンター剤」

なのは「うう、いつも戦ってる敵より怖いよお…」

美琴「なのはさん、絶対私より年上ですよね?なんで私に抱き着いているんですか?」

ハンターへの怖さが見せた、無意識の行動である…それほどにハンターは怖いのだ。

5分後、なのはが正気に戻り、美琴と接触をした。

高町なのは・御坂美琴 接触完了。

.....

予選開始から20分。逃走者に新たに一つの選択が迫る。

プルルルル…プルルルル…

フェイト「わっ！びっくりした、メールか…また本部通達か『このホテルの中に、30枚の封筒がばらまかれた』封筒…？」

黒子「『封筒の中には紙が入っており、その紙には入場券と書いてある。獲得すれば、新館19階のVIPルームに入ることが出来る』入ってどうするんですの…？」

インデックス「『VIPルームには5人のVIPと呼ばれる者たちがおり、その者達は腕輪をしている。つまり、接触ができる』ってことは一気に5ポイント！逆転のチャンスなんだよ！」

のび太「『但し、30枚の封筒のうち入場券と書いた紙が入っているのは10枚しかない。封筒を探すかは、君たち次第だ』つまり、これも運になるんだね」

本部通達2 VIPルームに入場せよ！

ホテル内に、30枚の封筒がばらまかれた。

中に入っている入場券を使うとVIPルームに入ることが出来る。

VIPルームには5人のVIPがおり、5人全員と接触ができる。但し、30枚の封筒のうち入場券が入っているのは10枚だけ。封筒を探すかどうかは、逃走者の自由だ。

.....

通達を受けた入場者たちは、封筒を探そうか悩んでいた。封筒を捜し、さらに19階まで行くとなれば、当然、ハンターに見つかるとスクリューが高まる。

そんな中、早々に封筒獲得を決意したものがいた。

インデックス「これはもう探すしかない！」

唯一の確保者インデックスに続き……

上条「ま、5ポイントなら探してみるか」

はやて「ここはいった方が得なのかもしれんし……やるか！」

あむ「ポイント少ないし、やってみよう！」

クロノ「ここで成功すれば、予選通過の可能性が高まる！ここは勝負に出る！」

フェイト「これは……やってみる！」

上条当麻、八神はやて、日奈森あむ、クロノ・ハラオウン、フェイト・テストアロツサ・Hが封筒を探すことを決意した。

そしてもう1人、この入場券探しを攻略しようと考えてる者がいた。それは…

竜崎「ん？これは…」

竜崎悠太。今、何かに気付いた模様。

竜崎「この入場券探し、うまく利用すれば予選通過を確定できるかもしれない…」

……

なのは「もうハンター怖いし、動くのはやめて、ここに来た人と接触しよう…」

新館1階、ロビーにいる高町なのは。ハンターが怖いため動けない。しかし、そんな彼女の前に…

なのは「あれ、これって封筒？」

なのはは落ちていた封筒を拾い、中を確認する。

なのは「入場券…ってこれ当たり？」

なんと3分の1の確率の入場券を当ててしまった。

なのは「うわあ、どうしよう…動きたくないし、VIPルームは19階だし」

いま彼女がいるのは1階。19階に行くには階段を200段は上ら

なくてはならない。いかに鍛えている彼女とはいえ、200段の階段はさすがにきつい…どう走っても体力的に5分はかかってしまう。なのは「しょうがない、行こう…」

歩き出したなのは。しかし、それを遠くで見ていた者がいた。ハンターだ…

なのは「うわああ、ハンター来たっ!!」

10分もたたないうちに2度目のハンターとの遭遇。果たして、逃げ切れるか!

なのは「アツ…!」ポンツ

鍛えられた彼女の足をもつてしても、ハンターからは逃れられない。これが、中途半端な決断をした者の、末路だ…

高町なのは確保 ポイント - 8

プルルル…プルルル…

フェイト「『確保情報 新館1階にて、高町なのは確保。高町なのはポイントが8点減点される』なのは…捕まっちゃったんだ」

新館3階で封筒を探していたフェイトは、仲間の確保にひどくショックを受けた。

フェイト「もっと封筒捜したいけど、なのはの所に行こう…」

フェイトとなのはの距離は近い。フェイトはなのはに会いたい一心で階段を駆け下りた。

.....

なのは「あーあ、捕まっちゃった」

ハンターにつかまったなのはは、すっかりやる気をなくしていた。そんななのはに、フェイトが駆け寄った。

フェイト「なのは！」

なのは「フェイトちゃん！どうしたの？」

フェイト「なのはが確保されたって聞いて、封筒捜すのやめて降りてきたんだよ。大丈夫？」

なのは「ありがとう、フェイトちゃん。でも、たぶんもう私勝ちあげられないと思うからこれ、フェイトちゃんにあげる」

なのはがフェイトに差し出したのは、VIPルームへの入場券だった。

フェイト「え...？いや、ダメだよ！それ持ってるなら、まだ逆転のチャンスあるって！だから、一緒に行こう？」

なのは「でも...」

??「フフフ、逆転の可能性？何言ってるんだお前ら」

フェイト「誰!？」

笑いながら2人に近づき、話しかけたのは…

竜崎「お前ら、逆転の可能性なんてものにかけてるのか？実に哀れだな」

竜崎悠太。彼の手には、すでにVIPルームへの入場券があった。先ほど立ち寄った旧館2階で見つけ、今はVIPルームに向かう途中だったのだ。

フェイト「哀れってどういうこと！予選通過の希望を持つちゃいけないってどういうの!？」

なのは「フェイトちゃん、落ち着いて…」

フェイトは哀れと言った竜崎に対し感情をむき出しにした。

しかし竜崎は、それを無視して話を続けた。

竜崎「可能性なんて、そんな不確定なものに頼る必要はない。なぜならこの予選には今、絶対に勝てる必勝法が生まれたから…!」

予選A会場3 新たな通達（後書き）

果たして竜崎の必勝法とは…？

予選A会場。いよいよ頭脳戦が始まる！

予選A会場4 A会場終了!

フェイト「必勝法…そんなものあるの?もし嘘だったら……」

フェイトが竜崎を殺気のこもった眼で睨む。

竜崎「おいおい、それは勘弁してくれ。ちゃんと教えてやるよ。必勝法をな…」

竜崎はフェイトとなのはに必勝法を教えた。それを聞いた2人は、思わず口を手を当てて驚いた。

フェイト「…確かに、勝てる。というかなんで私はこんな単純なことに気付かなかつたんだろ…」

なのは「ほんとに驚くくらい単純なの」

竜崎「だろ?わかつたなら、早速作戦実行だ」

竜崎の必勝法とはなんなのか?予選はいよいよ終盤戦に突入する…

.....

封筒がばらまかれて10分。入場券を探していた者たちのほとんどは、入場券を獲得していた。

はやて「ん?これ入場券やん、ラッキーや!」

クロノ「4枚封筒あけてやっとあったか…」

インデックス「お！あったよ！これなら何とかなるんだよ！」

あむ「よし、これで5ポイント獲得！」

この4人が入場券を獲得し、VIPルームへ急ぐ！

そんな中、なのは同様入場券を探してもいないのに見つけてしまうものも…

ドラえもん「見つけちゃった、行こうかな…」

美琴「偶然見つかったけど、ここ旧館6階なのよね。遠いなあ…」

彼らは基本的にVIPルームのある新館19階から離れた場所にいる。だからこそ封筒ではなく逃走者のほうを探していたのだ。

だが、封筒を手にしてしまえばどれだけ遠くても、5ポイントの誘惑に負けて、VIPルームへ向かってしまう。果たしてその選択は吉と出るか、凶と出るか？

上条「これで8枚目…またはずれかよ！」

一方上条当麻は、その不幸体質から封筒を開けまくっているのに入場券が引けないという事態に陥っていた。

基本的に、入場券が入っている確率は3分の1。そこその確率だが、当麻は8枚封筒を開けても入場券が引けていない。なんとという不幸体質だ…

.....

VIPルームに向かう6人。まず最初に現れたのは…

美琴「え…もしかして1番乗り？」

なんと、旧館6階にいたはずの御坂美琴。持ち前の運動神経で、VIPルームに向かう他の逃走者を、抜かしてきたのだ。（もちろん出会った逃走者とは接触をしている）

竜崎「残念だが、1番乗りはお前じゃない」

美琴は1番ではなかった。先に竜崎、なのは、フェイトが到着し、VIPルームで竜崎、なのはがVIPと接触を済ました後、VIPルーム近くのソファアに座っていたのだ。

美琴「あんたたち、いつの間にも！」

竜崎「さつきからソファアに座ってたぞ。もしかして、全力で走ってきて周りが見えていなかったか？」

美琴「う…うるさいわね！」

美琴は文句を言いながらVIPルームへ入っていった。

美琴「あなたたちがVIP？早く接触しましょう」

VIP1（瀬川泉）「いいよ」

VIP2（花菱美希）「おお！次は君か！」

V I P 3 (朝風理沙) 「待っていたぞ！」

V I P 4 (鷺ノ宮伊澄) 「よろしくおねがいます…」

V I P 5 (霞愛歌) 「よろしくね〜」

全員、ハヤテのごとく！キャラクター（超金持ち）である。確かに、相当のVIPだ…

VIPと接触したことで、美琴のポイントは5あがった。彼女はこれで予選通過濃厚だろう。

竜崎「これで終わりってわけじゃないだろ？」

立ち去ろうとする美琴を竜崎が呼び止めた。

美琴「そういえば、あなたたちとはまだ接触してなかったか…」

美琴は3人と接触をし、ポイントをさらに3増やした。

美琴「じゃあ、本戦で会えたら会いましょう」

美琴はハンター剤を構えて階段を降りた。いま彼女が恐れるべきなのはハンター。捕まってしまうえば19階で増やした8ポイントが一気になくなってしまうからだ。

竜崎「ハンターが怖いなら、ここにいろよ。ここにはお前を含めて4人いるから、ハンターから逃げられる可能性も高いし、VIPルームに来た人間と、接触することが出来る」

美琴「あ、確かに…」

竜崎の必勝法。それはVIPルームに着いて、VIPと接触したあと、階段を下りずにVIPルームの近くで待機する。こうすれば、VIPルームに来た人間と接触ができる。単純明快。

だが、こう言った緊張した場面では、目先のポイントやミッションにつられて、案外それに気づけない。

しかし、竜崎に限りそれはない。主催者からの通達などその場の状況最大限利用して、自分の立場を優位にしていくのだ。

.....

その後も続々と、VIPルームに人がやってきた。

はやて「よし、これで到着やな」

あむ「疲れたけど、これで何とかなっただね」

クロノ「確実にポイントを得た。いい流れだ」

インデックス「これで、逆転できるかもだよ！」

竜崎たちは確実にやってきた逃走者を仲間に取り入れ、ポイントを増やしていった。

だが、VIPルームに来るのは、逃走者だけとは限らない。招かれる客が1人、やってきた…

クロノ「ハンターだ！みんな、逃げる！」

クロノ以外「うわああああ！」

美琴「この！」

美琴は今日2回目のハンター剤を使用した。

美琴「これで何とか大丈夫なはず！」

ハンター「……………！」

ハンターの走力が小学生並みになっている間に、逃走者たちは逃げる！

だが、逃げられない者が2人いた。

あむ「小学生並みになるって、あたしは小学生だー！」

インデックス「走りづらくて逃げられないよ！」

あむ、インデックスと他の逃走者の距離は瞬く間に広がり、ハンターとの距離は一向に変わらなかった。

そして、2分ほど逃げたところで、ハンター剤の効果が切れてしまった…

当然、距離は縮まる。ハンターとのガチ勝負では、2人が勝てるわけもなく…

あむ「ハンター速くなった!?」ポンッ

インデックス「もうやだよおお!」ポンッ

日奈森あむ・インデックス確保 ポイント - 8

プルルルル…プルルルル…

三条「確保情報ですか…」新館19階にて、日奈森あむ、インデックス確保。2人のポイントが8点減点される『JOKER…そしてインデックスさん、2回目ですか…」

ハンター剤、唯一の弱点だ…

いよいよ予選終了まで5分を切った。上位陣は安易に予想がつくだろうが、問題なのが下位陣、脱落する逃走者だ。かなりの混戦が予想されることから、最後の5分が勝負所であることは間違いない。

…

静香「あと5分、どうしよう。いま私4ポイントだから、たぶん予選落ちだろうな…」

この55分買い物にも行かず、封筒も探さず、ただひたすら逃走者だけを探していた源静香。当然だが、4ポイントで予選が突破できるわけではない。

しかし、ここに神のような幸運が舞い降りた!

クロノ「みんな、大丈夫か？」

竜崎「俺はな。ただ、日奈森とインデックスが捕まった。それが残念だ」

竜崎は、日奈森あむのことを名字で呼ぶ。初対面だからだろうか、さすがにあむとは呼べないのだ。

なのは「はあ、フェイトちゃん、大丈夫？」

フェイト「なのはこそ、疲れてない？」

ハンターから逃げてきた竜崎達御一行。静香たちの前にこの9人が現れたのだ。

静香「あの…私と接触してください。私今4ポイントで、このままだとたぶん予選落ちするんで…」

静香はこの中の誰とも接触していない。つまり、ここで接触すれば静香のポイントは一気に+9だ。

クロノ「いいよ。僕らのポイントも増えるんだし」

まずクロノが了承。それに続くようにして、他の8人も了承した。

.....

予選終了まで1分を切った。と、ここにもものすごい勢いで走っている1人の男がいた。

上条「12枚目の封筒でやっと入場券手に入れた！間に合え！」

上条はずっと入場券を捜し、やっと手に入れたのだ。現在新館15階の階段を上っている。

残り30秒。

上条「うおおおおおお！ぐはっ！」

誰かにぶつかった。それは、最後の最後でVIPルームに行くのを決意したドラえもんだった。ドラえもん、なぜもつと早く行かなかった…

ドラえもんは丸い体で階段を転がり落ちて行った…

上条「止まるわけにはいかねえ！」

上条はドラえもんを無視して階段を上り続けた。

残り10秒

9

8

2

3

上条「よし、3人と接触！あと2人！」

4

5

6

7

上条「やっと着いた！早く接触を！」

上条「あと1人！」

1

上条「間に合ったー！」

0

予選A会場終了！

予選A会場 4 A会場終了！（後書き）

タイトル通りA会場が終了しました。

なんか最後が当麻奮闘記になってましたがそこはスルーで（笑）

果たして勝者は誰なのか、結果は次回！

予選A会場5 結果発表!

予選A会場は、60分の長い戦いを終え、逃走者たちはロビーに集まっていた。

「これより、結果を発表する。まずは1位から5位を発表する。大型スクリーンに注目せよ」

ロビーにあつた大型スクリーンに結果が映し出された。

1位	竜崎悠太	19 pt
2位	クロノ・ハラオウン	18 pt
2位	八神はやて	18 pt
4位	御坂美琴	16 pt
4位	上条当麻	16 pt

竜崎「まあ、当然だな」

クロノ「こんなに上の方にいたのか……」

はやて「まさかクロノ君と同点とはな……」

美琴「よし、とりあえずは本戦出場ね!」

上条「はあ……はあ……さいごに……走ったかいたが……たぜ……」

予選通過が決まった逃走者は安堵の声を漏らす。

「次に、6位から10位を発表する」

6位	源静香	13 pt
7位	フェイト・テストロツサ・H	12 pt
8位	高町なのは	11 pt
9位	一ノ瀬玲奈	10 pt
9位	ユーノ・スクライア	10 pt

静香「やったわ！最後の接触で逆転したのね！」

フェイト「これは…竜崎のおかげね」

なのは「すごい…本当に逆転できた」

一ノ瀬「何とか予選突破ね。でも、まだまだこれからよね…」

ユーノ「僕なんかが残って、よかったのかな？」

10位までが発表された。おそらくここから先は混戦になっているだろう。2回確保されたインデックス以外なら、誰が勝ち上がってきてても、不思議ではない…

「最後に、11位から15位を発表する。ここで選ばれなかったものは、予選敗退となる」

皆、「そんなことは分かっている」といった表情で正体不明の声を聴く。

「では、表示する…！」

11位 三条海里 9 pt

1 1位 結城秋子 9 p t
1 3位 骨川スネ夫 7 p t
1 4位 真城りま 6 p t

三条「ぎりぎり…ですね」

結城「これで、まだ戦えるんだね…」

スネ夫「へへーん。運だけで残っちゃったもんね」

りま「ま、本戦もやってみるわ」

4人まで発表された。だが、その先が発表されない。

「この先の15位だが、5ポイントで3人いた。しかし、3人とも本戦出場は許されない。そこで、くじを引いてもらい、あたりを引いた逃走者が本戦進出となる。では、3人の名前を発表する」

1 5位 日奈森あむ 5 p t
1 5位 野比のび太 5 p t
1 5位 白井黒子 5 p t

最後の確保が致命的となったあむ。そして、目立った動きも見せず地道にポイントを稼いでいたのび太と黒子。この3人が15位となった。

獄寺「そういついいうわけで、もう1度くじ担当としてきたぜ。めんどくせえけどよ…」

「15位の3人はくじをとり、結果を獄寺隼人に報告せよ」

最初にくじ箱に手を入れたのは、日奈森あむ。果たして、あたりを引けるか…

あむ「えいつ！」

あむは折りたたまれた白い紙を開く。そこには…

ハズレ 前世からやり直せ

あむ「…馬鹿にしてるのこれ!？」

・・・

のび太「次は僕の番だね。いくぞー！」

のびたが引いた紙には…

ハズレ 悔しければやりなおせ。いつそ人生をやり直せ。

のび太「ドラえもん！」

ドラえもん「むぎゅー」

ドラえもんは、階段から転げ落ちたせいでいまだに起きない…

・・・

黒子「ということとは、わたくしが15位ですか？」

もはやくじを引くまでもない黒子…

獄寺「まあ、今回はひかなくてもいいか…じゃあまたな！」

獄寺はA会場のホテルから出て行った。

「これにて、A会場予選を終了する。逃走者25名はバスに乗り、本戦会場へ移動すること。それではまた会おう」

その声を最後に、放送は途切れた…

予選A会場終了 結果

予選通過者

しゅごキャラ！

三条海里

真城りま

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s

高町なのは

フェイト・テストロッサ・H

八神はやて

ユーノ・スクライア

クロノ・ハラオウン

ドラえもん

源静香

骨川スネ夫

とある科学の超電磁砲

上条当麻

御坂美琴

白井黒子

オリジナルキャラ

竜崎悠太

結城秋子

一ノ瀬玲奈

予選 A 会場 5 結果発表！（後書き）

これで A 会場は完全に終わりです。

あれ？リリカルなのは全員残ってない？と気づいたのは書き終わった後。別に作品ひいきとかではないのですが、予選書いてたらなぜかそうなっちゃったんですね…

それと、くじのあの文章。どこかで見たとあるな…って方はいらっしやると思いますが、どこで見つけた？となる方がほとんどだと思います。

もしわかったら感想にでも書き込んでください。どこの文章かあてた方は天才です！

次回は予選 B 会場になります。

あ、じゃあ読者の皆様にだけ少しネタバレを…

A 会場とは予選の内容が全く違います。

予選B会場1 予選スタート(前書き)

この予選では麻雀が出てきますが、麻雀のルールを知らなくても全く問題ないのでご安心ください。

牌の表記の仕方

マンズ 一〇九

ソーズ ？〇？

ピンズ 一〇九

字牌はそのままです。

予選 B 会場 1 予選スタート

獄寺に連れられて、予選 B 会場の逃走者たちは巨大なビルの前にやってきた。

ツナ「ちょっと、ここどこ、獄寺君？」

獄寺「いや、俺も詳しくは知らされてないんですが、どうやら逃走中の会社が持つてるビルみたいですよ」

コナン「ビルの階層の数は…30といったところか」

ヒナギク「さすがに、緊張するわね…」

25名の逃走者は、ビルの中へ入っていった。

安岡「なんだ…あの大型スクリーンは」

ビルに入った逃走者が一番最初に目にしたのは、天井からぶら下がっている大型スクリーン。逃走者全員がスクリーンをまじまじと見つめていると、突然仮面をつけた男が映し出された。

小五郎「なんだあいつは、悪趣味な仮面だな」

マリア「少し、怖いですわね…」

仮面の男に逃走者たちは思い思いの感情を抱く。だが、その感情を無視するかのように、仮面の男は放送で逃走者たちに語りかけた。

仮面の男「みなさま、ようこそお越しくださいました。私、今回の予選のメインディナーを務めさせていただきます、レロニラと申します」

ゆみ「ホテルのやつとは違い、敬語だな…」

池田「でもそれが逆に怖いし！」

ワタル「あの仮面の男、どっかで見たことある気がするんだよね」

レロニラと言った男は、早速予選の内容について話し始めた。

レロニラ「今回の予選で皆様に行っていたくのはあるゲームです。そのゲームとは…」

仮面の男が一瞬消え、ゲーム名が映し出された。

『^{メン}面子構成ゲーム』

咲夜「なんやそのわけのわからんゲームは？」

歩美「面子って何…？」

突如知らされたゲーム名に、逃走者たちは、動揺を隠せないようだ…

レロニラ「このゲームは、その名の通り面子を作るゲーム。それだけ言ってもわからないでしょうから、最初から説明いたします。一度しか説明しないので聞き逃さないようにしてください」

逃走者たちはその言葉につばを飲み込んだ。

レロニラ「ここは、30階建てののオフィスです。この1階のロビ
ーと最上階以外は、すべてパソコンとデスクなどが置いてある、基
本的なオフィスとなっております。このオフィス内に、136個の
宝箱が置いてあります」

ー「136つて…」

カイジ「ほう、面子ってそういう意味だったのか」

鷺巣「これはわしの予選突破は決まったようなものではないか」

何人かの逃走者はすでにあたりがついていて、それは的中する。

レロニラ「宝箱の中には、麻雀牌が1牌入っております。逃走者の
目的は、その宝箱から牌を取出し、面子を2つ構成することです。
面子が出来たら1階のロビーにいる担当者に牌を渡し、チェックを
受ければ予選通過となります。時間は無制限、先着15名！その1
5名がこのゲームでの予選通過者となります」

つまり、いかに早く、2面子をそろえるか。有効牌を引き入れるか
が、勝負のカギとなる…

ツナ「あの、俺麻雀とか知らないんだけど…」

歩美「歩美も、全然わかんない！」

山本「はは、実は俺もなんだ」

麻雀は大人のゲームだ。だからこそ、麻雀を知らない逃走者も少な

からずいる。しかし、このB会場は麻雀を理解している者が多いため、このゲームをやるにはうってつけの組み合わせだったのだ。

レロニラ「ご安心ください。このゲームは、麻雀のルールを理解する必要はありません。ただ、面子という言葉の意味だけを覚えておいてください」

面子とは：麻雀における基本的な牌の組み合わせ。ほとんどの場合3枚で1面子となる。

麻雀の牌は大きく分けてマンズ、ソーズ、ピンズ、字牌の4種類。そのうち字牌を除いた3種は、1〜9の数字の絵が書かれており、数牌と呼ばれている。下にいくつか例を挙げる。

- 一 これはマンズの1である。
- 三 これはマンズの3である。
- ? これはソーズの2である。
- ? これはソーズの6である。
- 4 これはピンズの4である。
- 9 これはピンズの9である。

これに、東南西北白發中という字牌を加えて、麻雀の牌は34種。この34種がそれぞれ4枚あるので、麻雀の牌は全部で136牌ということになる。

面子の作り方：同じ種類の牌3枚を使い連番を作るか、まったく同じ牌を3枚集めると1面子となる。

順子^{シュンツ}：これは同じ種類の牌3枚を使い連番を作ると出来る。下にいくつか例を挙げる。

四五六 これは、マンズの4、5、6で構成された順子である。

??? これは、ソーズの1、2、3で構成された順子である。

678 これは、ピンズの6、7、8で構成された順子である。

刻子^{コウツ}：これは、まったく同じ牌を3枚集めると出来る。下にいくつか例を挙げる。

二二三 これは、マンズの2を3枚使って構成された刻子である。

??? これは、ソーズの1を3枚使って構成された刻子である。

777 これは、ピンズの7を3枚使って構成された刻子である。

.....

レロニラ「面子についてはご理解いただけただけでしょか？このゲームはこの面子を2つ作っていたのですが、1つだけ例外がありません。それは、刻子ができた場合は1面子でいいということです。刻子は、順子より何倍も構成されにくい面子だからです」

つまり、刻子が出来れば一発でクリアということになる。だが、おそらくそんな簡単にはできないだろう。順子2つを作るより、刻子

1つを作る方がおそらく難しい。

レロニラ「尚、このビルにはハンターが2体おり、捕まると自分の持っている麻雀牌をランダムに2牌捨てられてしまいます。皆様、ハンターには十分お気を付けください」

予選B会場 面子構成ゲーム ルール

逃走者は別々の場所からスタートし、宝箱を見つけ牌を獲得し、2面子作ることを目指す。

2面子できたらロビーにいる担当者に確認を受け、予選通過を確定させる。

時間は無制限。先に2面子を作った15名が予選通過となる。

ただし、刻子に限り1面子でも構わない。

尚、このビルにはハンターが2体いる。

ハンターにつかまっても失格にはならないが、自分の持っている牌を2牌捨てられる。

この予選では、携帯電話が使用できる。

.....

先ほども説明したとおり、このビルは30階建てとなっている。だが、基本的にパソコンやデスクが置いてあるだけとなっている。その構造が、これだ。

30階 会議室・社長室

2～29階 パソコン・デスクなどが置いてある。

1階 ロビー

そしてついに、予選開始のカウントダウンが始まった…

1
0

9

8

7

6

予選B会場
スタート!

0

1

2

3

4

5

予選B会場1 予選スタート（後書き）

予選B会場、面子構成ゲームスタート！

果たして誰が勝ち残るのか…？

予選B会場2 面子作り

カイジ「始まった…俺の勝負…！」

良平「うおおおっ！やるぞおおお！」

和「とりあえず、宝箱を探さなければですね…」

ゲームがスタートして10秒。早速、逃走者たちは宝箱を探しに行く。

ワタル「あれ？宝箱目の前にあるじゃねえか。ラッキー！」

開始早々宝箱を見つけた、レンタルビデオ店店長。果たして中身は…

ワタル「？か。使えそうだな」

数牌の4と6は、他の牌とのつながりが多く、順子ができやすい牌。ワタル、幸先のいいスタートをきった…

そして、他の逃走者も…

安岡「おおっ！二があっただ！」

クローム「フ…よかった、見つけられて…」

アカギ「ククク、2だ」

池田「？…いまいちだけどこれでいいか」

ヒナギク「みつけたわ！これは…南ね」

小五郎「おっしゃ、3だ！」

宝箱の数は136個。階層の数は30。1つの階に4、5個の宝箱があるため、牌を見つけること自体は比較的簡単だ。

……

ゲーム開始から10分。すべての逃走者が牌を3つ程度は獲得していた。そして、いまだにだれもハンターに見つかってすらいない。それはこのB会場の逃走者が持つ、強運なのか…

しかし、それでも問題はあった。

コナン「なかなかメンツができねーな…」

コナン所有牌

九??

鷲巢「わしの強運をもってしても、このゲームは厳しすぎるのではないか？」

鷲巢所有牌

78東北

ハヤテ「僕は不幸ですので、こんなおしか来ません…」

ハヤテ所有牌

そう、面子が1つもできないのだ。それに、ゲームが進めば進むほど、宝箱の中に牌はなくなっていく…

そもそも、25名の逃走者全員が、2面子作るのに必要な6牌を集められるわけではない。1人あたりが獲得できる牌の数は、136÷25で5.44牌。面子を作る前に、牌すら集められないこともある。

このゲームも、予選Aと同じく、勝つのは体力と知力を兼ねそろえた者。さあ、攻略法を見つけられるか…

ヒナギク「そうよ、他の人と牌を交換すればいいのよ！そうと決まればさっそく電話ね…」

交換に気付いたのは、生徒会長、桂ヒナギク…

ヒナギク「誰に電話しようかな…ハヤテ君はどうせロクな牌持っていないだろうし、やっぱりここはマリアさんね」

プルルル…プルルル…

マリア「あら、ヒナギクさんからですわ。もしもし…」

ヒナギク（声）「あ、マリアさんですか？もしよかったら、牌を交換しませんか？私今、？と？と8と南を持ってるんですけど…」

マリア「あら、いいですわね。私は？と6と7を持ってるんですよ。私か？をあげて、ヒナギクさんから8をもらえば、お互いに面子ができますね」

ヒナギク（声）「わかりました。なら、私がマリアさんのところまで行くので、場所を教えてくださいませんか？」

マリア「はい、私は今7階にいます。ハンターに気を付けてくださいね」

マリアはそう言って電話を切った。そして1分後…

ヒナギク「お待たせしました。では、交換しましょう」

マリア「そうですわね」

この交換で、ヒナギク、マリア共に、1面子を完成させた。

……

担当者「暇ね」

1階、ロビーで牌のチェックをする担当者。ゲームが始まって15分間、彼女は何もすることがなかったのだ。

担当者「せめて1人位来てくれれば、暇をつぶすくらいの話はできるんだけどな…おっ！来たか。でも、さすがに早すぎるわね。どんな人なのか、楽しみね」

他の逃走者を出し抜き、いち早く予選通過を確定させたのは…

アカギ「ククク…2刻子だ」

天才…赤木しげる！

担当者「おめでと〜でも早いわね。どうやったの？」

アカギ「たまたま2が2連続で来て、残りの1つは、交換で手に入れた」

純粹に刻子を作ろうとすれば、出来る確率は順子を作るより断然低い。だが、交換という手を利用すれば、刻子は案外できてしまう。アカギは、そこを突いたのだ。

赤木しげる 予選通過 残り14名

.....

ワタル「よし、自力で1面子できたぞ。あと1つだ！」

ワタル所有牌

????三

麻雀は偶然性が高いゲーム。運さえよければ、このくらいはできることもある。

ワタル「ってやべえ！ハンターだ！」

ついに、ハンターに追いかけられる者が出た！ワタルは懸命に逃げる。だが、ハンターの足には敵うわけもなく…

ワタル「ちきしょおおお！」ポンツ！

ワタルの確保と同時に、ハンターはワタルのポケットに手を突っ込み、牌を2牌引き抜いた。

ワタル「あ、おいやめろ！」

ワタルは止めようとするが、ハンターはそのまま走って去って行った。

橘ワタル確保　？と三が捨てられた。

プルルルル…プルルルル…

和「確保情報ですか『橘ワタル確保。橘ワタルの持っていた牌の中から、？と三が捨てられた』かわいそうですが、仕方ないですね…
…痛っ！」

メールを読んでいた和の頭に、何かが落ちてきた。

和「これは、？と三！天井に開いている穴から落ちてきたんですか…」

どうやら、牌が捨てられるというのは、ビルの中に捨てられるということらしい。

和「それにしても、これで予選が通過できます！」

和所有牌（落ちてきた2牌を加えて）

三三三三？西北

和は、三を3枚持ってロビーへ向かった。

.....

担当者「さっきのアカギって人、どうも話しかけづらいのよね」

アカギのオーラに負け、また暇になっている担当者。そこに、和がやってきた。

和「三刻子です。これでいいですよね？」

担当者「はい。オッケーよ。おめでとう」

原村和 予選通過 残り13名

和「.....」

担当者「...えっと、何？」

和は担当者をまじまじと見つめている...

和「あの...部長ですよ。何してるんですか？」

担当者は、清澄高校麻雀部部长、武井久その人だった...

久「あちゃーばれちゃったか。バイトよバイト。ここ給料いいのよね。でも、これしか仕事がないみたいで暇だわ」

和「そうなんですか...」

久「とにかくおめでとう和。本戦もがんばりなさい！」

和「はい！」

和は久に元気づけられ、引き締まった顔で近くのソファ―に座った。

.....

一方他の逃走者たちは、いまだに1面子もそろっていない者がほとんどだった。そんな逃走者たちを見たレロニラが、逃走者たちに最初の通達をする…！

予選B会場2 面子作り(後書き)

おそらくわかると思いますが、2刻子とか言ってるのは、ピンズ
の2が刻子で出来たという意味です。

予選 B 会場 3 面子ができない！

ブルルルル…ブルルルル…

咲夜「なんや、メールか」ゲーム開始から20分が経過しました。しかし、まだ1面子もできていない方がほとんどだと思います」ほんまやな」

石田「そこで、足りない牌2牌とほしい牌を交換する交換マシンというロボットをビル内に3体配置いたしました」交換マシンとは、変なネーミングセンスだな…」

山本「交換マシンはビル内を自由に徘徊しております。見かけたら捕まえて牌の交換をすることが、予選通過への近道となるでしょう」おっしや！捜してみっか！」

咲「尚、交換マシンにあげた不要牌2枚は宝箱の中に戻ります。場にある牌が減ることはないのでご安心ください」よかった…」

本部通達 交換マシンを設置した！

ビル内に3体の交換マシンというロボットを設置した。

交換マシンは自分の不要牌2枚と必要な牌1枚を交換してくれる。

交換マシンはビル内を自由に徘徊しているため、見つけられるかは運次第だ。

尚、交換マシンにあげた不要牌は宝箱の中に戻るため、場にある牌が減ることはない。

.....

鷲巢「フン、わしの目の前にきおったか、交換マシンよ。さあ、有効牌をよこせ！」

その強運で交換マシンと出会った、昭和の怪物鷲巢巖…

一方、他の場所でも交換マシンと出会う者が2人…

咲「あ、いたよ。せっかくだから、交換してもらおうかな…」

ハヤテ「わあ、逢えました！これで何とかなりそうですね…」

この3人の中で、交換マシンと逢ったことで予選通過を決めたものがある。それは…

久「次は誰が来るかしらね〜」

咲「集まりました〜」

清澄の大将。 宮永咲だ…

咲「あれ、部長…何してるんですか？」

久「あ、私はバイトよ。それより、面子が出来たのね。見せてみなさい」

咲「はい！」

咲はポケットの中から3枚の牌を取り出した。と、その時何かに気付いた。

咲「あの、部長。部長の後ろにあるのって、宝箱ですよね？」

1階にあった、隠し宝箱。どう考えても見つからない位置にあるのだが、それに気付く咲…

久「ああ、そうね。咲はもう予選通過するんだからいらないだろうけど、せっかくだからもらっておく？」

咲「じゃあ、せっかくなんで…」

久「えーと中身は…5ね。重要な牌がこんなところにあるなんて、逃走中の主催者もやらしいこと考えるわね。はい咲、記念に取っときなさい」

久は5を咲に渡した。すると咲が、すこし戸惑ってこんなことを言った。

咲「あの…私が持って来たの、5の刻子なんですけど…」

久「なんですって！ってことは、5が檯子カンツになっちゃってこと！？」

咲「そのようですね…」

檯子とは、同じ牌を4枚集めてできる面子のこと。普通の麻雀でもあまり見かけない。ましてやこんなゲームでは出来るはずもないのだが…

久「はあくたまげたわ。分かった。例外的に檯子でも予選通過ということにするわ。さすが咲ね」

咲「えへへ」

久に褒められて、咲は少し顔を赤くした。

宮永咲 予選通過 残り12名

久はこの時、あることを考えていた。

久（さっきのアカギって人が2の刻子を持ってきて、咲が5の槓子を持ってきた…1枚は交換マシンで手に入れたようだけど、それでももう2と5は場に1枚ずつしかない…ピンズ集めてる人は大変そうね…）

その時、面子を集めた逃走者が2人、1階へ降りてきた。

ヒナギク「よかったですね、マリアさん。無事予選通過出来て」

マリア「ええ。でもヒナギクさん、何か私に謝りたいことがあるって言うってませんでしたか？」

新旧生徒会長の2人だ…

ヒナギク「その、交換させてもらったんですけど、その後自力で刻子が出来たんですね…」

マリア「あら、いいじゃないですか。おめでとございます。それで、あの時の順子は？」

ヒナギク「持っててもしょうがないんで、その辺に置いてきちゃい

ました」

桂ヒナギク、自力で刻子を作るほどの運を持っていた…

久「あの〜早く見せてくれない？ハンター来たらシャレになれないわよ」

いつまでも話している2人にイラついたのか、2人をせかす久。

マリア「あ、すみません。はい、これです」

マリア所有牌

678三四五

久「はい、オツケーよ。次の人」

ヒナギク「私はこれよ」

ヒナギク所有牌

888

久（8の刻子！？今マリアって人が8をもう1枚持ってきたから、8はもうないのね。これは、ますますピンスの順子が作りにくくなつたわね…）

ヒナギク「あの…」

久「ああ、ごめんなさい。オツケーよ」

桂ヒナギク マリア 予選通過 残り10名

そしてもう1人、豪運の持ち主で、闇世界を支配し続けた…

鷺巢「カカカ…そろったわい！」

鷺巢…巖。

話は数分前にさかのぼる。

鷺巢「あと必要なのは1面子か…わしの手にかかればそれくらい余裕…ん、なんだこれは？」

鷺巢はパソコンが置いてあるデスクの上に、何かが置いてあるのに気付いた。

鷺巢「これは、???ではないか!どうしてこんなところに…」

そう、これはヒナギクが必要ないといい、おいていった1面子。それを見つけた鷺巢の豪運、恐ろしい…

久「なるほど、そういうことね。鷺頭さん、予選通過よ」

鷺巢所有牌

789???

久(ここにも8があるってことは、ヒナギクって人かこの鷺巢って人は交換で8を手に入れたのね。やるじゃない!)

実際に交換マシンを使ったのは、ヒナギクだ…

鷲巢巖 予選通過 残り9名

.....

ハヤテ「どうしよう、全然メンツができないよ」

安岡「これは…少し厳しいかもしれんな」

クローム「難しい…」

予選を通過した者のように、面子がうまくそろつのはまれ。通常はまだ1面子しかできていないか、もしくは1面子たりとも出来ていないか。もしA会場でこのゲームをやったら、おそらくまだ2人くらいしか予選を通過できていないだろう。それほどまでにこのゲーム、過酷…

そんな中、レロニラが逃走者たちに救いの手を差し伸べる…！

予選B会場3 面子ができない！（後書き）

予選B会場はあと2回で終わりです。

本戦の逃走中が見たい方はあと1日待ってください！何とか仕上げます！

予選B会場4 逃げる！

プルルルル…プルルルル…

良平「お、メールか」ゲーム開始から30分が経過しました。しかし、現在予選を通過できている方は6名と決して多くありません。』
確かに、難しすぎるぞこのゲーム！」

カイジ「そこで、ただいまからハンターを4体追加し、6体のハンターでゲームを行うことにいたしました。』はあ！？難しくなるだけじゃねえか！」

クローム「捕まった際、ハンターに捨てられた2牌は、今まででしたらランダムにビルの中に落とされていたのですが、今からは違う。その時もつともその2牌を必要としている人に渡されることになりました。』…へえ」

本部通達 ハンター4体追加！

逃走者があまり面子を集められないため、ハンターを4体追加した。更に、ハンターに確保されたとき捨てられた2牌はその牌を最も必要としている人に渡される。

……

蘭「これは大変そうね…でも、捕まらなければいいわけだし、何とかなりそうね…」

そんなことを言っている彼女の前に、ハンター…

蘭「うそっ！逃げないと！」

蘭はすぐに走り出す。しかし、ここはビルの中。一度目をつけられれば、逃げ切るのは安易ではない…

蘭「うわっ！」ポンッ

そして、ハンターは蘭の牌を2牌奪った。

毛利蘭確保 3と北が捨てられた。

・・・

そして、蘭以外にもハンターの魔の手が襲い掛かる…！

当然、ものすごいスピードで逃走者は確保されていく…

安岡「くっ！捕まったか…」ポンッ

安岡確保 東と？が捨てられた

ツナ「わああああ！無理だって、やっぱり無理だってー！」ポンッ

沢田綱吉確保 四と？が捨てられた

池田「ハンター速すぎるし！」ポンッ

池田華奈確保 東と7がすてられた

次々と犠牲になっていく逃走者たち…

しかし、他に逃走者にとってはチャンスでもある。なぜなら今捨てられた8牌は、他の逃走者に振り分けられるのだから…！

捨てられた8牌

四??37東東北

重要な牌は多い。案の定、この牌のいくつかを手に入れて、予選を通過した者がいる…

……

久「そのコンビニの店員がね、お弁当温めますかを噛んで、お弁当あたたたた！って言ったのよ」

和「それは、何ともすごいところに遭遇しましたね…」

咲「ハハハ…」

後輩との話の花が咲く、担当者、武井久。そこに、2人の逃走者がやってきた…

ハヤテ「あの、そろいました。東が刻子で…」

ハヤテ所有牌

東東東

コナン「僕も、2面子できたよ」

コナン所有牌

???????

久「はい、2人ともおめでとう。本戦頑張つてね」

綾崎ハヤテ 江戸川コナン 予選通過 残り7名。

ヒナギク「あれ、ハヤテ君。よく予選通過できたわね、あんなに運悪いのに」

さりげなくひどい言葉をかけるヒナギク…

ハヤテ「それが、字牌とか9の牌しかもってないところに東が2枚落ちてきたんですよ。僕はもともと東を1牌持ってたんで、それで刻子ができたというわけです」

ヒナギク「相変わらず、そういうところで運がいいのね…」

.....

灰原「あと7人か、これは、早く作戦を実行したほうがいいわね」

2階で予選通過者の様子を見守っていた灰原。彼女の言う作戦とはなんなのか、今、それが実行される…

ブルルルル…ブルルルル…

歩美「メール…灰原さんからだ」みんなに聞いてほしいことがあつて、このメールを一斉送信したわ。実は私、手牌がこんなんで、もう予選突破は絶望的なの。』灰原さん…」

灰原所有牌

四七？6

雲雀「でも、この牌は結構使える牌よ。だから、この牌のどれかと他の牌を交換してほしいの。そうすれば、私にもまだ勝ちの目が出ると思うから」ふうん…」

石田「もし交換してくれるなら、交換したい牌と自分の今持っている牌、それから自分のいる場所を書いてメールで送って。私がすぐそこに行くから」この子、必死なんだな…」

一斉送信 牌を交換して！ from 灰原哀

灰原が自分の勝ちの可能性を少しでも広げるために、メールを送った。

灰原の持っている牌はいい牌ばかり。これと他の牌を交換してほしいとのこと。

交換してくれるなら、自分の持っている牌とほしい牌、自分の場所をメールで送ること。

すぐさま灰原がその場所に行き牌を交換する。

.....

灰原のメール、これに反応した者が3人…

石田「こんな小さな子をお願いだし、聞いてあげよう」

ワタル「おっ！この牌があれば予選通過じゃねえか！」

歩美「灰原さん。困ってるだろうな…ここは交換してあげよう」

3人は灰原にメールを送信した。

石田 持っている牌 ほしい牌 自分のいる場所

??六七八七 ? 7階

ワタル 持っている牌 ほしい牌 自分のいる場所

?466西 6 13階

歩美 持っている牌 ほしい牌 自分のいる場所

???五六99 四 23階

.....

5分後…

石田「あの子、無事にここに来れるだろうか…」

灰原の心配をしていた石田。そんな石田の背後に、ハンター…

石田「心配だな…」

しかし、灰原のことを心配するあまりハンターに気付かない。そしてそのまま…

石田「えっ？」ポーンッ

石田確保 ?と六が捨てられた。

そして、なぜか他の場所でも…

ワタル「うわっ！捕まるかここで…」ポンッ

歩美「灰原さん、ごめん…」ポンッ

橘ワタル確保 四と六が捨てられた

吉田歩美確保 五と六が捨てられた

なんと、灰原にメールをした3人がハンターに確保されてしまった…

・・・

灰原「うまくいったわ…」

確保情報を見て、不敵にほほ笑んだ灰原。果たして、灰原は何をしたのか…

そして、残る予選通過者は誰になるのか！

予選B会場4 逃げる！（後書き）

次回で予選B会場終了です。

果たして灰原の策とはなんなのか！

予選B会場5 異端の戦略(前書き)

今回で終わりのため、少し短くなっております。

予選B会場5 異端の戦略

話は、数分前にさかのぼる。

灰原は、石田、ワタル、歩美からメールを受け、すぐさまあるところへ電話した。

主催者「もしもし？こちら、逃走中主催者…」

正体不明の主催者。少なくとも、予選A会場で聞こえた放送の声や、レロニラの声とは一致しない。性格も全く違うようだ…

灰原「灰原哀よ。いま私がしようとしていること、あなたにわかるかしら？」

主催者「まあ、見たたからなんとなく想像はつくけど、ほんとにいいの？そんなことして」

灰原「ええ、構わないわ」

灰原がしようとしていること、それは通報…

通報とは逃走者の居場所を教えて、ハンターに逃走者を確保させようという行為。普通、主催者が裏切り者を募集し、裏切り者になった者がやるのだが、灰原の場合は違う。灰原は裏切り者という立場に、立っていない…

灰原「石田は7階、ワタルは13階、歩美は23階にいるわ。じゃあ、後はよろしく」

そして、3人が確保された。

その後、ハンターに捨てられた牌のすべてが、灰原の元へ集まった。灰原はまだ1面子もできていない。加えて持っている牌は真ん中の牌ばかりなので、今ハンターに捨てられた牌を一番必要としているのは灰原ということになる。まさに、異端の戦略だ…

その後、灰原は久に会い、予選通過を確定させた。

灰原「私だつてこんなことしたくなかつたけど、手牌があれじゃあ、しょうがないわね」

灰原が求めたのは確実な勝利。そのために、少年探偵団の仲間、歩美でさえも切り捨てる冷酷な心。彼女はいつたいこれから、どのようにして戦っていくのか…

灰原哀 予選通過 残り6名

.....

その頃、ハンターの存在と、交換マシンの存在が重なり、比較的早く予選通過者が決まっていた。

カイジ「うおおおおっ！勝った…俺は勝った！」

—「なんとか、集められたよ」

咲夜「これで、予選通過やな」

雲雀「フン、これくらいは余裕だね」

クローム「よかった…骸様、本戦もがんばります…」

山本「おっ！間に合ったみたいだな」

この6名が一気に予選通過。これにより、予選B会場、面子構成ゲームは50分で終了した…

……

予選を終えた逃走者たちは、レロニラの話を聞くためロビーに集まっていた。

レロニラ「皆様、お疲れ様でした。ただいまより、予選通過者を発表いたします！」

予選B会場終了 結果

予選通過者

ハヤテのごとく！

綾崎ハヤテ

桂ヒナギク

マリア

愛沢咲夜

咲 - s a k i -

宮永咲

原村和

国広一

家庭教師ヒットマンリポーン！

山本武

雲雀恭弥

クローム・ドクロ

アカギ&カイジ

赤木しげる

伊藤カイジ

鷲巢巖

名探偵コナン

江戸川コナン

灰原哀

発表が終わり、皆がそれを確認し終わった。その時、ちょうどいいタイミングでレロニラが話し始めた。

レロニラ「皆様、改めてお疲れ様でした。それではこれより、本戦会場へと移動します。皆様、ビルの外に止めてあるバスへのご乗車ください」

その声を最後に、放送は途切れ、レロニラの姿も消えた…

予選B会場5 異端の戦略（後書き）

えーと、完全に哀ちゃんが悪役で終わってしまった予選B会場です
（笑）哀ちゃんファンの方ごめんなさい > m (|) m <

予選通過者ですが、ハヤテのごとくが4人、コナンが2人、他は3人と、それほどブレはないように思います。しかし、少しブレが出てしまったのは事実です。コナンファンの方には本当に申し訳ありません。

しかし、読者の皆様にこれだけ言っておきたいことがあります。

ここから先、作者の勝手な発言が続いております。不快な思いをされそうな方は、今すぐ戻るボタンを押して次回を見ていただくことをお勧めします。

作者が書きたいのは、どんなアニメも均等に残るといった、バランスのいい逃走中ではありません。

作者が書きたいのは、各個人が持っている能力で逃走成功者を決定する逃走中です。「強いものが勝つ」これをモットーにやっているつもりです。

まあ、それだけではあまりにもつまらないので、運の要素も入れています。基本的には強い者有利ということにしています。

戦略面に長けた者、体力的に有利な者はどうしたって有利になってきますからね。

だからと言って、「弱い者は負ける」というわけでもありません。

逃走中では、何が起こるかわかりませんよ…

さて、長くなつてしまいましたが、ここまで見てくださったありがとうございます。次回から本戦となります（よっしゃあ！書くぜ！）お楽しみに！

オープニングゲーム クイズの王

ここは、とある部屋。逃走中の主催者は、静かにモニターを見つめていた。

主催者「予選は、なかなか面白かったな。さて、本戦だ。今回の会場は…ここがいい」

主催者は、モニターに映し出された会場の絵を見た。その時、「会場をここにしますか？」という文字が現れた。

主催者は、躊躇いなくYESのボタンを押した…

……

「これより、ゲームを始める…！」

予選の時とはまた違う声が聞こえた。A会場で予選を突破してきた15人は今、オープニングゲームの場にいる。

竜崎「おい、まだB会場の予選通過者がいないぞ」

「それについて今から説明する。今から本戦を行うのだが、この前半では一緒には逃走しない」

彼が言う前半とは、全180分の逃走中のうち、最初の90分のことを指す。

「つまり…」

なのは「ほ、他にも人がいるよ！」

クロノ「あれは、他の逃走者だね。顔と名前は知っている」

美琴「どうということよ……」

設置されてあった大型スクリーンに映し出されたのは、予選B会場で予選を通過してきた逃走者たち。そして、スクリーンの向こう側でも、同じような会話がされていた…

「今回のオープニングゲームでは、両会場の対抗戦。勝った方は、前半戦が免除される」

スネ夫「本当に！」

上条「よし、ここは勝負だ！」

前半戦免除という特権に、皆のやる気が上昇した。

「では、これよりオープニングゲームを始める。まずはルールを説明するので、落ち着いて聞いてほしい。この逃走中では、くじ引きなどという運ですべてを決めるオープニングゲームはおこなわない」

皆の顔に緊張が走る。運ではないということは、実力。何らかの才が試されるということだ。

その後、ルールが長々と話されたが、結局このオープニングゲームでやるのは…クイズだ。

オープニングゲーム ルール

このオープニングゲームでは、クイズを行ってもらおう。

出題者が出した問題に各会場同時に答えてもらい、間違った会場が前半戦を戦うことになる。

問題はすべて1問1答形式で、代表者が答える。仲間との相談は認めない。

問題は最初のほうが簡単で、最後の問題は天才でなければ答えられないほど難しい。

回答は、フリップに書くこと。

回答を間違えた瞬間3体のハンターが解放され、ゲームがスタートする。

尚、回答席はハンターボックスの目の前のため、問題を間違えたら逃げ切るのは安易ではない…

代表者はくじ引きで決定する。

.....

回答者 A会場 上条当麻

B会場 雲雀恭弥

美琴「あんた、間違えたら承知しないわよ!」

上条「分かってるよ!つか一番緊張してんのは俺なんだぞ!」

雲雀「早く始めようよ...」

「では問題を出題する。スクリーンに注目せよ」

問題1 サイコロを1つ振った時、1が出る確率は何分の何?

上条「なんだこの問題、簡単すぎる…」

雲雀「余裕だね」

「では、回答オープン」

上条 雲雀

6分の1 6分の1

「両者正解。では、問題2に移る」

その後の問題も、紙は何からできているかの、一年の中で一番短い月は何月だの簡単な問題が続いた。ことが起きたのは6問目…

回答者 A会場 ユーノ・スクライア

B会場 原村和

なのは「ユーノ君、かんばって！」

ユーノ「わかった。やってみるよ」

咲「原村さん！」

和「宮永さん、おちついてください…」

「では、問題を出題する」

問題 サイコロを2つ振った時、出目の合計が7になる確率は何分の何？

ユ一ノ「え？」

和「これは、難しくなってますね…」

1 問目と比べて、かなり難しくなっている。それでも…

「では、回答オープン」

ユ一ノ 和

6 分の 1 6 分の 1

「両者正解。問題 7 に移る」

この 2 人の頭脳なら、この程度の確率問題は、まったく問題ない…

回答者 A 会場 白井黒子

B 会場 伊藤カイジ

「では、問題を出題する」

問題 子の 30 符 4 翻。切り上げ満貫抜きなら何点？

カイジ「よし、楽勝だ！」

博奕打ちであるカイジにとっては楽な問題。だが、黒子にとってはどうか。彼女は麻雀を知らない。

黒子「麻雀問題ですの、困りましたわね…」

黒子（麻雀は分かりませんが、満貫っていうのが8000点ってことは、聞いたことありますわ。切り上げ満貫抜きってことは、それより少し下の点数ということですので…）

「では、回答オープン」

黒子 カイジ

7900点 7700点

美琴「あちゃ、黒子。やってくれたわね…」

一ノ瀬「間違いね。みんな、逃げる準備を…」

竜崎「いや…合っている」

A会場全員「え!?!」

上条「だって、子の30符4翻は7700点だろ?」

竜崎「いいや、ツモ和了なら2000・3900で7900点だ。だからこの回答は、正解だ」

「両者正解。問題8に移る」

黒子「危なかつたですの…」

皆がほっと胸をなでおろした。

回答者 A会場 源静香

 B会場 灰原哀

「では、問題を出題する」

問題 1 4 9 16 25

には何の数字が入る？

静香「なにこれ？何かの法則…？」

灰原「よかった、私が普通の小学生じゃなくて…」

「では、回答オープン」

静香 灰原

36 36

「両者正解。問題9に移る」

静香「よかった」

竜崎「どうやって解いた？」

静香「最初が1で、次が4、その次が9でしょ？それってつまり、最初は3増えて、次が5増えて…みたいに、増加量が2ずつ増えているのよ！」

竜崎「まあ、そういう解釈もできるか…」

解説 この問題は、数学でやる2次関数という問題です。Y=A²Xの二乗っていうよくわからない公式です。ちなみに作者はかじる程度しかやってないのでこれくらいしかわかりません。(じゃあ出すなよ！)

回答者 A会場 骨川スネ夫
B会場 桂ヒナギク

「では、問題を出題する」

問題 They are speaking English
ow を和訳せよ

スネ夫「パパが海外に連れられてくれるから、このくらいは大丈夫！」

ヒナギク「うん、問題ないわね」

スネ夫 ヒナギク

彼らは英語を話す 彼らは今、英語を話している

スネ夫「あれ、回答違う？」

「骨川スネ夫不正解。逃走中…スタート…！」

A会場全員「アホー！」

プシューーーーーー！！

3体のハンターが放たれ、ゲームが開始された…！

ハンターが最初に狙いをつけたのは…

スネ夫「いや！ちょっと、ちょっと待って…！」

当然、スネ夫だ…

スネ夫「いーーーーーやーーーーー！」ポント

骨川スネ夫確保 残り14人

ずる賢い人間が、早々に敗退である…

エリアには、3体のハンター…しかし、逃げ切れれば賞金を獲得することが出来る。

それが…

r u n f o r m o n e y

逃走中！

オープニングゲーム クイズの王（後書き）

やっぱり頭のよさなんですね、この予選…

最後の英語の問題の解説を入れたいと思います。さすがにいらな
いとも思いましたが、小学生の方とかはまだ英語やってないと思うの
で、一応入れます。

問題 They are speaking English
nowを和訳せよ

答え 彼らは今、英語を話している。

解説 これは、現在進行形という「今」している」という英語の文
法です。中学1年生の内容なので比較的優しいものとなっています。
speakの動詞の後にingがついていますよね。これが、現在
進行形の特徴です。

余談ですが、作者は1年の時英語をさぼりまくってたので、現在進
行形も全然できませんでした。

竜崎「だからそついうのだすなつて」

作者「うるさい！少しでも頭いいとこ見せたいんだよ！」

竜崎「だつて作者バカだろ。5段階評価の成績の中に2が1つあつ
たつて聞いたことあるぞ？」

作者「それをいうなああああ！」

ミッション1 part1 ゲームスタート!

上条「よし、108万とるぞー!」

賞金は、1秒100円ずつ上昇し、見事180分逃げ切れば、108万を獲得できる。しかし、ハンターにつかまれば、賞金は0。

上条「それにしても、ここはどこの遊園地なんだ?」

舞台は、昼間の遊園地。だが、逃走者たちはバスで連れてこられたため、ここがどこの遊園地かわかっていない。ただ、地図で中を確認しただけである。

.....

咲夜「いや〜でも前半戦免除なんて、ホンマラッキーやったわ」

ヒナギク「まあ、こうしてぼーっとしてるだけでいいんですもんね」

一方、前半戦免除のため、遊園地の近くにある喫茶店で、ゲームの様子を見る予選B会場の逃走者たち。

ハヤテ「でも、ほんとにここはどこの遊園地なんでしょう」

少なくとも、日本の有名な遊園地でないことは確かだ。構造が全然違う。だが、客の入りはいいし、にぎわっている。

??「教えてやろうか?ここがどこの遊園地か」

ハヤテの後ろで声がした。その声の正体を確認しようと、ハヤテが振り返るとそこにいたのは…

ハヤテ「お、お嬢様！なぜこんなところにいるんですか！？」

ハヤテの主、三千院ナギだ。

ナギ「なぜって、ここは私の家だからな。自分の家にいるのに何か問題があるか？」

ハヤテ「…え？ええええええっ！ってことは、この遊園地はお嬢様の家の遊園地だったんですか？」

ナギの家には恐ろしいことに遊園地がある。それもかなりの広さだ。

ナギ「そうだよ。まったく、私も逃走中に出たかったのに、主催者の奴が許可してくれなかったんだよ！」

ハヤテ「はあ…（それはなんとなくわかる気がする）」

ここで、エリアの紹介をしておこう。

三千院ナギの家に在る遊園地、ナギナギランドが今回の舞台だ。広さは東京ドーム12個分あり、逃走中の舞台にはうってつけ。エリアは東西南北4つのエリアに分かれている。

東には、観覧車やジェットコースターなどのアトラクションが充実しているテーマパークエリア。

南には、ナギナギランド名物等の商品を販売しているショッピング

エリア。

西には、有名芸能人やアイドルがやってくるコンサートエリア。

北には、森の精霊を探せ！というイベントをやっているジャングル
エリア

この4つのエリアが、今回の逃走中の舞台となる

ナギ「ちなみに客と従業員は、全員エキストラだぞ。まあ、5億くら
いしか使わなかったから、心配するでない！」

ハヤテ「5億…」

……

従業員「ナギナギランド名物の、三千院帝フィギュアはいかかです
かー」

ユーノ「いや、それはちょっと…」

従業員「そうですか？ならこの、1分の1スケール、介護ロボエ
トのプラモは…」

ユーノ「し、失礼します！」

……

りま「始まってから2分。もう12000円なんて…自首しようか
しら」

結城「金銭感覚なくなりそう…12000円なんて、こんな1瞬で稼げるお金じゃないのに…」

高レート麻雀で、跳満でも上がればいい。1瞬で稼げる。逮捕されても知らないが…

ちなみに、最初にりまが言った自首。これは、電話ボックスから主催者に自首を申告することである。自首が成立すると、それまでためた賞金が、獲得できる…電話ボックスは、各エリアに1つずつある。

・・・

はやて「あれ、黒子ちゃんちゃん」

黒子「あなたは確か、はやてさんでしたわね」

開始早々、出くわした2人。そこに…

竜崎「あれ、八神と白井？開始早々3人も集まるとはな…」

竜崎が現れた。何度も言うが、竜崎は初対面の女性を名字で呼ぶ。そこは竜崎なりの気の使い方というわけだ。

黒子「すこし、狭いんじゃないですか、ここ。東京ドーム12個分の広さがあるのに、もう3人で集まってしまっなんて…」

はやて「そっちな…っと、メールや」

ブルルルル…ブルルルル…

竜崎「こっちもだ。おそらくミッションだな」
「ミッション1 現在エリアは、本来の広さにはなっていない。現在逃走者に開放されているのは、ショッピングエリアだけだ」
「やっぱり、どつりで狭すぎると思った…」

ショッピングエリアだけということとは、本来の4分の1の大きさ。
逃走者同士が簡単に出会うのも、偶然ではなく必然…

フェイト「ショッピングエリアと他のエリアをつなぐ橋が、現在壊れてしまっていて渡れない。橋を治すための大工が橋にいるが、橋を治すための材料がない」
「何でないのよ…」

海里「ちようど今、ショッピングエリアにあるホームセンターで、木材、のこぎり、ハンマーが大工セットとしてセットで売られている。これを買って大工に届ければ、橋が直されそのエリアが解放される」
「大変そうですね…」

クロノ「大工セットは2人分の自主用コインで購入できるが、人気商品のためゲーム残り75分になると完売してしまう。急ぎたまえ」
「なるほど…」

ミッション1 逃走エリアを拡大せよ！

現在逃走者に開放されているのはショッピングエリアだけである。
逃走エリアを拡大したいが、橋が壊れていて他のエリアに行けない。
橋を治す大工は橋にいるのだが、なぜか道具を持っていない。

道具はホームセンターで自首用コイン2枚と引き換えに交換することが出来る。

自首用コインを失えば、当然自首はできなくなる。つまり、最後まで逃げ切るしかない。

大工セットを大工に渡せば、橋が修理され、新エリアでの逃走が可能となる。

ただし、大工セットは人気商品のため、残り時間75分になると売り切れてしまう。

.....

竜崎「今、ゲームが始まって3分たったから、ミッションができるのは残り12分か……」

黒子「急ぎましょう!」

はやて「今ここには3人いるから……誰か2人が行くことになるわけやな……」

メールを受け取り、ミッションをやることを決意した3人。そして、他の所でも……

上条「よし、やるぞ!」

クロノ「ここはいかないとね……」

結城「逃走エリア拡大なら……やるっ!」

この3人がミッションに向かうようだ。果たして、逃走エリア拡大なるか!

ミッション1 part1 ゲームスタート！（後書き）

本線開始！果たして、後半戦にはだれが進むのか！

予想を試みるのも、面白いと思いますよ。

ミッション1 part2 道具を届けるのは大変

ミッション開始から2分が経過し、残り10分となっていた。

上条「ホームセンターって…ここだよな？」

地図を見ながら、ホームセンターにやってきた上条。

上条「でも、自首用コインは2枚必要なのか。どうしよう…」

自首用コインは、1人1枚ずつしか配られていない…

そこに、都合よくやってきた3人組がいた。

竜崎「お、あれがホームセンターか？」

はやて「そうみたいやな。ほないこか」

黒子「そうですね、早く道具を買って…ってあなたは！」

黒子が上条に気付いた。その声に反応して上条も黒子のほうを見る。

上条「あ、お前は確か黒井白子！」

黒子「白井黒子ですわ！まったく、何度間違えれば気が済むんですの？」

上条「ああ、悪い…」

とにかく、これで4人が集まったため、大工セットが2つ使えるようになった。

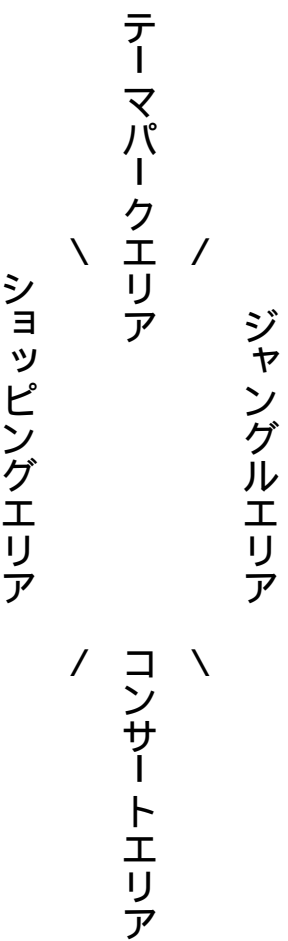
店員「ありがとうございます。またお越してください」

自首用コイン4枚で大工セット2つを購入した4人。これでこの4人は、自首が出来なくなった…

はやて「それで、誰がどのエリアを開放しに行くんや？」

竜崎「おい、ちょっと待て。この南エリアのショッピングエリアから、直接北エリアのジャングルエリアに行くことはできないぞ？」

この遊園地の構造は のようになっている。



つまり、ジャングルエリアを開放するためには、テーマパークエリアか、コンサートエリアを開放しなければならぬ。

はやて「じゃあ、ジャングルエリア以外を開放しにいこか。で、誰が行くんや？」

4人「……………」

そりゃあ誰も行きたくないだろう。誰がわざわざハンターに見つか

るリスクを増やすだろうか。

はやて「しゃーないな。ほな、じゃんけんで決めよか」

と、いうはやての提案で、じゃんけんをすることに決まった。

はやて「じゃーんけーん…ポンッ！」

……

はやて「ということ、頼んだで〜ほな竜崎君、いこか」

竜崎「ああ、そうだな」

はやてと竜崎が立ち去り、取り残された2人…

上条「不幸だ…」

黒子「まったく、こついうとこで勝てないんですものね。まあ、仕方ありませんわ。行きますわよ！」

上条「よし、行くぞ！じゃあ、ハンターに気をつけるよ、黒井白子」

黒子「だから白井黒子ですよ！」

……

彼らが立ち去ってすぐのこと、ホームセンターにたどり着いたクロノ・ハラオウンと結城秋子。この2人が出会い、大工セットを購入

した。

クロノ「じゃあ、橋には僕が行こう。君とは、いったんお別れだ」

結城「はい、分かりました」

クロノの男としての見栄なのか、それとも、生まれながらにして持っていた正義感からかはわからないが、クロノは自分で橋に行くと言い出した。結城は、それを静かに見送る…はずだった。

しかし、想定外の事態…

クロノ「ハンターだ、逃げる！」

結城「ええっ!?!」

いち早くハンターに気付いたクロノが結城に指示を飛ばし、2人は逃げだした。

2人は逆方向に逃げだしたため、ハンターに狙われるのはどちらか一方。狙われたのは…

クロノ「くっ!こっちに来たか!」

クロノだ…

クロノが逃げているのは運の悪いことに1本道。半径100メートル以内にホームセンター以外の建物はない場所。よって、ハンターとのガチ勝負となるが、勝てるわけもなく…

クロノ「くっ！ここまでか…」ポンッ

クロノ・ハラオウン確保 残り13人

クロノ「そういえば、大工セット持ったまま走ってた…ここに置いておこう…」

どこか抜けている、男…

ユート「『確保情報 ショッピングエリアホームセンター付近にて、クロノ・ハラオウン確保。残り13名』クロノ…ミッションやろうとしてたんだ…」

………

一方、上条はテーマパークエリアの橋の近くまでたどり着いていたが…

上条「くそ、ハンターがいてうごけねえ」

ハンターさえいなければ、すぐにでも大工セットを届けられるのだが、相変わらず、不幸な男だ…

上条「そうだ、こうすりゃいいのか！」

上条は何かに気付くと、大工セットの箱を開け、ハンマーを取出し、橋に向かって投げた！

大工「どうぐがねえ、どうすれば…っと、ハンマーじゃねえか、いったいどこから…」

上条が、投げたものだ…

その後も、くぎ、木材などが投げられ、それを大工は次々に拾っていく。

上条「よし、あとはこののこぎりだけ…でもこのこぎりは投げるわけにはいかないよな…」

のこぎりを投げ、もし大工に当たったりでもしたら、その瞬間殺人犯になってしまう…

まあ、ハンマーも十分投げると危ないのだが、ヘルメットをかぶっている大工なら当たっても何とかなるだろうという、上条の見解である…のこぎりは、腹に当たる可能性もあるため投げられない…

その時、ハンターが橋から少し離れた。

上条「今だ！おっちゃん、受け取れ！」

上条は隠れていた草むらから飛び出し、少し前進。その後、地面を滑らせてのこぎりを大工のもとに…

大工「おお少年！道具を持ってきてくれたのか、ありがとう！」

上条「礼なんて聞いている暇はねえ！」

大工に無事なのこぎりが行き渡ったことを確認すると、上条はすぐに走った。もちろん、ハンターから逃げるためである。

ハンター「……………！」

ハンターは当然上条に気付く。だが、周りに建物があることと、上条の見事なスタートダッシュで、ハンターは上条を見失った…

テーマパークエリア解放 残り2つ

ミッション1 part2 道具を届けるのは大変(後書き)

残りは2つ、果たして解放できるのか！

ミッション1 part3 残る大工セット

一方、コンサートエリアの橋にたどり着いた、ジャツジメント、白井黒子…

大工「おっ！大工セットを持ってきてくれたのか、ありがとう！」

黒子「礼なんていりませんので、早く橋を修理してくださいませんの？」

大工「おお、そうだったな！すこしまつててくれ、嬢ちゃん」

大工は橋にしゃがみ込み、ものすごいスピードで橋を修理していく。そして1分後…

大工「治ったぜ！これで橋の向こう側に行けるはずだ」

黒子（治すの速いのです…）

コンサートエリア解放 残り1つ

黒子そのままコンサートエリアへと逃げ込んだ。

……

美琴「そろそろ大工セットが完売する時間ね。ミッションやりたかったけど、遠いし、仕方ないわよね…」

ホームセンターから遠く、ミッションに行けなかった、御坂美琴…

プルルルル…プルルルル…

美琴「あ、終わったわ」ミッション1失敗。時間が経過しても、ジヤングルエリアを開放することが出来なかった『やっぱり無理してでも行くべきだったのか…』」

りま「『しかし、竜崎悠太、八神はやて、上条当麻、白井黒子の活躍により、2つのエリアが解放された。これにより、逃走エリアは3倍に拡大する』よかった、これなら…」

なのは「残ったジャングルエリアだが、絶対に開放できないというわけでもない。大工セットはすでに購入され、ホームセンターの近くに落ちている。見つけて大工に渡せば解放できる」クロノ君が買ったやつだね、きつと…」

現在、ホームセンターにいちばん近い場所にいるのは、一ノ瀬玲奈。大工セットから50mの位置にいる。というか大工セットがもう見える。果たして、エリア解放に向かうのか…！

………

カメラマン「どうします、行きますか？」

本戦になり、1人に1人ずつ付いたカメラマン…180分カメラを持つのは、しんどそうだ…

一ノ瀬「行くわけないでしょ。ここで行くのとは行かないのでは、期待値が全然違うわ」

成績優秀で、利己的に行動する女。自分でエリアを開放させる気は、さらさらしないようだ…

.....

一ノ瀬の少し後ろには、静香がいた。

静香「あれ、一ノ瀬さん？一ノ瀬さん！」

一ノ瀬は、自分が呼ばれていることに気付き、振り返る。

一ノ瀬「少し声大きいわよ。ハンターに見つかったらどうするつもり？」

静香「うう、ごめんなさい。それより、あそこにあるのって大工セットですよね？」

静香が、落ちている大工セットを指さす。

一ノ瀬「そうみたいね、まあ、私には関係ないけど」

静香「関係ないって、やらないんですか、エリア解放!？」

一ノ瀬「まあね。やりたいならあなた一人でやりなさい。それじゃ」

彼女はその冷酷な瞳で静香を見つめ、去って行った。

静香「しょうがないわ。私がやりましょう…」

静香はしぶしぶ大工セットを拾い、ジャングルエリアを目指した…

.....

プルルルル…プルルルル…

上条「もうメールか『通達1』。エリアに8個の宝箱を置いた。中には逃走に役立つアイテムが入っている。有効に活用したまえ』おお、すげえ！」

結城「『ただし、8個の宝箱のうち、2つはハズレの宝箱だ。これを開けてしまうと、ハンターが1体追加されてしまう。』どうしよう…！」

なのは「『尚、追加されたハンターは後半戦にも引き継がれる。宝箱を開けるかどうかは、逃走者の自由だ』なるほど…！」

通達 アイテムを手に入れる！

現在エリアに8個の宝箱が置かれた。

中には逃走に役立つアイテムが入っており、十分活用できる。

但し、8個の宝箱のうち2つはハズレの宝箱。

これを開けると、ハンターが1体放出されてしまう。

尚、追加されたハンターは、後半戦にも引き継がれる。

.....

これを受けて、後半戦を控えている15名が、途端に余裕をなくした。

ヒナギク「ちょっと、ハンター増やしたら許さないわよ！」

「宝箱…あけないでほしいんだけど…」

全員が安全策を取り、宝箱を開けなければ、ハンターが増えることはない。

和「でも、私だったらあけちゃいますね、これ。期待値的には、開けたほうが絶対得ですから…」

カイジ「開けるな…！やめろ…！」

後半グループ必死の祈り、果たして、届くのか…！

……

三條「宝箱…どうしましょうか…」

ケータイを見ていた三條。そんな三條の前に、ハンター…

三條「おっと、危ない…とりあえず、隠れてましよう」

ハンターは、気づかなかったようだ…

三條「ずっと神経をとがらせていなければいけないというのは、辛いですね…」

……

一方、宝箱を発見した、ユーノ・スクライア。果たして、開けるのか…！

ユーノ「確率は4分の1…大丈夫だよな？」

恐る恐る、宝箱に手を伸ばすユーノ。そして…

パカッ

ユーノ「何か入ってる。ハンターじゃないみたいだね」

『人間機関車セット』これを頭に装着し、石炭と水を飲むと、ハンターの3倍の速度で走れる。本来は一度使用したら止まれないのだが、これは3分で止まれる。

ユーノ「石炭食べるの…？これを？」

宝箱の中には、石炭と水も一緒にセットで入っていた。

ユーノ「とりあえず、持っておこう…」

しびしび人間機関車セットをポケットに入れたユーノであった…

…

上条「おっ！宝箱。まあ、大丈夫だよな…」

ユーノが1つあけているため、ハンター放出の確率は、7分の2だ…

上条「よし…あけるぞ！」

パカッ

プシューーーーーー！

上条「なんだ、宝箱の中から煙が出てきたぞ…しかも、何も入っていない。ってことは…」

ハンターが1体、エリアに放たれた…

上条「不幸だああああ！」

………

プルルルル…プルルルル…

美琴「『只今、上条当麻がハズレの宝箱を開けた。これにより、ハンターが1体追加され、ハンターの数は合計4体となった』あのバカ、何やってくれてんのよ！」

そしてこれは、後半グループの者たちにとっても、他人ごとではない…

アカギ「ククク…面白い」

カイジ「アカギさん、なに楽しんでんですか！」

咲夜「最悪やな…」

雲雀「あの上条って男、かみ殺す！」

クローム「それは…やめた方がいいと思う…」

どうやら、大きく信頼を失ったようだ…

残る宝箱は6つ、ハンターは放出されてしまうのか…そして、ジャ
ングルエリア解放に向かった静香の運命は…

ミッション2 part1 麻雀の精霊(前書き)

麻雀出てきますが、ルール知らなくても大丈夫です。

ミッション2 part1 麻雀の精霊

ゲーム残り時間は、65分。静香は皆のために、ジャングルエリア解放へと向かう。

そして、エリアには6つの宝箱。しかし、ハズレの宝箱が1つあり、開ければハンターが放出されてしまう。果たして、ハンター放出は防げるのか…！

なのは「あつ、宝箱…ハンターの確率は6分の1だし、開けようかな…？」

テーマパークエリアで、宝箱を見つけた高町なのは。先ほど、上条がハンターを放出させているため、比較的高い確率でアイテムを手にできるが…

なのは「うん、開けよう！」

パカッ

『ハンター殺し手袋』右手に装着する。これでハンターに触れると、ハンターを消すことが出来る。使用できるのは1度だけ。

なのは「いいアイテムだ、よかった〜」

どうやら、当たりを引いたようだ…

すぐさま、手袋を装着し、別の場所へと移動した。

.....

静香「よし、何とか着いた。あとはこれを大工さんに渡せば…大工さん！」

ジャングルエリアをつなぐ橋にたどり着いた、源静香…すぐさま大工を呼ぶ。

大工「お、嬢ちゃん！道具を持ってきてくれたのか、ありがとう！」

静香「はい、どうぞ」

ジャングルエリア解放 ミッションクリア！

静香は道具を渡し、大工と軽い会話を交わしていた。

しかしその姿を、ハンターが捉えた…

静香「そうなんですか。それは………！！！」

ハンターに気付いた静香。しかし、時すでに遅し。静香が逃げだした時点で、ハンターとの距離は10mにまで縮まっていた。

そんな状況で、小学生の静香が逃げ切ることは、ほぼ不可能だ…！

静香「ああ、ダメだ…」ポンッ

源静香確保 残り12人

ドラえもん組が、早々に全滅だ…

そしてこの時、ある物語が、動き始めた…！

…

ここは、ナギナギランドに設置されてる雀荘。遊園地には似つかわしくないが、麻雀好きのとあるお金持ちが設置したらしい。

ここで、ある対局が行われていた…

平和「ツモ。立直、一発、ツモ、平和、ドラ2。3000・6000
0です。これで、終わりですね」

断ヤオ「ちきしょう、また平和の圧勝じゃねえか！」

一盃口「まあまあ、落ち着いてね。断ヤオさん」

三色「フツ。僕は連続2着だから別に問題ないが…」

彼ら4人は、麻雀の精霊。役ごとに1人、精霊がいるのだ。

断ヤオ「でも、これだけ負けが込むとやってらんねえ…って、なんだよ一盃口」

一盃口「どうやら、運がないようですね。どうですか、私と一緒に幸運の石を探しに行くってというのは？」

断ヤオ「はあ！？そんなんあるのかよ！」

一盃口「私が聞いた話では、なにがでっかい箱の中にそれがあり、

その中に幸運の石が入っていると…」

平和「そういえば、なんかそんな箱が外にありましたね。黒い人が中に入ってたから、怖くて逃げてきちゃいましたけど」

ハンターボックスのことだ…

断ヤオ「黒い人？そんなんにビビるな！よし、じゃあ4人で幸運の石探しだ！」

4人「オーーーーー！」

………

プルルルル…プルルルル…

結城「メールが来たけど、なんで3通も一気に来てるの!？」

驚く結城。とりあえず、メールの中を見る。

結城「『只今、源静香の活躍により、ジャングルエリアが解放された。これですべてのエリアが解放されたことになる』すごい、この子…」

一ノ瀬「2通目は…『確保情報。コンサートエリアとジャングルエリアをつなぐ橋の上で、源静香確保。残り12人』ふう。行ってたら私が捕まってたわね。気を付けないと…」

この逃走中では、1つの判断ミスが命取りとなる…

そして3通目…

上条「『ミッション2。現在麻雀の精霊4人が幸運の石を手に入れるため、4つのハンターボックスに向かっている』なんだ、麻雀の精霊とか幸運の石って？」

りま「『ゲーム残り50分になると、4人がハンターボックスを開け、エリアに4体のハンターが放たれる』最悪ね…しかも、あと15分しかないじゃない」

竜崎「『阻止するためには、ハンターボックスの鍵を手に入れ、ハンターボックスに鍵をかけなくてはならない。鍵は、ジェットコースター、コーヒーカーップ、バンジージャンプ、メリーゴーランドのアトラクションをやれば見つかるかもしれない』かもしれないって、曖昧だな…」

美琴「『当然、増えたハンターは後半戦にも引き継がれるので、注意すること』まあ、私たちにこれは関係ないわね」

ミッション2 ハンター放出を阻止せよ！

現在、麻雀の精霊4人が、幸運の石を探しに4つのハンターボックスへ向かっている。

ゲーム残り50分になると、ハンターボックスが開けられ、4体のハンターがエリアに放たれる。

阻止するには、鍵を手に入れ、ハンターボックスに鍵をかけなければならぬ。

鍵は、ジェットコースター、コーヒーカーップ、バンジージャンプ、メリーゴーランドのアトラクションをやれば、見つかるかもしれない。見つけられるかどうかは、運次第だ…

尚、増えたハンターは後半戦にも引き継がれる。

・
・
・
・
・

灰原「また、こっちに影響があるのね…」

カイジ「頼む！クリアしてくれ…」

祈る後半グループの逃走者たち。果たして、その想いは届くのか…！

ミッション2 part1 麻雀の精霊(後書き)

ドラマパート、難しいですね。地の文がほとんどない…

それと、精霊の名前が単純すぎる気がするんですが、どうでしょう？

ハヤテ「どうみても単純すぎる気がしますけど…」

作者「ハヤテ！？いつたいどこから…」

ハヤテ「さっきからずっといました。それで、やっぱり単純すぎるんじゃないですか？」

作者「じゃあハヤテ。お前は平和の精霊に全部順子君とかけられるのか？え？」

ハヤテ「いや、それはさすがに…」

作者「だろ！？だろ！？分かりやすい名前が一番だって、漫画でヒナギクも言ってたぞ！」

ハヤテ「え、そうなんですか？確かヒナギクさんはネーミングセンスが…」

ヒナギク「うるさーい！」

バキッ！

ハヤテ「ぎゃあああー！」

作者「ぐはっ、なぜ俺まで木刀でたたかれるんだ…ガクツ」

ミッション2 part2 鍵を探せ！

逃走者たちに、新たなミッションが与えられた。

残り50分になるとハンターが放出されてしまう。阻止するために、ハンターボックスのカギを求めて走るのは、いったい誰なのか…

……

カメラマン「ミッションは、どうしますか？」

美琴「さっきできなかったし、今回はやる」

ミッション1に参加できなかったのが、悔しかったらしい…

そして、他の逃走者も…

なのは「よし、ここはやるよー！」

三條「コーヒーカップが近いですし、やりましょうか」

フェイト「ちょうどジェットコースターが目の前にあるし、やろうかな…」

この4人がミッションに参加するようだ。一方で、参加したくてもできない者も…

竜崎「ジェットコースターが近いけど、乗ったら絶対吐く…」

りま「バンジーが目の前…でも、高いとこ苦手…」

基本的に恐怖系のアトラクションが苦手な人たち。今回は、活躍できそうにない…

……

上条「あれ、宝箱だ」

ミッションもそうだが、エリア内にはまだ5つの宝箱があることを、忘れてはならない。

上条「ごまかされないぞ、ここはスルーだ！」

上条は、先ほどのトラウマから宝箱を開けない…

黒子「宝箱ですよ…」

上条が去って1分後に、同じ宝箱の場所に黒子がやってきた。

黒子「まあ、大丈夫ですわよね…」

ハンターが放出の確率は、5分の1…

パカッ

『探偵のメガネ』かけると、半径50m以内の人を察知する。しかし、通行人まで察知してしまうため、あまり役に立たないかもしれない。

黒子「ハズレアイテムですわね…それにしてもこのメガネ、確か江戸川さんという方が…」

カメラマン「おっと、それ以上は言うてはだめですよ！」

……

三条「よし、すぐにつきましたね」

コーヒーカップに着いた三条。鍵を見つけられるか…

従業員「いらっしやいませ。好きなコーヒーカップをお選びください」

5個あるカップのうち、1つを選べというもの。客は三条しかいないため、どのカップにも乗れる。

三条「このうちの1つに鍵が入ってるってことですか…鍵が入ってるのに乗ればいいんですね」

三条は1つ1つカップの中をのぞいていく。そして、黄色い鍵を発見した。

三条「では、これに乗りましょう。別に乗っても回さなければ気持ち悪くなることもないでしょう」

従業員「では、スタートしまーす！」

三条が乗ったのを確認した従業員が、スイッチを押すと、コーヒーカップが回り始めた。

三條「まあ、これくらいは回りますね。でも、回さなければこれ以上は……」

従業員「これより、この遊園地の名物、超回転コーヒークップをお楽しみいただきまーす。なんと、1分間で500回転しますよ〜」

三條「え…ちよっと…?」

ビュウウウウンー!ビュウウウウウンー!

三條「ぎゃあああああ!」

〜1分後〜

従業員「終了です。楽しんでいただけましたか?」

従業員が三條に近寄った。

三條「これは…ちよっときついですね。って、あなたは、旧クイーンー!」

従業員「あれ?ばれちゃった?」

従業員は、ガーディアンの旧クイーンの藤崎なでしこだった。

三條「なんでこんなところに?」

なでしこ「いや、ちよっと手伝いにね。じゃあ、これ鍵。頑張ってるね」

三條「言われなくても、頑張りますよ。それでは、旧クイーン。そして、現在のジャック…」

三條は意味深な言葉を言い残してその場を去った。

なでしこ「あらら、そこまで調べられてるのか…」

……

一方、ミッシヨンに参加している御坂美琴は、メリーゴランドの前に来ていた。

美琴「あ、見つけたわ。ちょうどこの馬の上に乗ってたのね」

すぐに鍵を発見し、馬に乗った。

そして30秒後…

美琴「きゃはははは、楽し〜〜い!」

カメラマン「あの、美琴さん。ずいぶん子供っぽいものが好きなんですね」

美琴「な、なによ!楽しいものは楽しいんだから仕方ないでしょ!」

カメラマン「はあ…」

年齢に、見合わない女…

.....

フェイト「ジェットコースター…これに乗れば鍵が手に入るのね…」
ジェットコースターにやってきたフェイト。そのまま乗る。

フェイト「それじゃ、一番前の席に乗ろう」

客はフェイトだけ。座る席はどこでもいいのだが、席のどこかに鍵が置いてある。その席とは、一番後ろだ…

（3分後）

フェイト「いつも空飛んでるけど、ここのうのは苦手だな。少し目が回ったかな…それに、鍵もない」

席の一番後ろに鍵があることに、気づかないフェイト…

フェイト「しょうがない、あきらめよう。もう乗りたくない…」

仕方なくジェットコースターを下りた。そこに…

なのは「あつ、フェイトちゃん。鍵あった？」

相棒登場だ…

フェイト「ううん。見つからなかった。どこにあるんだろうね…」

なのは「フェイトちゃん、具合悪そうだね。ちょっと休んでたら？私が捜してくるから」

フェイト「うん。ごめんね、なのは…」

フェイトはなのはに礼を言い、近くのベンチに座った。

しかしその姿を、ハンターが捉えた…

フェイト「疲れた…少し休もう。なのはが戻ってくるまで…」

だが、下を向いているせいか、ハンターに気付かない。そして…

フェイト「えっ？」ポント

フェイト・テストロツサ・H確保 残り11人

フェイト「うわ〜全然気づかなかった。いいとこないな、私…」

……

プルルル…プルルル…

なのは「鍵あった〜 最後の席にあったとはね〜って、携帯が鳴ってるよ」確保情報。アトラクシオンエリア、ジェットコースター付近にて、フェイト・テストロツサ・H確保。残り11人」そんな…私が休んでたらなんて提案しなかったら…」

自分の行いを、猛省するエースオブエースであった…

現在見つかった鍵は3つ。果たして、ハンター放出阻止はできるのか。ミッション終了まで残り10分！

ミッション2 part2 鍵を探せ！（後書き）

まさかのフェイト確保！これがあるから逃走中は分からないし面白い！

ミッション2 part3 ハンターボックスを探せ

ミッション終了まで残り10分。
現在手に入れている鍵は3つ。
ハンターは何体阻止できるのか？

.....

三条「とりあえず、鍵は手に入れましたけど、ハンターボックスの場所が分かりませんね…」

ここは、東京ドーム12個分の広さを誇る遊園地。ハンターボックスは4つのため、単純計算で東京ドーム3個まわり、ようやく見つけられるといったところだ。

三条「確かに、1人では見つけられないでしょう。でも、こういうときのために携帯があるんですよ」

プルルルル…プルルルル…

はやて「三条君からメールやな。俺は今、コーヒークップで鍵を手に入れました。しかし、ハンターボックスの場所が分かりません。なので、もしハンターボックスを見つけたら、一斉送信で皆にメールを送ってください。鍵を持つてる人は、そこに行くはずですよ」なるほど、考えたやん！」

一斉送信 ハンターボックスの場所を教えてください from 三条海里

鍵を見つけたが、ハンターボックスの場所が分からない。
ハンターボックスを見つけたら、一斉送信で場所を教えてもらえれば、鍵を持った人間がすぐに駆けつける。

.....

プルルルル…プルルルル…

三条「おや、電話ですか。相手は、竜崎さん？」

三条は不審に思いながらも、電話に出た。

三条「もしもし、何の用ですか？」

竜崎（声）「三条。お前、いいメール送ったな。だから、俺が情報を提供しようと思う。ずばり、ハンターボックスはジャングルエリアに2つ、シヨッピングエリアに2つある」

三条「どういうことですか…？」

竜崎（声）「このミッション、アトラクションをやって鍵を見つけるといったもの。つまり、鍵は全部テーマパークエリアにあるってことだ」

三条「それはそうですね。4つのアトラクションは、全部テーマパークエリアにあるんですから」

竜崎（声）「テーマパークエリアは逃走エリアの東に位置している。そこで鍵を手に入れ、西エリアのコンサートエリアに行くためには、最低でも10分はかかってしまう。いや、ハンターを考慮すれば1

5分はかかるだろう。そんな場所に、ハンターボックスが置かれて
いるはずがない。このゲームの主催者は、乗り越えられる試練しか
与えない」

三條「確かに、そうですね…では、なぜテーマパークエリアにはハ
ンターボックスがないと…？」

竜崎（声）「簡単だよ。俺は今、テーマパークエリアに15分はい
るが、ハンターボックスなんて1つも見なかった。別に隠れてるわ
けでもないのにな。だから、ハンターボックスの場所はほぼ決まり
だ。ということ、今のメールで一斉送信してくれないか？」

三條「え、竜崎さんがすればいいのでは…？」

竜崎（声）「俺、携帯持ってないからメール打つの遅いんだよ。じ
ゃ、頼んだ」

ブツッ

電話は、切れてしまった。

三條はそれを聞き、再び一斉送信をした。

.....

なのは「まったく三條君は、2回もメール送るなんて、びっくりす
るよ…」

三條からのメールを読み、ジャングルエリアへとやってきた、高町
なのは…

なのは「あ、あったよ」

どうやら、ハンターボックスを発見したようだ…

なのは「鍵穴があるから、ここに鍵を差し込んで閉めればいいわけだね。それにしても、ハンター怖い…」

なのはは、ゆっくりと鍵を回した。

ハンターボックス封印 残り3つ

・・・

その頃、御坂美琴もショッピングエリアでハンターボックスを見つけていた…

美琴「よし、これで…って、ハンター!？」

美琴が鍵穴に鍵を差し込もうとした瞬間だった。なんという、間の悪さだ…

美琴「とりあえず、鍵だけは閉めて…!」

ハンターボックス封印 残り2つ

美琴「さあ、逃げるわよ!」

美琴は細い路地に入っていった。

さすがに、場数を踏んでいるだけのことはある。ちょこまかと角を曲がり、なんと、ハンターを撒いてしまった…

美琴「はあ…なんとかなつたわね…」

さすがは、LEVEL5だ…

……

ミッション終了まで残り5分。現在、三条がカギを手に入れているが、もう1つの鍵、バンジージャンプで手に入れられる鍵については、手に入れられていない。

そんな状況を知らないある男が、バンジージャンプの前にやってきた。

上条「この鍵は、もうとられてんのかな？」

先ほど、ハンターを放出させた、上条当麻だ…

上条「すみませ〜ん、従業員さん。ここ10分以内にこのバンジーやった人ついていますか？」

従業員「いえ、いませんよ。ですから暇なんですよね。どうです、やってみませんか？」

上条「やれば鍵が手に入るんだよな。よし、やるぜ！」

上条は、従業員に案内されて、ビル9階の高さといわれているところまで来た。

従業員「ひもは付けてありますし、下は柔らかいマットです。自分のタイミングで、跳んでください」

上条「迷ってたら、時間のロス。ここは、すぐに跳んでやる！」

上条は、勇気を出してジャンプした！

上条「うひょおおお！」

ブチッ！

上条「なんだ、今の音？」

従業員「あ、ひも切れちゃった」

上条「ふざけんな！不幸だあああああ！！！」

ポヨーーーーン

上条「何とかマットに着地できたぜ…ついでに鍵もゲットしたぜ…」

マットの上に、鍵が置いてあった。

従業員「この遊園地の名物、スリル満点バンジーです。お楽しみいただけましたか？」

上条「嘘つけ！」

何はともあれ、これで4つの鍵を獲得した。あとは、ハンターボツ

クスを閉ざすだけだ…！

ミッション2 part3 ハンターボックスを探せ(後書き)

本家の逃走中を見てて、なんでメールの一斉送信をもつと使わないんだろう…:~)と思ひ、書いてみたのが今回の三条君の行動です。

ミッション2は、次回で終了となります。

P.S どなたでも感想を書けるように設定しました!気が向いたらでいいので感想を書いてください>m) (m<

ミッション2 part 4 ハンター放出阻止なるか？

前半戦は残り55分。ミッション終了まで残り5分。現在鍵を持っているのは上条当麻、三条海里の2人。男の意地を見せ、ハンター封印なるか？

.....

三条「ふう、やっと見つけました。とりあえず、これで俺の役目は終わりですね」

三条は、ハンターボックスに鍵をかけた。

ハンターボックス封印 残り1つ

三条「まあ、さっきからずっと探してましたから、さすがに見つかるでしょう」

満足げな表情で三条はこの場を後にした。

.....

上条「くそっ！ハンターボックスはどこだ！」

一方上条はというと、ハンターボックスを探してジャングルエリアを走り回っていた。一応、ジャングルエリアに残るハンターボックスはあるのだが、見つけられるか。

美琴「あれ、あいつなに走ってんのよ。ハンター…はいないわね。」

ってことは、ミッションをやってるの?」

ジャングルエリアで上条を見た、御坂美琴。どうやら、上条のことが気になるようだ…

美琴「ちょっと、なによ今のナレーター!それじゃああたしがあいつのことを…す、す、好きみたいじゃない!」

相変わらずの、性格だ…

美琴「まあ、今は逃げることに専念して…あれ?こんなところにハンターボックスがあるじゃない!」

偶然にも、ハンターボックスを見つけた美琴。しかし、鍵を持っている上条は今通り過ぎてしまった。

美琴「もう、しょうがないわね!」

美琴は携帯を取出し、上条に電話した。

プルルルル…プルルルル…

上条「よう、なんだビリビリ?」

美琴(声)「あんた、鍵持ってるわよね?だったら、今すぐ引き返さない!ハンターボックスを見つけたわ!」

上条「そうか、サンキュービリビリ!」

電話は、そこで切れた。

美琴「まったく、私にはちゃんと御坂美琴って名前があるって言うてんのに…」

少し悲しい、美琴であった…

……

ミッション終了まで残り1分。引き返した上条とハンターボックスまでの距離はおよそ250m。全力で走っても、間に合うかどうか分からない…

上条「予選に引き続きまたぎりぎりまで走らなきゃいけないのかよ！」

予選でも、終了間際に全力ダッシュをしていた上条。そろそろ慣れてきたか…

ミッション終了まで残り20秒

上条「あと50mくらいか。これならいけ…グハッ！」

なんと、落ちていた石につまづいてこけてしまった。

美琴「あんた、何やってんのよ！」

ちょうど、ハンターボックスの前にいた美琴。

上条「ビリビリ、なんで逃げなかったんだ！待ってる、何とかハンターを封印する！」

再び走り出した上条。果たして、間に合うのか！

ミッション終了まで残り10秒

9

8

7

上条「あと少し、間に合え！」

6

1

美琴「分かったわ！」

2

上条「クッ、無理だ！おいビリビリ、逃げるぞ！」

3

4

5

プシューーーーーー！！

ハンター1体放出。

.....

上条「おいお前、なんであんなところにいたんだよ！」

上条が言ってる間にも、ハンターが2人に迫ってくる。当然逃げているのだが、ハンターの足には敵わない。どちらかが…いや、両方捕まってもおかしくない状況だ。

美琴「うるさいわね！そんなの…そんなの…」

ハンターとの距離は、5mにまで縮まっていた。そして遂に…

ポンッ

どちらかが確保された。もう一方はその隙について逃げたようだ。果たして、捕まったのは…

御坂美琴確保 残り10人

美琴「そんなの、あんたが心配だったからに決まってるじゃない…」

学園都市の第3位が、前半戦脱落だ…

.....

プルルルル…プルルルル…

黒子「メールが2通ですの『確保情報。ジャングルエリアにて、御坂美琴確保。残り10人』そんな…お姉さまがこんなところで…」

一ノ瀬「『ミッション2結果。高町なのは、御坂美琴、三条海里の活躍により、ハンター3体が封印された。しかし、ハンター1体の封印が間に合わず、エリアに放出されてしまった。これにより、ハンターは5体となった』ミッションに行った御坂って人は捕まったわね。やっぱり、ミッションにはいかないのが得策ね」

どこまでも、利己的な女…

…

ハンターボックスにたどり着いた麻雀の精霊4人。だがしかし…

平和「あれ、開かない？」

三色「鍵がかかっている。誰がやったか、見当は付きませんが…」

一盃口「困りましたわね…」

ハンターボックスのうち3つは、逃走者たちの手によって閉じられている。しかし、1つは開いている。その開いているハンターボックスを、断ヤオが開けた。

断ヤオ「おお、これが幸運の石か。光り輝いてるぜ…これである平和の奴をギャフンと…グッ！なんだこれは！あ、頭が、割れるよう

にいてえ！グハッ！」

断ヤオはそのまま気を失った。

（数分後）

断ヤオ「ウウウ…ウガアアア！俺は、最強になった！もう誰も怖くない…ひれ伏させてやる…ここにいる奴らを、全員！！」

そしてこれが、逃走者たちに大きな影響を及ぼすことになる…！

ミッション2 part4 ハンター放出阻止なるか？（後書き）

御坂美琴確保！他の小説では好評価の美琴ですが、この小説ではつぶしていきますよ！美琴ファンの方ごめんなさい>m) (m<

さて、ミッション3は断ヤオが何かをしでかします。ドラマパート、次回の頭まで続きますが、ぜひご覧ください。

ミッション3 part1 暴君断ヤオ登場

三色「断ヤオが帰ってこない？」

平和「はい。僕も心配で…」

一盃口「どこに行ってしまったのでしょうか…」

幸運の石が見つからず、雀荘に帰ってきた3人。断ヤオが帰ってこないことを不思議に思い、話をしていたのだ。

その時、雀荘の扉が勢いよく開いた。

立直「お前ら、何やってんだ！断ヤオが、大変なことになってるぞ！」

外の様子を見て飛び込んできたのは、同じく精霊の立直だった。

3人「え！？」

4人は勢いよく外に出た。

平和「別に、何ともありませんが」

立直「ここじゃねえ、コンサートエリアだ！」

4人が急いでコンサートエリアに向かうと、そこには…

断ヤオ「お前ら！そのままひれ伏せ、俺を崇めろ！ギャハハハハハ

「！！」

客「ハハーツ！」

ステージの上で大声をあげている断ヤオと、ひれ伏している客の姿があった。

平和「なんでこんなことに……」

立直「5分ほど前のことだ」

〈5分前 回想〉

スタッフ「お待たせいたしました！今日、歌っていただくアイドルは……期待の新人、水蓮寺ルカ！」

ワーー！ワーー！

ルカ「みんなー！今日も盛り上がって……！！」

パツ！

スタッフ「おい、どうした！？照明が消えたぞ……グハツ！」

スタッフ2「なんだ……グハツ！」

再び照明がついたとき、ステージにいたのは倒れているルカと、客に怪しげな催眠をかけている断ヤオだけだった……

〈回想終了〉

一盃口「催眠って、どういうことですか？」

立直「幸運の石っていうのはな、確かに持てば幸運をもたらすが、それはあくまで、石の力を制御できる奴が持った場合のみだ。制御できない奴が持った場合、おかしな力を覚醒させ、自分の欲求のままに生きるものへと変化する。だからあいつは、催眠術が使えるようになったのさ！」

平和「どうにかならないんですか？」

立直「欲求を満たせば、石の力も解ける。今の奴の欲求は、支配欲。この遊園地にいるすべての人間を支配したいという欲求だ。つまり、この遊園地にいる奴全員が、断ヤオに従えばいい」

三色「もう従ってるように見えるが…？」

立直「まだ、従ってないやつがいる…！」

従っていないのは、エリアにいる10人の逃走者たち。断ヤオもそれが気に入らないらしく、客に指示を出した。

断ヤオ「お前ら、残ってるやつらを従わせろ！従わない奴は、この遊園地の中から消せ！」

客「ハッ！」

客は、思い思いの方向に散らばった…

.....

はやて「なんや、お客さんが急にいなくなっただな。従業員さんもおらへんし…」

断ヤオのせいで、逃走者以外の人間はコンサートエリアに集められている。

プルルルル…プルルルル…

結城「メール…」ミッション3。現在、麻雀の精霊のうちの1人、断ヤオが狂ってしまい、客と従業員を全員従わせている。しかし、君たちだけが彼に従っていない。狂ったって、どういうこと？」

りま「断ヤオはそんな君たちに怒りを覚え、客たちに君たちをエリアから消すよう命令した。客は君たちを見つけると大声でハンターを呼び、通報する」なによそれ、迷惑すぎる…」

一ノ瀬「通報されないためには、コンサートエリアにあるステージに行き、断ヤオに従うふりをすればいいようだ」これは、強制参加ね…」

ミッション3 客からの通報を阻止せよ！

麻雀の精霊のうちの1人である断ヤオが狂ってしまった。

断ヤオは、この遊園地にいるすべての人間を従わせようとしたが、逃走者たちだけが従わない。

怒りを覚えた断ヤオは客や従業員たちに、逃走者を見つけ次第ハンターに通報し、エリアから消すよう命じた。

通報されないようにするためには、コンサートエリアにあるステージに行き、断ヤオに従うふりをすればいい。

.....

りま「これは、困ったわね…」

メールを受け取り、コンサートエリアへ急ぐりま。その姿を、客に見つかった…

客「こいつ、断ヤオ様に従ってないやつだ！」

客2「許さん、こいつを消せ！！」

りま「ちょっと、そんなに騒がれたら…」

ハンター「……………！」

りま「困るって…来た！」

客たちの声をハンターが聞きつけ、りまを追いかける。

りま「無理…速すぎる…」ポント

真城りま確保 残り9人

ハンターの速さに、ひれ伏したようだ…

.....

プルルル…プルルル…

三条『シヨッピングエリアにて、真城りま確保。残り9人』クイーンが捕まったということは、ガーディアンは俺1人ですか…」

竜崎「尚、この確保は客の通報によるものである」客は多いからな。見つかったらやっぱりきついかな…」

その時、竜崎は何かに気付く。

竜崎「客が多いってことは、隠れたほうがいってことに感じるが、違うな。強行突破が正解だ！」

隠れていたら、前半戦をすべて隠れて過ごさなければいけないことになる。隠れているとき、ハンターが近くを通りかかったらどうするだろうか？当然その場所から離れることになる。離れようとしたとき、客に見つかったら一巻の終わりだ。

竜崎が言った強行突破は、一番無茶な戦略に感じるかもしれないが、期待値的には一番いい。時間をかけて少しずつ進んで行くくらいなら、いつそのこと全力で駆け抜けて、1秒でも早くステージに行く方がいいに決まっている。

竜崎「よし、着いたな」

竜崎の策に加えてツキも竜崎に味方した。竜崎がもともといたのはコンサートエリア。ステージがすぐ近くだったのだ。

断ヤオ「お前、俺にひれ伏せ！」

ステージにいた断ヤオが、竜崎に指をさした。

竜崎「はい。分かりました。これからはあなたに従います」

竜崎は、従うふりをするため仕方なく敬語になった。

断ヤオ「よし、いいだろう。これからお前も俺の手下だ！」

竜崎悠太 ミッションクリア

ミッションをクリアしていないのは竜崎以外の8人。果たして、クリアできるのか！？

ミッション3 part1 暴君断ヤ才登場(後書き)

ドラマパート、やっぱり書きにくいですね。

ミッション3 part2 最善の策

現在、逃走者たちは通報を避けるためにステージに向かう。
このミッションの結末は2つ。確保か、ステージにたどり着くか。
果たして、誰がクリアできるのか？

.....

前半戦終了まで残り45分。ようやく前半も折り返し地点といったところだ。

そんな中与えられたこのミッション。通報を避けるため、逃走者たちは走る…

黒子「着きましたの！あなたが断ヤオですね？」

ステージにやってきた、白井黒子。断ヤオを見つけ、話しかける。

断ヤオ「そうだ。お前、俺に従うか？」

黒子「こんな奴に従いたくはありませんけど、仕方ありませんの。従いますわ！」

断ヤオ「そうか。ならお前も今日から俺の手下の1人だ。ハッハッハッハッハ！」

黒子「うざいのですの…」ボソッ

白井黒子 ミッションクリア

.....

結城「これは…宝箱だね」

ステージエリアに入り、ステージを目の前にして宝箱を発見した、
結城秋子。

結城「いま、ハンターが放出される確率って、いくつなんだろう…」

現在、宝箱は4つ開けられているため、ハンター放出の確率は、4
分の1だ…

結城「さすがに、1分の1ってことはないだろうし…開けてみよう
！」

パカッ

『無敵サングラス』これをつけると、ハンターが仲間と間違え、1
分間追われなくなる。

結城「予選にもあったやつだね。予選ではアイテム使わなかったか
ら、今回は使ってみよう！まあ、使う状況に陥らないのが一番いん
だけどね…」

定番アイテムとはいえ、強力なアイテムを獲得した結城。これは、
優勢になること間違いなしだ…

結城「あ、ステージあった」

結城は、そのままステージにたどり着いた。

断ヤオ「お前、俺に従うのか？」

結城「はい、従います」

結城も、ここは敬語になる。

断ヤオ「よし、お前も手下だ！ハッハッハッハ！」

結城「はい、よろしく願います！」

すっかり本物の手下のようになっていく。断ヤオがうざいという感情は、ないようだ…

結城秋子 ミッションクリア

.....

その後も、ステージにたどり着く者が続々と登場した。

なのは「よし、これで何とかなったね」

はやて「いや、それにしても面白い人やな。あの断ヤオって人」

三条「ふう、これでクリアですね」

高町なのは、八神はやて、三条海里 ミッションクリア

この3人がミッションをクリア。これでクリアしていないのは、上

条当麻、ユーノ・スクライア、一ノ瀬玲奈の3人となった：

.....

一ノ瀬「早く行きたいけど、客も多いし、隠れながら行くしかないわね」

ショッピングエリアにいる一ノ瀬。実は、ゲームが始まってからずっと動いていない。隠れているだけだ。

今回のミッションは強制参加。しかし、それでも一ノ瀬は慎重に行動する。

ユーノ「一ノ瀬さん。何してるの？」

隠れながら行動していた一ノ瀬と、ユーノが出会った。

一ノ瀬「何してるのって、客の様子を見てるのよ。見ればわかるでしょ？」

ユーノ「あ、うん。そうだね」

一ノ瀬「それにしても、客多いわね…すり抜けるのが難しそうね…」
確かに、客の数は多い。隠れながら行っていたら、一瞬のすきを突かれて終わる。そんな結末が関の山だが、一ノ瀬はこういう時、必要以上に慎重になる。それは一ノ瀬の性格からなのか、それとも、過去の経験が一ノ瀬をそうさせているのか…

一ノ瀬は、幼少の頃に一家を詐欺でつぶされた経歴がある。そのせ

いか、人を信じられなくなってしまったのだ。

ユ一ノ「あのさ、もう強行突破してもいいんじゃない？どうせ無理だよ、この中をすり抜けていくのは」

ユ一ノが、竜崎と似たような考えを思いついた。

一ノ瀬「馬鹿にしないでよ。必ずどこかに抜け道があるわ。行きたくないならあなた1人で行きなさい」

しかし、一ノ瀬はそれを拒んだ。ここで強行突破するのは、自分から命を捨てに行くようなものだと、一ノ瀬は思ったからだ。

ユ一ノ「そう…じゃあ、行くね」

一ノ瀬「勝手にして。私はこのまま隠れながら行くわ」

ユ一ノは、一ノ瀬の元から離れ、再びステージヘリアへ向かった。

その1分後のことだった…

客「おい、人がいたぞ！」

客2「あ、お前断ヤオの手下じゃないな！消えろ、消えろ！」

客たちが、隠れていた一ノ瀬を発見した…

一ノ瀬「見つかった？でも、私には秘策があるわ」

一ノ瀬は、建物と建物の中に隠れていた。見つかりにくい場所だが、

今のようにもし見つかったら大丈夫という保険を、一ノ瀬は打っていたのだ。

ハンター「……………！」

近くにいたハンターが気付いた。当然一ノ瀬を追いかける。

一ノ瀬（問題ないわね。ここは細い道の真ん中。ハンターが前から来たから、後ろに逃げればいい。そして、後ろに逃げれば、建物がたくさんあるから、確実にハンターを撒ける。狭い道だから、客に見つかることもない…）

一ノ瀬の保険とはこうだ。前か後ろ、どちらかからハンターが来たとしても、ハンター側に逃げればいい。そして、そのどちらに逃げたとしても、建物が入り組んでいるため、比較的ハンターを撒きやすいのだ。今一ノ瀬がいた場所は、まさに絶好の場所。

もちろん、これは体力がなければできない。いくら建物が多くても、圧倒的なスピード差があつては意味がないからだ。だが、一ノ瀬の成績は竜崎に負けず劣らずの10段階評価のオール9。（ちなみに竜崎は理数系が10で後は8と9）当然、体力もある。

一ノ瀬「撒いた…？周りには客もいないし、何とかなつたわね」

しかし、一ノ瀬の前からハンター…

一ノ瀬「前からも！？後ろに逃げないと！」

一ノ瀬は後ろに逃げた。しかし、逃げた先にはさっきのハンター…

一ノ瀬「挟み撃ち…これは終わったわね」

ポンッ

一ノ瀬玲奈確保 残り8人

一ノ瀬「あんなにいい場所にいたのに、災難ね…」

どれだけ最善の策をとっても、どうにもならないことというのがこの逃走中にはある。だからこそ、頭脳と体力、そして運が必要なのだ…

ミッション3 part2 最善の策(後書き)

さて、残り8人！

何人が後半戦に進むのでしょうか！？

ミッション3 part3 道具の使用

ミッション3をクリアしていないのは、上条とユーノのみ。
いち早くステージに行かなければ、いずれは捕まってしまう。
ステージを目指して、2人は走る！

.....

ユーノ「ステージが目の前！でもハンターがいて動けないなあ」

一ノ瀬と別れてから、どうにかステージの前にたどり着いたユーノ。
一ノ瀬の確保情報を受け取り、ほっとした直後にこの事態だ。

ユーノ「客がいるなら間違いなく強行突破なんだけど、ハンターじやなあ……」

今ハンターの前に出ていくというのは、ただつかまりに行くだけ。
自殺行為だ。そんな困っているユーノの近くに、上条が現れた。

上条「何やってんだ、こんなところで？」

ユーノ「上条さん。実は、ハンターがいて動けなくて……」

上条「そうか、それは困った……ん？」

上条が、何かに気付いた……

上条「いい作戦がある。ちょっと聞いてくれ」

ヒソヒソヒソ…

ユーノ「え？でもそれは…」

上条「分かってる。でも頼む！今少しハンターが離れたとしても、どうせ客に通報されるのがおちだ！」

ユーノ「…分かりました」

………

ステージ前には相変わらずハンターがいる。その前に、ユーノが出て行った。

ユーノ「おい、こっちだぞー！」

ハンター「……………！」

ハンターを呼んだユーノは当然ハンターに追いかけられた。距離も十分近いので、普通ならあっさり捕まるところだが…

ユーノ「蒸気機関車セット使用！（石炭不味かったな…）」

蒸気機関車セットを使ったユーノの走る速度は、ハンターの3倍となる…

ビュウウウウン！

ハンター「……………！？」

ユーノ「速い！これならこのエリアを10分で1周できる！」

そのスピードにいちばん驚いたのはユーノだろう。ユーノも魔法使
いだが、こんな速度では走ったことはない。

あっという間に、ハンターを撒いてしまった…

上条「よし、助かったぜ」

ユーノがハンターを引きつけたことにより、ステージに行けるよう
になった。

上条「なんか、ユーノを利用したみたいで悪いけど、とにかくこれ
でミッションクリアだ！」

利用したみたいではなく、利用した…

その後上条は、タンヤオの元に行きミッションをクリアした。

上条当麻 ミッションクリア

.....

残っているのは、ユーノ・スクライアただ1人。しかし、今のユー
ノは蒸気機関車セットを使っている。ゆえに、この程度のミッシ
ョンをやることくらい、造作もない…

ユーノ「はあ…やつとこの道具の効果が切れた…それに、ステー
ジにもつけた。はあ…はあ…これ、確かに早く走れるけど、体力が持
たないよ…」

結局走るのは自分。体力を使うのは当然だ。

ユーノ「まあいいや。えっと、あなたが断ヤオさんですね。あなたに従います！」

断ヤオ「ん？おお！お前が最後の1人か！これで俺は、この遊園地のやつらすべてを……………」

バタッ

ユーノ「うわあああ！断ヤオさん、大丈夫ですか？」

断ヤオは、突然倒れてしまった。

立直「心配ない。欲を満たした後に起こる一時的なものだ。数分で目が覚めるぜ」

ユーノ「え…あなたは？」

立直「俺は立直。麻雀の精霊の、1翻役のリーダーを務めている。そんなことより、移動しなくていいのか？」

ユーノ「そうだね、移動しようか…」

ユーノ・スクライア ミッションクリア

……………

プルルルル…プルルルル…

なのは「メールだけど、2通来てるね。もういつぺんに送るのやめてほしいんだけどな…」『ミッション3結果。無事、全員が断ヤオの手下に就いたふりをした。これにより、客からの通報も完全に消えた』よかった…」

上条「『尚、客たちは催眠術にかけられていた。今回君たちが断ヤオに従ったふりをしたことで、催眠は解け、いつも通りの遊園地に戻った』なるほど…」

そして、2通目…

竜崎「『通達2。逃走中を楽しんでいる君たちに伝えておきたいことがある。現在残り時間30分となっている。これより、園内に置いてある宝箱をすべて回収させてもらう』宝箱か…結局見つけれなかったな」

宝箱は、案外見つかりにくい場所に置いてあったので、見つけれないのも当然といえば当然なのだ。

竜崎「メールはこれで終わりか…とりあえず、隠れ場所を探さないとな」

逃走者たちは、ステージに向くために動いてしまったので、隠れ場所を探すなりして、1から体勢を立て直さなければならない。

三条「とにかく、ここまで来ました。あと少しです！」

なのは「あと30分、逃げ切るよ…」

ユ一ノ「あと少しか…よくここまで残れたな…」

はやて「やったるで！」

上条「生活費のために、ここは意地でも逃げ切ってやるぜ！」

黒子「お姉さまの分まで頑張りますの！」

結城「竜崎君…私は…」

残る逃走者は、この7人に竜崎を加えて8人。それぞれの思いが交錯する中、前半戦最後の30分が始まる…！

…

ここは、とある部屋の中。逃走中の主催者は、現状をモニターでしっかりと観ていた。

主催者「残り8人か…残り30分で半分以上残っていると、少し問題だな…」

現在捕まったのは7人だ。

主催者「まあ、ここで減らすこともできるけど、それじゃあ後半戦が盛り上がらないか。よし、最後のミッションは、これにしよう…」

主催者は、キーボードをカタカタと叩き始めた。

そして十数秒後。画面にはMISSION4の文字が映し出されていた。それを見ると主催者は、ためらうことなくエンターキーを押

した
…

ミッション3 part3 道具の使用（後書き）

今回上条がやったことを見て、「なんだ、心理戦とかなんとかほざいてたけどこの程度か」と、思われた方もいたと思います。

……が！そんなわけありません。これで心理戦といってたら完全に前文詐欺です。

確かに、作者にL I A R G A M Eのようなすばらしい心理戦は書けません、少なくとも読者の皆様をうなずかせるくらいのごことはしたいと思っておりますので、よろしく願います。

牢獄DEトーク

ここは、牢屋。逃走中で確保された者や、予選落ちした者が入っているところである。確保者は現在27人と多いので、比較的広い牢屋となっている。27人全員が横になったってまだスペースが少し残るくらいだ。

美琴「もう、なんであんなところで捕まるのよ！」

ドラえもん「まあまあ、ゲームに参加できただけいいじゃないですか。モグモグ…」

のび太「あーっドラえもん！何食べてんだよ！？」

ドラえもん「ポケット返してもらったから…モグモグ…中に入ってた…モグモグ…どら焼きを食べてる…モグモグ…」

のび太「食べるかしゃべるかどっちかにしてよ、もう！それにしても暇だなあ…」

予選敗退の者は、ここで180分を過ごさなければいけない。酷だが、確保者の運命と思って割り切るしかない。

ワタル「それにしても、誰が前半戦残ると思う？俺の逃走中マニアとしての見解だと、なのはか、上条あたりは来ると思うけど」

沼川「逃走中マニアなら予選くらい突破しろよ！」

ワタル「あんな予選があるなんて聞いてねえよ！それで、誰だと思

うんだ？それじゃあ、そこのお前！」

ワタルが指を指した先にいたのは、予選落ちした良平だった。

良平「お、俺か？そうだな…見てる限り、上条って感じがするな。なんか、熱い感じがするぜ！絶対逃げ切ってやる！って闘志が伝わってくるんだよ」

上条が熱くなっている理由は、生活が楽になるからだ…

空海「面白そうだから、人気投票でもやんねえか？残ってる8人中で、誰が前半戦を逃げ切るか」

あむ「あ、それいい！」

藤田「おもしろそうですね」

こうして人気投票をすることとなった。が、そのとき安岡がある提案をした。

安岡「ちょっと待て、普通に予想しても面白くない。ひとつ面白い賭けをしないか？俺とお前らの賭けだ」

クロノ「法に触れるような賭けはなしだぞ」

安岡「分かっている。そうだな…ここに5万円がある。俺が負けたら、この5万円でお前ら全員にファミレスで飯をおごってやる。ただし、俺が買ったらお前ら全員で5万円作って俺に高級料理をおごる。どうだ？これなら法に触れることはない」

日本における賭博罪は、2011年現在では、こつこつ賭けなら許されている。

全員「やる!!」

安岡（前向きな奴らだ…）

安岡「よし。賭けの内容だが、ズバリ簡単。これからやる人気投票で、3位まで入ったやつらのうち、2人以上逃げ切れればお前らの勝ち。逃げ切れなければ、お前らの見る目がなかったってことで俺の勝ち。当然、俺は投票には参加しない」

佐天「面白そうね!」

あむ「本気で予想しよう…」

空海「盛り上がってきたぜ!よし、じゃあ紙に1人の名前を書いてくれ」

（数分後）

空海「投票終わったか?じゃあ石田さん、発表してくれ」

石田「ああ、分かった…」

人気投票ランキング 誰が前半戦を逃げ切るのか!?

1位	上条当麻	6票
2位	白井黒子	5票
3位	高町なのは	4票

4位	竜崎悠太	3票
4位	八神はやて	3票
6位	結城秋子	2票
6位	三条海里	2票
8位	ユーノ・スクライア	1票

結果はごらんのとおり、上位2名をとあるシリーズが独占し、3位には機動六課のエースオブエースである高町なのは。同票4位で頭脳派2人がランクイン。6位には意外性がありそうな結城、三条。そして8位、ユーノ・スクライア…

安岡「平凡なところだが、ここはこうなるか」

安岡は、結果を見て深くうなずいた。

フェイト「ユーノの1票って、お兄ちゃんが入れたの？」

「1票でかわいそうなユーノ。誰が入れたかが非常に気になるところだ。」

クロノ「誰があんなフェレットもどきに入れるか！僕はなのはに入れたんだ。ていうかフェイト、いい加減その呼び方はやめてくれ…」

フェイト「別にいい気がするけど…でも、だったらユーノの1票は誰が…私はなのはに入れたし…」

この2人でないとすると、よっぽど穴狙いで入れたか、予想の才能が全くない者が入れたかしか考えられない。ユーノには失礼だが…

その時、後ろで誰かが手を挙げた。それは…

藤田「じつは、僕が入れたんだよね」

藤田剣人。名門校に通っていて、竜崎のバイト先の先輩だが、覚えている人はほとんどいないだろう。

クロノ「ええっ！なんですか！？あんな奴に、なんで票を！？」

藤田「うーん。そういわれても困るけど、なんとなく入れなきゃいけない予感がしたんだよね」

一ノ瀬「なるほどね…」

藤田「ん？玲奈ちゃんなるほどって？」

一ノ瀬「この人、あまり出番ないじゃない。だから…」

藤田以外「ああ…」

藤田「ちよっと、それは酷いんじゃない！？確かに僕は予選落ちで、その予選だってあまり出てなかったけど、注目する点はたくさん…」

一ノ瀬「ないわよ。貴方ただ頭がよくて性格がいいだけで、社会に出たら間違いなくエリートコースの道を歩む人間だけど、それって普通の人。普通の人に出番はないわ」

藤田「ガーーーーー」

藤田は牢獄の隅で座り込んだ。

藤田「グスツ…玲奈ちゃんのばか…」

インデックス「ふさぎ込んだじゃったよ？」

唯世「これはちょっとかわいそうかも…」

一ノ瀬「別にいいわよ。それより、前半戦は残り25分になったわ。しっかり見ておかないと…」

そう、彼らが牢屋の中でバカ騒ぎしている間に、ゲームはまた5分進んでいたのだ。幸いなことに確保者はいない。

ジャイアン「よし、じゃあ俺の歌で応援してやるぜ！！」

のび太「ダメ！ダメ！今ジャイアンが歌ったら、逃走者もハンターもお客さんもみんな倒れてゲームが出来なくなっちゃうよ！」

ジャイアン「おいのび太！それはどういう意味だ！」

ドラえもん「まあまあ落ち着いて落ち着いて。さて、ゲームはまだ続くよ。前半戦もあと少し、逃走者たちには頑張ってもらいたいね。それじゃあ、僕はゲームの内容を見守るから、みんなも応援よろしくね！」

全員+ 「おう！」

牢獄DEトーク (後書き)

1話丸々使ってやってみました。どうでしょうか？最後の+ というのは、この小説を見てくださってる読者様のことです。

とりあえず、今回はゲストお呼びしております。藤田さん？

藤田「まったく、玲奈ちゃんにはほんと参ったよ。僕を地味な人みたくない方してさ…」

作者「まあまあ、この後書きには出してあげたんだからさ。勘弁してよ」

藤田「まあいいけどね。ところで、本文中で僕がちよろつといったけど、前半戦予選で僕が出てきたのって何回なわけ？」

作者「え〜と。ちょっとまってね」

・・・チエック中・・・

作者「台詞が2回のみ。しかもその台詞っていうのが…」

藤田「腕輪…かな？」

藤田「おや、メールですか。しかも2通届いてますね」

作者「の2つだけ。要するに状況説明係だね」

藤田「ガーーーーー！」

作者「あらま、また隅で座り込んだよ。それじゃあ、長くな
ってしまいました。これでこの回を終わらせていただきます。次
回もよろしくお願いします！」

ミッション4 part1 命の危機

前半戦も残すところ25分。

果たして、何人が逃げ切るのか？

そして、主催者が企画した最後のミッションとは？

.....

従業員「ナギナギランド名物の三千院帝フィギュアはいかがですか
ー」

ユーノ「いや、だからいいですって…なんでそんなおじいさんのフ
ィギュアを買わなきゃいけないんですか…」

従業員「現在無料で配布しております。どうです？」

ユーノ「完全に在庫処分じゃないですか。いりません！」

従業員とおかしな話をしていたユーノ。そんなユーノの近くに、ハ
ンター…

ユーノ「来たっ！失礼します！」

ユーノは店員に軽く挨拶して逃げた。

ハンターとの距離は50m強。建物も多いこの遊園地では、これだ
け距離があれば勝算は十分にある。

ユーノ「こっちに逃げれば…」

ユーノは、細い路地に逃げた。建物を利用してハンターを撒くつもりのような。当然ハンターもそれについてくる。

ユーノ「まだついてくるの！？あ…行き止まり…」

細い路地を通っているため、行き止まりもある。もはや、これまでだ…

ポンッ

ユーノ・スクライア確保 残り7人

ユーノ「ああ、運がないなあ…」

無限書庫の管理人。本の知識は、活かせなかったようだ…

……

プルルルル…プルルルル…

上条「『確保情報。シヨツピングエリア土産屋付近にて、ユーノ・スクライア確保。残り7人』だいぶ減ってきたな…」

そして、牢獄でもこの確保は話題となっていた。

ワタル「人気投票ビリのユーノってやつが捕まったぜ！」

藤田「僕の予想はハズレか…」

一ノ瀬「貴方の見当違いの予想なんて、誰も気にしてないわよ」

藤田「ちよっと…玲奈ちゃん、さっきから言つこときつくない？」

一ノ瀬「……フン」

……

ここは、麻雀の精霊たちがいる雀荘。元に戻った断ヤオと立直を加えて、また麻雀をしていた。（麻雀は4人でやるゲームなので一盃口が抜けた）

立直「ツモ。立直、ツモ、ドラ8、裏1。6000・12000だ」

断ヤオ「だーっ！なんで6巡目立直で3倍満なんだよ！やってられるか！」

三色「…次局に行くか」

（次局）

立直「断ヤオ、それだ。ロン。清一、平和、一盃口、ドラ3。親だから、36000だ」

断ヤオ「ちきしょおおおお！点棒がマイナスだあああああ！」

平和「落ち着いてくださいよ」

一盃口「まだ次がありますよ」

と、このように和気あいあいと楽しんでいた。が、そこに…

??「お前たち…消えろ！」

誰かが、刀を持って雀荘の中に入ってきた。

平和「だ…誰ですかあなたは！」

??「俺も麻雀の精霊の1人だ。が、もうやってられない。麻雀の精霊なんて、やりたくはない！が、ただ辞めるのもなんだ。だから俺が一番恨み、妬んでいるお前たち5人を、ここで斬る！」

ブンッ！

一盃口「きゃあっ！」

三色「おい、一盃口!?!お前…！」

ブンッ！ブンッ！

平和「うわっ！」

断ヤオ「グハッ！」

三色「ぐっ…！」

立直「なんだ…こいつは…！」

精霊5人は、あっという間に倒されてしまった。しかし、意識は残っている。だから、1翻役リーダーの立直が侵入者に話しかけた。

立直「おい、お前…精霊といえど俺たちの姿は人間と同じだ。こんな雀荘で事件を起こしたことはいずればれる…そうなればお前、間違いなく逮捕だぞ…」

??「ふん、そんなことか。問題ない。この遊園地に、時限爆弾を設置した。俺が逃げた後で爆発するような時刻に設定してある。つまり…逃亡の準備は整ってるんだよ！それじゃあ、また会おう。もちろん、会えたらだけだな…！」

侵入者はそれだけ言い残すと、雀荘を出て行った。

平和「どうするんですか…？この遊園地全体を爆破させるだけの爆弾があるとなると、僕ら確実に死ぬ…」

立直「俺たちは精霊だ。死にさえしなけりゃ、たいていの傷はすぐ直る。現に切られた傷だってもうあまり痛まない。だから、まずは客を避難させるんだ！客の命だけは守るぞ！」

4人「はい！（おう！）」

そしてこの事態は、もちろん逃走者たちにも深くかわってくることになる…

.....

ピンポンパンポン　ピンポンパンポン

竜崎「遊園地全体に放送？何があるんだ？」

立直「あーあーマイクテスト、マイクテスト。皆様に、お知らせがあります。実は、現在この遊園地には、爆弾が仕掛けられております」

竜崎「なに!?!」

はやて「爆弾やて!?!」

立直「我々のつかんだ情報によりますと、爆弾は後20分後に爆発するそうです。皆様、直ちに遊園地の外に出てください!遊園地の外に出れば、三千院家が避難場所となっております、そこは絶対安全です。繰り返します、現在遊園地に爆弾が…」

上条「20分後…ゲームが終わる時間とぴったしじゃねえか!」

三条「これは…困りましたね…」

なのは「とりあえず…ここから出ないと。でも、ゲーム中だし、出れるの?」

その時、逃走者たちの携帯が鳴った。主催者からの、メールだ…

ブルルルル…ブルルルル…

黒子「メールですの『ミッション4。放送は聞こえただろう。この遊園地に爆弾が設置された。だが、君たちはゲーム中のため遊園地の出口から出ることは許されない』そんなことを言ってる場合じゃありませんわ!」

結城『そこで、西エリアのコンサートエリアのステージの上にこの

遊園地から逃げるためのジェット機を設置した。ジェット機に乗れば、前半戦クリアとなる』よかった…逃げられるんだ…」

上条「『ただし、そのジェット機に乗るためには、チケットが必要となる。シヨップینگエリア、売店に行き、チケットをもらうこと。タダで配られているため、金を用意する必要はない。尚、ゲームが終了してもエリア内に残っていた逃走者は全員強制失格となる』ふむむむ…」

ミッション4 爆発から逃れる！

現在、この遊園地すべてを吹き飛ばすほどの時限爆弾が設置されている。

逃げるために、逃走者たちはコンサートエリアのステージの上にあるジェット機に乗らなければならない。

ジェット機に乗るためにはチケットが必要で、そのチケットはシヨップینگエリアの売店で無料配布されている。

ゲーム残り時間が0人になると、爆弾が爆発し、エリア内にいたプレイヤーは強制失格となる。

前半戦もいよいよ大詰め。最後のミッションをクリアし、後半戦進出を決めるのは何人なのか？

次回、生きるために逃走者たちが走る！

ミッション4 part1 命の危機(後書き)

ちょっとドラマパートが長い気がしますね(汗)

ミッション4 part2 チケット獲得へ

前半戦終了まで残り20分。

爆弾を回避し、ジェット機に無事乗れるプレイヤーは何人いるのか？

.....

竜崎「今俺がいるのが東エリアのテーマパークエリアだから、ショットピングエリア経由でコンサートエリアに行けばいいな」

このミッションは、現在逃走者がいる位置が重要になってくる。ジヤングルエリアからショットピングエリアまでは一番遠いから最悪。逆に、今ショットピングエリアにいる逃走者は最高だ。

そして、そんな最高の逃走者が1人。

はやて「お、ショットピングエリアってここやん。おまけに売店もすぐ近くにある！」

ミッション開始早々、運のいい魔法少女だ…

はやてはすぐさま売店に駆け寄った。

はやて「あれ、店の人がおらん」

当然だ。いま客や従業員たちは遊園地から逃げている。

はやて「あ、でもテーブルの上にチケットがあるな。これ、勝手に持っていてええんやろうか？」

無料配布だから、持って行っている。

はやて「まあ、命の危機って時にそんなこと言ってる場合やないな。持っていこ！」

八神はやて チケット獲得

売店からステージまでの距離は、およそ500m。普通に走れば、着く距離だ…

はやて「ほんなら、行くか！」

.....

三條「あ、高町さん」

なのは「三條君？偶然だね」

ショッピングエリアに向かう途中、偶然出会った三條となのは。2人でミツシヨンクリアを目指す…

三條「高町さん。売店ってあれですよね？」

なのは「地図にはそう書いてあるね。とりあえずチケットをもらって……ハンター！？」

なのはが、ハンターに気付く。その声で三條もハンターに気付いた。

三條「逃げましょう！」

なのは「うん！」

2人はフルスピードで走る。ハンターは当然それを追う。ハンターと2人の距離は30m。このままでは、2人同時確保もあり得る。

三條「あれ…？」

しかし、三條があることに気付いた。

三條（高町さんと俺の距離が、広がっている…？）

男と女とはいえ、小学生と高校生。走力の差は歴然だ。

三條「くっ！」「ポンッ

三條海里確保 残り6人。

三條「高町さん、意外とひどいですね…」

恨むなら、なのはではなく自分の走力を恨め…

.....

なのは「『確保情報。ショッピングエリア、売店付近にて、三條海里確保。残り6人』これ使ってもよかったけど、後半戦までとっておきたかったし…ごめんね、三條君」

なのはが言ったこれとは、ハンターに触れるとハンターを消せる、ハンター殺し手袋のことである。

なのは「でも、ハンターから逃げたせいでテーマパークエリアに戻ってきちゃったな。まあ、しょうがないか…」

捕まるのに比べれば、全然ました。

……

一方、なのはたちと入れ違いでショッピングセンターにたどり着いたのは、高校生の2人、竜崎と結城だ。

竜崎「これがチケットか、とにかく、1秒でも早くステージに行くぞ」

結城「うん…竜崎君」

竜崎悠太・結城秋子 チケット獲得

竜崎「結城、お前、体調でも悪いのか？さっきから全然しゃべらないけど」

結城「へ！？いや、なんでもない！なんでもない！」

竜崎「そうか…ならいいけど」

結城は、竜崎のことが好きなのだ。そのため、竜崎と2人きりになると、あまりしゃべれなくなってしまう。しかも、竜崎は鈍いため、結城のそんな気持ちに全く気付いていない。

竜崎「ここからステージまで500mか。残り時間が15分。ハン

ターに気を付けながら進んでも十分間に合うな。結城、時々後ろを向いてくれないか。そして、ハンターが来たら教えてくれ。俺たちはわき道を歩き、ハンターに気付いたらすぐ隠れる。それでいいな？」

エリアには5体のハンター。逃走者の数は6人。もう、ハンターに追われる確率が高くなっていることは確実だ。今まで以上に慎重に行動しなければならぬ。

結城「でも、後ろを向いたら前が見えなくて私、進めなくなっちゃう…」

竜崎「俺の手でもつかんでろ。そうすれば、いやでも俺と同じ方向に進めるだろ」

結城「え!?!」

結城の顔が一気に赤くなった。

竜崎「早くしてくれ。こうしてる間にも、ハンターに見つかるともしれない」

結城「う…うん」

ここまで鈍い男も、珍しい…

.....

残り時間は15分。チケットを手に入れているのは、はやて、竜崎、結城の3人だ。しかし、他の逃走者たちも確実にチケットに近づい

てきている。

このままでは、残っている6人全員が前半戦突破ということもありうる。そんな状況を見ていた主催者が、あることをしでかした。

主催者「おい、ちょっといいか、エリー」

エリー「なんででしょうか？」

エリーと呼ばれた女は、丁寧な口調で答えた。

主催者「今から言うことを実行できるか？」

ヒソヒソヒソ…

エリー「可能です」

主催者「そうか、なら今すぐやれ」

エリー「はい」

・・・

プルルルル…プルルルル…

メールだ…

上条「『通達。ゲーム残り時間は15分となった。これより、ハンターを1体追加する』はあ、なんだそりゃ!？」

はやて「『さらに、残り10分になると1体、残り5分になると2体のハンターが追加され、ハンターの数に9体となる。阻止する術はない。逃げ切りたいのなら、いち早くジェット機に乗ることだ』
ジェット機近いで。はよう行こう！」

黒子「『尚、ここで増えたハンター4体は後半戦には引き継がれない』まあ、後半戦がハンター9体で始まるのはごめんですからね」

本部通達　ハンターが増えた！

ゲーム残り時間が15分になった。これに伴い、ハンターが1体追加された。

残り10分になるとさらに1体、残り5分になると2体のハンターが追加される。

阻止する術はないため、ハンターから逃げたければいち早くジェット機に乗るしかない。

尚、ここで増えたハンターは後半戦には引き継がれない。

.....

上条「まいったな...ハンター6体か...」

ハンターが1体追加された為、現在は6体となっている。

上条「とにかく、気を付けて行動して...ほら来た！」

上条を、1体のハンターが捉えた。

上条「距離は十分...絶対大丈夫だ！」

ハンターと上条の距離は100m以上あった。この距離で、建物などを利用して逃げた上条をハンターは…

ハンター「……………?」

見失った…

上条「よし、振り切ったぜ。と、振り切ってるうちに売店に来てたんだな。じゃあこのチケットをもらって、よし、ジェット機へ急ぐぞ！」

上条当麻 チケット獲得。

現在、チケットを獲得しているのは八神はやて、竜崎悠太、結城秋子、上条当麻の4人。
逆に、チケットをまだ手にしていないのは、白井黒子、高町なのはの2人。

ハンターを逃れつつ、ジェット機まで進むことはできるのか！

ミッション4 part2 チケット獲得へ(後書き)

だいぶ減ってきましたね、6人かあ…

一応今後の展開は決めているつもりですので、アイデアに悩んで更新が止まるなんてことはないと思います。少なくとも、前半戦が終わるくらいまでは…

ミッション4 part3 ハンター増加

ゲーム残り時間15分。

ジェット機に乗れば前半戦クリアだが、たどり着けるのか！

.....

黒子「それにしても、このアイテムが役立つ時が来るとは…」

黒子の持っているアイテムは、周りに人がいると、それを感知して映し出す特殊メガネだ。ただ、客さえも認識してしまうので、絶対に立たないと思われていたのだが、客がいないこの状況では、ものすごく役に立つ。

黒子「50m先に人がいますわね。ハンターの可能性のほうが高いですし、ここは隠れますの」

黒子は建物の陰に隠れた。案の定、黒子が見た人間はハンターであった。

黒子「とりあえず、これで何とかかなりそうですわね」

そして彼女は、チケットを獲得するために歩き出した…

.....

はやて「おっ！着いたで！」

ステージにたどり着いた八神はやて。ゲーム残り時間は15分だが、

ここでジェット機に乗れば、すぐにクリアとなる。

はやて「おーい、従業員さん。チケットあるから乗せてくれんか？」

ジェット機にいる従業員に呼びかけた。従業員はそれに気づき、返事を返す。

従業員「チケットがあるのなら、今すぐにも乗れますよ。乗りますか？」

はやて「もちろん」

従業員「なら、どうぞ」

はやてはゆっくりと、ジェット機に乗り込んだ。

八神はやて ミッションクリア 残り5人

はやて「はあくこれはまたえらい豪華なジェット機やな」

従業員「今回のために、三千院様が特別にご提供してくださいました」

ジェット機の中は、普通の席のほかに、個室もある。そのほかにもカフェ、ゲームセンター、風呂などの娯楽施設もあり、ここで暮らしていくのも十分可能といえる豪華さだった。

はやて「とりあえず、席に座ってるか。あれ…？誰か来たわ」

はやては窓から外を覗いた。すると、ジェット機に向かって誰かが走ってきたのだ。それは…

竜崎「結城、ハンターは来てないか？」

結城「う、うん。大丈夫…」

竜崎悠太と、結城秋子のコンビ。ちなみに竜崎は、今まで1度もハンターに追いかけてられない。本文中には出てきていないが、ハンターを見つけたことはある。しかし、持ち前の慎重さでハンターに気付かれる前に隠れていたのだ。

竜崎「早い話、ハンターに見つからなきゃ必勝だからな。結城、あと10mだ。一気に走るぞ！」

結城「あつ…竜崎君！」

2人はそのまま、ジェット機に乗り込んだ。

竜崎悠太・結城秋子 ミッションクリア 残り3人。

はやて「2人ともおめでと〜」

竜崎「八神か。お前が1番だったんだな」

はやて「メールが届いたとき、ちょうど売店の近くにいたんや。ラッキーやろ？」

竜崎「なるほど。それはラッキーだったな」

竜崎は深くうなずいた。

はやて「それよりも、なんや2人で手なんかつかないでもうて、えらいラブラブやんか」

2人の手は、まだ繋がったままだ…

結城「……!?!」

竜崎「ああ、そういえばそうだな。というか、ラブラブって、俺たちはそういう関係でもないぞ。それじゃ、俺個室借りて休んでるから、用があつたら来てくれ」

結城「あ…竜崎君」

竜崎はさっさと、部屋に行ってしまった。

結城「竜崎君…」

はやて（なるほどな）。竜崎君も罪作りな男やな。ま、私にはどうしようも出来んし、静かに見守っておくか）

はやては、結城の竜崎に対する想いに気付いたようだ。

はやて「ま、がんばるんやな」

はやては、結城の肩に手を置いて言った。

結城「え!?!…はい…」

結城は、再び顔を赤くした。

はやて「それにしても、次は誰が来るんやろな」

.....

プシューーーーーー

黒子「なんですの、今の音！？まさか、時間が！」

残り時間が10分になった。これに伴い、ハンターが1体追加され、ハンターの数合計7体となった。

黒子「まあ、メガネがある限りハンターに気付かれる前に逃げられますので…何とかなるといえばなるんですが…」

しかしその姿を、ハンターが捉えた…

黒子「50m後ろにハンター！しかも追っかけてきてますの！」

このメガネでは、半径50m以内の人しかとらえられない。それがこのメガネの、弱点の1つだ…

黒子「まずいですの、ここは1本道で、建物も大してありませんわ！」

そんなことを言っている間にも、ハンターとの距離はみるみる縮まっっていく。そして…

黒子「あっ…！」ポーン

白井黒子確保 残り2人

黒子「少しこのメガネの力を過信しすぎていましたの…」

.....

プルルルル…プルルルル…

なのは「『確保情報。ショッピングエリア、ホームセンター付近にて、白井黒子確保。残り2人』残り2人って、もしかしてもうみんなミッションクリアしてるの!？」

ミッションクリアの情報は、逃走者たちには伝えられない…

なのは「まずい、私まだチケットすら手に入れてない!早くしないと…」

残っているのは、エースオブエース、高町なのとは…

上条「チケットは手に入れた!あとはジェット機まで走るだけだ!」

イマジンブレイカー
幻想殺し上条当麻。残り10分で、ジェット機までたどり着けるか

…!

ミッション4 part3 ハンター増加(後書き)

次回、前半戦終了です！

ミッション4 part4 そして新たな始まりへ…

ゲーム残り時間は10分。

この時間が0になった瞬間、エリアにいた逃走者は強制失格となる。現在エリアにいるのは、高町なのはと上条当麻。

果たして、間に合うのか！

………

なのは「売店がすぐそこにあるけど、またハンターがいる…」

先ほどは、二条を犠牲に何とか逃げたなのは。今は、自分1人だ…

なのは「手袋使って強引に行くって手もあるけど、それはまだ早いよね…」

1度手袋を使ってしまうえば、もう使えない。出来ることなら、後半戦までとっておきたいものだ。

〈3分後〉

なのは「まずいな〜かわるがわるハンターが来るよ。もしかして、待ち伏せ？」

ハンターは、エリア内をランダムに歩く。待ち伏せは、絶対にしない。

しかし、これで残り時間が7分となってしまった。あと2分たてば、ハンターが2体追加され、エリア内のハンターは、9体となる…

.....

一方、上条当麻は、ジェット機の100m後ろまで来ていたが、なのは同様、ハンターがいて動けない。

上条「くそっ……！ いったいどうなってるんだ。あのハンターがジェット機から離れれば30秒でクリアできるのによ！」

どうしても、苛立ちを隠せない。この状況で、イライラせずにハンターが過ぎ去るのを冷静に待ってられる人といえば、竜崎か一ノ瀬くらいのものだろう。

そうこうしているうちに、残り5分。

プシューーーーーー

ハンター2体追加！

上条「やべえ、追加されちまった！でも……」

残り5分になった瞬間、都合よくハンターがジェット機から離れた。

上条「よし、今ならいける！ 今いかなかったら、もう絶対に行けなくなる！」

エリアには、9体のハンター。ぐずぐずしていると、見つかってしまっ……

上条「よし、いけえ！」

上条「そうじゃなくて、間一髪でジェット機に乗り込んだだけだよ」
はやて「あ、でも上条君がヘッドスライディングしたこの搭乗口の
床、ちよつとまがつとるで」

4人「……………」

従業員「あの…さすがにこれは弁償していただかないと。20万円
くらいになります…」

上条「不幸だあああああ！」

……………

残り時間3分。残っている逃走者は高町なのは1人だけとなった。
そして、この情報を含めた現状が、逃走者たちに伝えられた。

ブルルルル…ブルルルル…

なのは「『ゲーム残り時間が3分となった。現在後半戦進出を決め
ている逃走者は、八神はやて、竜崎悠太、結城秋子、上条当麻の4
人。エリア内にいるのは、高町なのは1人』え…ってことはエリア
にいるの私だけ!？」

そしてこのメールは、牢屋でも大変な話題となっていた。

安岡「ってことは、この高町ってやつが後半戦に出れなきゃ、俺の
勝ちだな」

現在、人気投票トップ3の中では、上条当麻が後半戦進出を決めて

いる。ここでなのはも後半戦に進めば、安岡以外の確保者たちの勝ちだ。

ユーノ「ギャンブルかあ…ちょっとやってみたかったな」

安岡がギャンブルをやるうと提案した後に確保された者は、このギャンブルに参加していない。

フェイト「なのは…頑張つて！」

美琴「私たちの5万円がかかっているのよ！」

ツナ「間に合ってくれ…！」

皆、必死になのはを応援する。して、そのなのはは…

なのは「チケットは何とか手に入れたけど、ハンターがもいるよ…」

多すぎるハンターに、困惑していた…

ゲーム終了まで、残り1分30秒。

なのは「まずい！これはもう強行突破！」

なのはは全力で飛び出した。近くにいたハンターが気付く。

なのは「これで…！」

ハンター「……………！？」

ハンター殺し手袋発動！ハンター消滅。

ゲーム終了まで、残り45秒。

なのは「あ、ジェット機が遠くに見えた！」

なのはとジェット機の距離は200m。200mを45秒で走る。

なのは並みの走力を持っていれば、まったく問題ない…

ゲーム終了まで、残り20秒

問題ない…はずだった！

なのは（え…？どうして…全然速く走れない…）

なのはとジェット機の距離、100m。

実はこの時、ハンターを振り切り、その後もハンターに警戒し続けたせいで、なのはの体力は、肉体的にも精神的にもボロボロだったのだ。

ゲーム終了まで、残り10秒

なのはとジェット機の距離、40m。

10

5

6

7

8

9

0

1

2

なのは「あと20mくらいだけど、行ける!?!?」

3

4

前半戦、終了…!!

なのは「や、やっぱり間に合わなかった…」

高町なのは強制失格 前半戦終了

.....

平和「客は全員避難したんですか？」

立直「ダメだ、1人逃げ遅れた！」

三色「では、その者は死んだと…？」

立直「いや、そういうことでもないらしい。見る、外を」

パーーーーーン！パーーーーーン！

一盃口「花火…？」

ゲーム終了と同時に爆発するはずだったはずの遊園地は、まったく被害を受けていない。かわりに、花火が上がった。

立直「騙された！あいつに！」

一盃口「どういふことですか？」

立直「遊園地をすべて爆発させたら、さすがに大事になる。おそらく、国単位で追われる。だからあいつは、嘘をついて、俺たちを混

乱させた。俺たちの目を欺いて逃げるくらいなら、それで十分だったんだ！」

三色「それで…どうする？」

立直「追うに決まってる！実は、あいつの靴に発信器を付けておいた。あいつがいる場所は、ここだ！」

平和「ここは…」

断ヤオ「あんまり行きたくねえ場所だが、仕方ないか…」

立直が示した場所。それは、逃走中の新たな舞台だった…！

ミッション4 part4 そして新たな始まりへ…（後書き）

前半戦が終わりました！ですが、すぐに後半戦は始まりません。

予告しておきますと、これからジェット機の中での逃走者たちのひと時。それと敗者復活戦を書きたいと思っております。

全5〜7話くらい…まあ、まだ予定の段階ですので何とも言えませんが、それくらいを予定しております。

後半戦をすぐに書けよ！と思っている方、申し訳ありませんが、少しの間だけお付き合いください。

空の旅1 後半戦会場へ

ここは、とある部屋。前半戦を終えた主催者は、エリーと何か話をしていた。

主催者「エリー。後半戦の準備はできているか？」

エリー「はい。ジェット機では3時間ほどフライトの時間がありますが、すでにエキストラも準備されているので、いつでも始められる状態です」

主催者「そうか…」

主催者は、持っていた紅茶を一口飲み、一度息をついた。

主催者「ふう。まあ、楽しみだな、後半戦」

エリー「失礼ですが、私には、前半戦の様子を見ていた限りでは、後半戦で5人くらいは逃げ切ってしまうのではないかと思っていますのですが」

すると主催者は、かすかに笑った。

主催者「フフ…まあ確かに逃げ切るだろうな。だが、それは前半戦の難易度でやった場合だ」

エリー「では、後半戦のほう逃げ切るのは難しいと？」

主催者「いや、ミッションの難易度はほぼ同じに設定してある。あ

くまでミッションの難易度だけだがな。ただ、あるものがあるせいで、普通の難易度のミッションが、ものすごく難しく見える」

エリー「あるもの…?」

主催者「そう。人間であれば絶対に持っているもの。感情だ。さて、そろそろ後半戦の会場に逃走者たちが移動する」

エリー「手配はすでにすんでありますが、感情があると難しく見えるとは、どのような…?」

主催者「すぐに分かるさ。ゲームが終わった後に逃走者が感じているもの。それは喜びか、はたまた絶望か…」

.....

ブルルルル…ブルルルル…

はやて「メールやな」前半戦が終了した。前半戦を逃げ切ったのは八神はやて、竜崎悠太、結城秋子、上条当麻の4人」なんや、結局4人だけかいな」

竜崎「これより、逃走者、確保者を含めた50人で、後半戦の会場へと移動する」50人もジェット機に…まあこれなら大丈夫か」

ジェット機は相当な広さとなっており、50人乗っても全く問題ない。

5分後、最初にジェット機に現れたのは、予選B会場を突破して、後半戦からゲームに参加する者たちだった。

ヒナギク「へ〜大きいわね。ナギったら、こんなものまで用意して…」

このジェット機は、三千院家提供だ。

アカギ「それじゃあ…行くか」

カイジ「ああ！」

博徒2人は、やる気が入っている。

そして、B会場の15人が搭乗した。

その後、確保者たち31人も来たのだが…

竜崎「牢屋ごとくるのかよ…」

なんと、マッチョ10人が牢屋を持ち上げてきていた。もちろん、確保者たちは牢屋の中に入っている。

上条「あのマッチョ、スゲーな。どう考えても1トン以上あるぞ…」

ともかく、これで50人全員が搭乗した。（確保者たちは牢屋に入ったまま）

その時、機内にアナウンスが流れた。

ピンポンパンポン

「皆様、ご登場いただけましたか？当機はこれより、後半戦会場へと移動します。後半戦会場へは、3時間ほどで到着いたします。それまで、ごゆっくりおくつろぎください」

空海「おい、ちょっと待て！俺らは牢屋に入ったままか！？」

のび太「ええ〜」

ワタル「ふざけんな！」

確保者たちが口々に文句を言った。それに、アナウンスが答える。

「確保者の皆様、ご安心ください。皆様には、1度牢屋から出て、敗者復活戦を行っていただきます。見事残れば、本戦に返ることが出来ます」

確保者たち「！！！」

沼川「まじか！」

クロノ「これはチャンスだな……」

「それでは、離陸いたします」

ジェット機は、特別に設置された滑走路の上を走り、大空へと飛び立った。

.....

客室乗務員「何か飲み物はいかがですか？」

ハヤテ「あ、すみません。では僕は麦茶を…」

はやて「それじゃあ私はリンゴジュースで」

客室乗務員「分かりました、ハヤテ様が麦茶で、はやて様がリンゴジュースですね…あれ？」

名前が、同じである…

客室乗務員「も、申し訳ありません！綾崎様が麦茶で、八神様がリンゴジュースですね。はい、どうぞ」

客室乗務員は、2人に飲み物を渡した後、すぐに去って行った。

はやて「なんや君、ハヤテ君いうんか？」

ハヤテ「はい、なんかかぶってしまいましたね…あれ、なんですかこの紙」

ハヤテの前に、1枚の紙が置かれた。

表記方法の変更 名前がかぶってしまいました。今後ハヤテは綾崎、はやては八神と表記させていただきます。混乱させてしまい、申し訳ありませんでした。 byヨーテル

綾崎「と、いうことだそうですね」

八神「了解や」

空の旅はまだ続く。逃走者にとって、唯一の安息の時間かもしれない。
い。
そして、敗者復活戦の内容とは……？

空の旅1 後半戦会場へ(後書き)

次回から敗者復活戦です。消えてしまったあのキャラが、復活することにご期待ください！

空の旅2 敗者復活戦

確保されたすべての者が、牢屋から出された。理由は一つ、敗者復活戦を行うためだ。

三条「でも、なぜ教室なのですかね…」

彼らは牢屋から出された後、ジェット機の中のとある1室に案内された。そこは、よくある学校の教室だったのだ。

客室乗務員「私は、ここに案内しろと言われただけです。では、失礼します」

客室乗務員は、確保者たちに1礼して去って行った。

ドラえもん「とにかく…中に入ってみようよ」

のび太「う…うん」

逃走者たちは意を決して中に入った。すると…

好きな席に座って待て！

こんな文字がバカでかく黒板に書いてあった。

クロノ「じゃあ…とりあえず座るか」

そして座ること5分。教室の扉が開き、誰かが入ってきた。その人物は、手に大きな段ボールを抱えていた。

??「やあ…どうも…重いこれ…」バタッ

段ボールの重さに耐えられなかったのだろうか、倒れてしまった。

あむ「つて、先生!？」

唯世「何やってるんですか!？」

そう、この人物はあむたちの担任、二階堂悠だ。

二階堂「い…いやあ。これ重くてね…」

唯世「これはいつたい…」

唯世が段ボール箱を開けると、そこに入っていたのは大量のフリックボードだった。

美琴「つてことは…」

スネ夫「またやるの?もうやりたくないな」

二階堂「そう、クイズだよ!」

オープニングゲームはすべての人が見ていたため、何をやるかは大体見当がつくのだ。

二階堂「それじゃあ、早速ルール説明!」

敗者復活戦 ルール

敗者復活戦では、オープニングゲーム同様クイズをやる。出題者が出した問題に、12問連続で答えられたら復活となる。但し、1問でも間違えればそこでゲームオーバーだ。問題はやはり最初のほうが簡単で、最後のほうが難しい。回答は、すべてフリップに書くこと。持ち時間は1分。

.....

藤田「クイズ…ね。大学生の僕には楽勝なのかな？」

一ノ瀬「どうだか…」

今回、藤田は有名大学の学生ということで、復活候補の筆頭だ。

二階堂「ちなみに僕は、1〜4問目までの担当だから、そこんとこよろしく」

スネ夫「あの〜」

スネ夫がゆっくりと手を挙げた。

スネ夫「オープニングゲームでもそうだったんですけどね、途中から小学生には分からない問題が出てくるんですけど、そこはどうすれば…」

二階堂「うん。でも、学校でやる問題の難しさは、中学生レベルまでだから、何とか頑張つて！」

スネ夫「ええ!?!」

三條「仕方ありません、ここはやりましょう。スネ夫さん」

スネ夫「そつちは私立だからまだ何とかかなるかもしれないけど、こつちなんて地味ーな公立小だぞ！出来るか！」

二階堂「はいはい、落ち着いて落ち着いて。それでは、問題をはじめまーす」

二階堂がスネ夫を何とかなだめ、敗者復活戦は始まった。

二階堂「じゃあ問題1！…を僕が出すんじゃないかって、ちゃんとモニターで出すから、モニターに注目してね」

ズデーッ！

誰かが古いお笑い風にこけた音がした、誰だろう…

沼川「イテテテ…なんだよ」

相変わらずの、バカだ…

.....

問題1 野球とサッカー主に足を使ってやるスポーツはどっち？

ツナ「ええ！何その問題！？」

美琴「これ間違える人は相当のバカよね…というか人間ですらないわ」

確かに、これを間違える人間はいないだろう…

二階堂「はいそこまで。じゃあ、みんなフリップをあげて〜」

正答

サッカー

解説

もはや不要でしょう。

全員の答え

サッカー

二階堂「全員正解！さすがにこれは大丈夫だね。じゃあ2問目！」

問題2 長方形の面積の求め方は？

静香「これも簡単…よね」

藤田「大学生にこれは、手ごたえがなさすぎるけどね」

どうやら、まだまだ余裕のようだ…

二階堂「そこまで、フリップをあげて〜」

正答

縦×横

解説

長方形の面積は、縦×横で出せます。小学校3、4年レベルの問題です。って、もはや解説ではないですが、これくらいしか説明しようがない…

のび太の答え

たて+よこ

のび太以外の答え

縦×横

二階堂「のび太君不正解！あとのみんなは正解！」

まさかの、不正解者が出た…

スネ夫&ジャイアン「のび太バカで〜」

ドラえもん「のび太君…さすがにそれくらいは当てようよ。なんで足すの？」

のび太「あれ？+になってる…」

ドラえもん「まさかのび太君。いつものび太をのび犬と書き間違えるのと同じ要領で間違えたの…？」

ドラえもんが、冷ややかな目でのび太を見た。

のび太「…そうみたい」

ドラえもん「もう！帰ったら字の練習だね！」

のび太「いやあああああ」

二階堂「あの〜話してるとこ悪いけど、早く牢屋に戻ってくれないかな、のび太君。すすめられないから」

のび太「う…うん」

のび太は、しぶしぶ牢屋に戻った。

野比のび太失格 残り30人

静香「これは…ちょっと油断するとすぐ間違えそうね」

のび太が特別なだけだが、ともかく教室内に緊張感が生まれた。

二階堂「じゃあ第3問！」

問題3 トランプの枚数、JOKERを1枚入れると1セットで何枚？

小五郎「あ〜？常識だろ、こんなの」

唯世「ガードイアンとして、これを間違えるわけには…」

確かに、簡単な問題だ。だが、油断すれば先ほどののび太のように、あっさり間違えてしまう可能性もある。

二階堂「はい、じゃあフリップあげて〜」

正答

53枚

解説

トランプ数字はA Kの13種類。これが4セットあるので52枚。これにJOKERを1枚加えると、53枚になります。

ジャイアンの答え

11枚

藤田の答え

54枚

良平の答え

52枚

その他の回答者の答え

53枚

二階堂「剛田君、藤田君、笹川君不正解！あとのみんなは正解！」

良平「なんだと！」

藤田「え……」

ジャイアン「俺トランプやったことねえよ……」

まさかの、3人脱落だ……

剛田武、藤田剣人、笹川良平失格 残り27人

一ノ瀬「あら、復活候補筆頭様はどうしたの？」

藤田「家には、54枚のトランプしかないから間違えた……」

この問題のジャンルは、ほぼオールジャンル。たとえどんなに頭が良くても、全問正解は困難だ……

果たして、残り9問を正解し、本戦に復活するのは誰なのか!?

空の旅3 敗退者続出!

敗者復活戦が始まった。内容はクイズ。

12問連続正解すれば、本戦に復帰できるが…

すでに簡単な問題で4人が不正解。本戦復活者は現れるのか…?

……

二階堂「そろそろ難易度が上がってくるからね。あ、それと僕はこの問題で消えるんで、そこんところよろしく」

全員「はあ…」

全員、やる気のない返事をした。

二階堂「じゃあ、問題!」

問題4 10 J Q K J O K E R この5枚が集まると、ポーカーではなんとという役になる?

ツナ「ええっ!?!」

石田「ポーカー…やったことはあるな」

三条「これは答えなくては…!」

先ほどまでは常識問題だったが、4問目から一気に難しくなった。だが、ポーカーを1度でもやったことがある人ならわかるだろう。

二階堂「しゅくりょう。フリップあげて！」

正答

ストレート（マウンテンでも可）

解説

マークの違う連番でストレートという役になります。もし、JOK ERをエースと見立てるならば、マウンテンという役になります。ただし、マウンテンはローカル役のため、公式の大会では使えません。

ツナの答え

順子

源静香の答え

マークがいっぱい

インデックスの答え

連番

その他の回答者の答え

ストレート

二階堂「えっと…沢田君、源さん、インデックスさん不正解！なんか書こうって思って書いた感はあるんだけどね〜残念！他のみんなは正解！」

沢田綱吉、源静香、インデックス失格 残り24人

ツナ「俺…トランプはババ抜きしかやったことないんだけど…」

静香「私も、トランプよくやるけど、ポーカーはあんまり…」

インデックス「私なんて、トランプという存在しか知らないよ！」

またもや3人脱落…このペースだと、最悪、復活者0になってしま
う…」

二階堂「僕の出番はここまで！残ったのは24人で、脱落者が7人
か…まあ、残った人は頭いいだろうし、頑張つてね！」

ワタル「いや…頭いいとか以前に、問題が異常だし…」

頭の良さは、たいして関係ないかもしれない…

二階堂「じゃあね…」

二階堂は、相変わらずのテンションで教室を出て行った。それと同
時に、教室に1人の人が入ってきた。

??「やあみんな。俺が5〜8問目の問題を担当する教師だよ」

ワタル「か…薫先生!？」

薫京ノ介。白皇学院の教師だが、あまり登場はしていない。

薫「なんで俺が呼ばれたのかって声が聞こえてきそうだから言っ
ておきな。どうやら作者が俺のことを好きらしい。…もちろん純粋な
意味でな。作者しか得しないけど、そこらへんは分かってくれ…」

三條「始めないのですか？」

薫「おっと、ごめんごめん。それじゃあ、5問目だ！」

問題5 徳川3代目将軍は？

空海「やっとまともな問題が出てくれたか」

小五郎「まだまだ余裕だな」

これは、小6か中1あたりの問題。その頃にしっかりと勉強をしていれば、解けない問題ではない。しかし…

三條「俺は5年生ですが…」

歩美「私なんて1年生よ！ここまで来れたのが不思議なくらい…」

まだ6年生にもなっていない者にとっては、厳しいようだ…

薫「終わりだな。フリップあげろ」

正答

徳川家光

解説

歴史問題に解説はできませんね。まあ、家光くらいなら解説いらないでしょう…

吉田歩美の答え

とくがわいえやす

日奈森あむの答え

徳川秀忠

沼川康太の答え

徳川綱吉

他の回答者の答え

徳川家光

薫「吉田、日奈森、沼川が間違いだな。他は正解だ。しかし沼川、お前は高校生だろ。なんで綱吉と間違えたうえに綱が綱になってるんだ？」

とんでもない間違いだ…

沼川「しまった！うっかりしてたぜ！」

あむ「高校生でそれはどうなんですか…あたしや歩美ちゃんはいいいとして…」

薫「いや、日奈森よ。お前も十分すごい間違いしてるから…」

あむは、徳川家光の代わりに、2代目將軍の徳川秀忠を書いた。どう考えても家光のほうが有名だが…なぜ間違えたし。

あむ「と、とにかく、あたしたちはこれで…」

日奈森あむ、沼川康太、吉田歩美失格 残り21人。

薫「いよいよ6問目、折り返し地点だ。気合入れるよ。それじゃあ問題！」

問題6 彼はペンを持っている 英訳せよ

スネ夫「英語問題！オープニングゲームのようにはいかないよ！」

オープニングゲームで、英語問題を間違えたスネ夫。かなり、気合が入っているようだ…

しかし、そんな奴に限って…

スネ夫の答え

He have a pen

間違える…

薫「はい、終了。フリップあげる」

正答

He has a pen もしくは He has pens
もギリギリOK

解説

この問題のポイントは、3単元のsです。1人称が彼なので、動詞にsがつきます。また、名詞をそのままpenと書いてしまっても不正解となります。penの前にaか、penを複数形にするかしてください。

相馬空海&毛利小五郎の答え

H e h a s p e n

真城りまの答え

H e h a v e p e n

他の回答者の答え

H e h a s a p e n

薫「骨川、相馬、真城、毛利小五郎の4人が不正解だな。みんな凡ミスか、中学生の問題だと思ってなめてるところなるぞ」

小五郎「しくった…探偵でありながら…」

蘭「お父さんは賞金とつてもどうせ全部お酒とパチンコに消えちゃうでしょ！」

りま「小学生には…難しいわね」

スネ夫「また…！また間違えた…！」

いくら問題がオールジャンルとはいえ、基本的な学力もない者は落ちる。それがこの敗者復活戦の、鉄則だ。

骨川スネ夫、毛利小五郎、真城りま、相馬空海失格 残り17人。

6問目が終了。ようやく前半が終わったといったところだ。すでに31人から17人まで減らされているこの敗者復活戦。果たして、何人が復活するのか!?

空の旅3 敗退者続出！（後書き）

おそらく読者の皆さんにはどの問題も簡単でしょう。実際間違え方も少しおかしいですし…

徳川綱吉を徳川綱吉と書いてしまった人は実際にいました（笑）「その間違い使っていないか？」なんて許可は取ってないけど、いいよね…

空の旅4 麻雀で落ちる

敗者復活戦、前半が終了した。

残っているのは17人。

生き返るのは、誰だ…

……

薫「よし、それじゃあ7問目いくぞ」

問題7 日本は東経何度に位置している？

美琴「大丈夫ね、これはこないだよったわ！」

この問題は、中学校の地理問題。普通に勉強している中学生なら、答えられるだろう。しかし…

石田「そんな前のこと忘れたよ…たしか120…いや、130？違
うな…」

中学をとっくに卒業してしまった者は、忘れてしまっている…！

薫「みんな苦戦してるみたいだが、そこまでだ。覚悟してフリップ
あげろ」

正答

135度

解説

地理問題なので、解説しようがありません。まあ、中学校の地理問題なら解説不要でしょう。もし、答えが分からない方は、地図を見れば1発でわかるので、それを参照にしてください。

全員の答え

135度

薫「おお！全員正解か！」

石田「よかった、正解だったよ…」

安岡「なんとか、正解したな。俺が刑事でなかったら、間違えてたかもしれん…」

ホツと胸をなでおろす、数少ない大人たち…

一方、小学生の唯世と三条も危なげなく正解していた。さすがは私立だ。

.....

次に、問題8。「あるものを机の上に置いた。この時重力とつりあっている力は何？」という中学校レベルの問題も、全員正解。やはり、優秀な人間は、学力では落とせない…

薫「俺はここまでだ。お前ら、最後の4問頑張れよ。せつかく17人も残ってるんだからな」

そう、7問目と8問目が全員正解だった為、17人も残ってしまっただのだ。最初ハイペースで落ちて行った者と、そうでない者との差

が、激しすぎたのだ。

主催者「まあいいか。残り4問、覚悟しろよ…」

主催者は、不気味な笑みを見せ、次の教師を教室の中に入れた…

.....

唯世「三条君もここまで残ったんだね」

三条「バカにしないでくださいよ、キング。戦闘の時いつも戦略を立ててたのは、俺じゃないですか」

唯世「は、はあ（それって関係あるのかな…）」

小学生組で、ただ2人の生き残り。2人ともリーダー格の人間のため、プレッシャーがかかる。

三条「あ、どうやら最後の教師が来たみたいですね」

教室の扉を勢いよく開けて入ってきたのは…

??「俺だ!」

シーーーーーン

美琴「ねえ、なによあのちっちゃいの…」

黒子「私に聞かれても困りますわ…」

なのは「本当に先生なの？」

フェイト「でも、今こうして入ってきたわけだし…」

??「俺はな、今回の教師を担当する、リボ山だ！以後よろしく」

この人物は、家庭教師ヒットマンリボンの67話で出てきた先生だ。リボンが変身した姿なのだが、今この場にリボンのキャラクターはいない。つまり、この先生がリボンだと証明する人物はいない。

まあ、そんなわけで、赤ん坊教師と敗者復活戦が続行されることになった。

注 ここから先のリボ山の台詞をリボンの声に脳内変換して読むと、一層面白くなると思います。(リボン知らない方はごめんなさい…)

リボ山「じゃあ、問題だ」

問題9 麻雀問題。親の70符1翻、さて何点？

佐天「げっ…」

ワタル「おいおい、いきなりそんな難しい問題が…」

実はこれ、たいして難しくはない。が、それはあくまで、麻雀の得点計算ができる人がチャレンジしたときのみ。ゆえに、厳しい問題

…！

リボ山「終了だ」

正答

3400点(ツモ和了の3600点も可)

解説

子の70符1翻は2300点です。親なのでこれを1.5倍して、10の位を切り捨てると、3400点になります。

佐天涙子の答え

1000点

白井黒子の答え

5200点

高町なのはの答え

4500点

ユーノ・スクライアの答え

34000点

その他の回答者の答え

3400点

リボ山「佐天涙子、白井黒子、高町なのは、ユーノ・スクライア不正解。残念だが、ここで脱落だな」

黒子「分かるわけありませんの…」

佐天「白井さんもなんですか」

麻雀を理解していなかったために落ちた、学園都市から来た女2人
それに加えて…

なのは「麻雀は、難しいもんね…」

ユーノ「しまった！ゼロ1個多くつけちゃった！」

無印時代のコンビ。この4人が脱落となった。

白井黒子、佐天涙子、高町なのは、ユーノ・スクライア失格 残り
13人。

唯世「三条君、よくできたね」

三条「キングこそ。僕は麻雀知ってましたが、ふつうこの年で麻雀
は知りませんよ…」

唯世「前に、勉強したことがあるんだよ」

小学生が麻雀を勉強？と、三条は思ったが、口に出すのはやめてお
いた。

.....

リボ山「なんか人数が減ったが、気にせずいくぞ」

問題10 麻雀問題。東1局 1本場 東家という状況。ここで、
立直、一発、ツモ、ピンフをあがった。さて、何点？

ワタル「げっ…またかよ」

ゆみ「麻雀部の私には、ありがたいことだが…」

一ノ瀬「2問連続は…間違えるかもね」

麻雀問題の連打。だが、先ほどの問題を解いた人間は麻雀を知っている。不正解者が出ないと思われたが…

リボ山「じゃ、回答オープンだ」

正答 8100点(2700オールでも可)

解説

親は平和をツモ和了しているので、まず20符は確定です。翻数は4なので、20符4翻となり、通常なら2600点オールで7800点なのですが、1本場で300点加わり、8100点となります。

池田華奈の答え

11900点

毛利蘭の答え

7800点

その他の回答者の答え

8100点

リボ山「池田華奈、毛利蘭、脱落だ」

池田「ニヤアア！30符と勘違いしたし！」

蘭「あれ？……あ、1本場を加えてなかったんだ……残念」

池田華奈、毛利蘭失格 残り11人

ゆみ「麻雀部員として、それはどうなのだ……？」

池田「平和って書かれたら30符だと思っし！」

どうやら、ツモという言葉を見ていなかったらしい……

リボ山「とりあえず、あと2問だ。言つとくが、かなり難しいから覚悟しろよ」

現在残っているのは、辺理唯世、三条海里、フェイト・テストロツサ・H、クロノ・ハラオウン、ドラえもん、御坂美琴、橘ワタル、加治木ゆみ、安岡さん、石田さん、一ノ瀬玲奈の11人となっている。残り2問を正解し、本戦復帰を果たすのは、誰だ！

空の旅4 麻雀で落ちる（後書き）

少し更新が遅れたのは、問題と脱落者を考えていたからです。本当に大変だった…

書いてるときとか、問題と脱落者をまとめた紙をバツサバツサやりながら書いてるんですよ。…え？パソコンにデータを入れたらどうかって？

えーとですね、メモ帳に書こうとしたんですが、書いたら書いたでPC立ち上げないと見れないじゃないですか。だから、思いついたらすぐ書ける紙にしたわけです。

竜崎「携帯にデータを入れるってのはどうだ？いつでも見れるぞ」

作者「携帯…持ってない…」

竜崎「今時珍しいな…」

作者「ほんと携帯ほしいなあ…無条件で新品の携帯俺に渡す人とか現れないかなあ…」

竜崎「直接的な願望すぎるだろ…」

空の旅5 復活者は誰だ？

敗者復活戦もいよいよ終盤。

残り2問を正解し、本戦復帰を果たすのは誰なのか！

.....

美琴「ここまで来たら復活するわよ！」

ドラえもん「あと2問…あと2問…」

ゆみ「私が答えられるかどうかは、運次第だな…」

回答者たちは、復活の想いを強く持っている。だが、ここからの問題はかなりの難問。気を緩めれば、確実に落ちる。

リボ山「んじゃ、問題だ」

問題11 料理のさしすせそ。この中の、「そ」は何を意味している？

ゆみ「なんだと！」

三条「なんでしたっけ、これ…」

唯世「聞いたことはあるけど…あってるかな？」

おそらく、誰もが1度は聞いたことがあるだろう。だが、いきなり聞かれると、途端に頭に出てこなくなる。これが、11問目の難易

度だ…

リボ山「あと10秒だ」

クロノ「たぶん…これだな」

ワタル「しょうがねえ！なんか調味料書いちまえ！」

石田「あつてるかな…」

ほとんどの者が、自信がないようだ。そんな中、非情にも時間は過ぎて行った。

リボ山「終了だ。フリップをあげてくれ」

正答

みそ

解説

解説…といわれても、みそなんですから解説しようがありません。暗記問題は解説きついですね…でも、どうしてみそなんでしょうね。調味料でいいならソースでええやん…料理のさしすそが出来た時代にソースがなかったかららしいですけど、今作ったら絶対「そ」にはソースが入ると思います。

石田さんの答え

ソース

加治木ゆみの答え

しそ

橘ワタルの答え

そばかす

その他の回答者の答え
みそ

リボ山「石田、加治木、ワタル、残念ながら脱落だ。」

加治木ゆみ、橘ワタル、石田さん脱落 残り8人

ゆみ「……くっ！」

石田「ああ、やっぱり違ったか……」

ワタル「そで始まるもの適当に書いたら……こうなった」

安岡「そばかすは、もはや調味料ですらないが……」

ワタル「そんなん分かってるわ！でもよ、白紙よりましだろ！」

一ノ瀬「間違ってたら意味がないわよ」

ちなみに、今までの不正解者の中に、白紙はいない。それほど、復活したいという想いが強いのだろう。

.....

最初31人いた回答者も、気が付けば8人。現在残っているのは、三条海里、辺理唯世、フェイト・テストロツサ・H、クロノ・ハラ

オウン、御坂美琴、ドラえもん、安岡さん、一ノ瀬玲奈となっている。頭のいいメンツが残ったが、果たして、最終問題は答えられるのか！

リボ山「これに答えられた奴が、本戦に復帰できるからな」

リボ山の言葉で、教室内の緊張感が、一層高まった。

リボ山「それじゃあ、問題だ」

問題12 Please give the evaluation point to this novel. を和訳せよ

三条「くっ…！さすがにこれは…」

唯世「きつい…かもね」

一ノ瀬「evaluationって、たしか…」

使われているのは、giveなど、簡単な英語が多い。ただし、evaluationの意味を知っている人は少ないだろう。

フェイト「っていうかこれ、中学生レベルじゃないわよ！」

リボ山「文法は中学生レベルだぞ。単語も、中学生で知っている人もいるという話だ」

美琴「それって、ただ知ってるだけじゃない！」

リボ山「ウダウダ言わずにさっさとやりやがれ！」

強引に、押し切られた…

.....

リボ山「よし、終了だ。フリップをあげる。これが正解だったら、復活だからな」

クロノ「初めに…正答を教えてくださいませんか」

リボ山「それは後だ。最終問題のドキドキ感がなくなるからな」

8人「えー！ー！」

リボ山「いいから、さっさとあげやがれ！」

全員のフリップが、一斉にあげられた…

辺理唯世の答え

この小説に評価点をください。

三条海里の答え

この小説に革命の力をください。

フェイト・テストロッサ・Hの答え

この小説に得点をください。

クロノ・ハラオウンの答え

この小説に評価ポイントをください。

ドラえもんの答え

この小説に評価ポイントをください。

御坂美琴の答え

この小説にエヴァポイントをください。

安岡の答え

この小説に評価点をください。

一ノ瀬玲奈の答え

この小説に評価点をください。

リボ山「さて、正答を発表するぞ」

正答

この小説に評価点をください。（評価点が評価ポイントになっていても可）

解説

evaluationが難しいだけで、後は本当に簡単です。普通
に後ろから読んでいけば答えにたどり着きます。注意点としては、
「ください」を「くれ」などの命令文にしないことくらいですかね。

リボ山「ということ、本戦復活者を発表するぞ。本戦復活者は…」

リボ山「辺理唯世、クロノ・ハラウン、ドラえもん、安岡、一ノ
瀬玲奈の5人だ！」

唯世「やった、復活した…！」

クロノ「いろんな問題があったけど…うまく答えられたようだね」

ドラえもん「やったー！ー！ー！」

安岡「刑事の俺に答えられる問題だったのが幸いしたな…せっかく復活したんだ、108万獲って帰る…！」

一ノ瀬「前半戦では捕まったけど、これでまた楽しめそうね」

本戦復活を心から喜ぶ5人。そして…

三条「最後の問題…難しかったですね。キングは良く解いた…」

フェイト「学校にあまり行ってないからかな。勉強もしっかりやらないと…」

美琴「ああもう！むかつくわ！せっかく最後まで残ったのに！」

最後の問題を解けなかった3人。頭はそれなりにいいのだが、もう少しというところで落ちてしまった。それに対して、悔しさを隠せないでいる。

リボ山「敗者復活戦は終了だ。復活した奴は牢屋から出て残り2時間のフライトを楽しめ」

敗者復活戦には、1時間を費やしていた。

フェイト「そういえば、牢屋に逆戻りなんだっけ。悔しいなあ…」

問題を間違えた者は、残り2時間を、牢屋の中で過ごさなければな

らない。酷な話だ…

.....

各自、それぞれの想いをもち、敗者復活戦は終了した。その様子を眺めていた主催者は…

主催者「復活したのは5人か。まあ、大体こんなもんだろう」

エリー「しかし、なぜクイズなんかに？」

主催者「後半戦は、頭がよくなければダメだ。だからこそあの予選、あの敗者復活戦をやったのだ」

エリー「あなたは…何をするつもりなのですか…？」

主催者「フッフ…後半戦をよく見ておけ。後半戦で、逃走者たちの心を壊す」

主催者は、気味の悪い笑い方をした。ちょうどそのころ…

竜崎「……！？」

八神「どうしたんや、竜崎君？」

竜崎「いや、今何か嫌な予感がした」

八神「嫌な予感？」

竜崎「ああそうだ。八神、気をつける。この後の後半戦、何か起き

「くるぞ…！」

竜崎が感じた予感。それは、いったいどんなものなのか。

ジェット機でのフライトはまだ続く。少なくとも、残り2時間は、逃走者にとって安楽の時間となる。後半戦に備え、睡眠をとる者。リラックス目的で、ゲームをする者。たわいのない話で盛り上がる者。さまざまな人たちがいる。その様子を、少し覗いてみよう。

作者「勝った…！」

空の旅6 それぞれの想い(前書き)

おそらく今までの中で一番グダッてると思います。

それと、麻雀が出てきますが、ルールを知らなくても(r y

空の旅6 それぞれの想い

後半戦が開始されるまで残り2時間。

ジェット機の中にいる逃走者たちは、各自自由な行動をしていた。

.....

上条「おつ、ここが温泉か！」

ジェット機の内装を見て、温泉にあることに気付いた上条当麻。リラックスのために、早速温泉にやってきた。

カイジ「…ん？あいつは…上条か」

その時偶然にもカイジがいた。上条同様、温泉にやってきたのだ。

上条「おう！カイジじゃねえか！一緒に入ろうぜ！」

カイジ「ああ…！」

そして2人は、着替えを済ませ、温泉の中に入っていた。するとカイジが、何かに気付いた。

カイジ「先客がいる。だれだ…？」

温泉には、2人以外にも、3人の人間が入ってるように見えた。それは…

平和「いや〜しかし温泉はいいものですね〜」

三色「そうだな。疲れが取れる」

立直「お前ら、俺たちは奴を追っているってことを忘れるなよ。とはいえ、やはり温泉はいいものだな。断ヤオの奴はこれに入らないで何やってるんだ？」

平和「ああ、あいつなら、ジェット機の中にパソコンを見つけたって言うて、ネット麻雀打ちに行きましたよ」

三色「こんな時まで麻雀か…少しは気を抜けばいいのに」

麻雀の精霊の3人だった。自分たちを斬った相手を探すために、逃走者たちとともに後半戦会場へ向かっているのだ。

カイジ「お前らいったい、誰だ…？」

上条「あの…すみません。どちら様ですか？」

カイジ、上条の2人は彼らの存在を知らない。

立直「ああ、遊園地にいた奴らか。俺たちはな…」

その後、互いに自己紹介をし、現在何のためにこの飛行機に乗っているのかも話した。

上条「へー。それじゃあ、その正体不明の奴を追ってるんだ。その…断ヤオって人と4人で」

立直「いや、一盃口という人も入れて5人だ。一盃口は女だからな、

今頃女湯のほうにいるだろうよ」

カイジ「それにしてもよ…犯人の見当とか、ついてんのか？」

立直「それが…まだついていない。顔は隠れていたし、声も…聞いたことない声だった。お前たち、麻雀の役の中で、そういうことをしそうな役は知らないか？」

上条「いや、俺たち麻雀の精霊なんて知らんし…ただ、そういうことをしそうだっていうんなら、国土無双じゃないか？なんか攻撃的だし」

すると立直が、壁を思い切り叩いた。

立直「国土無双様がそんなことをするわけがない！いいか、役満といわれる精霊たちは、精霊の最高ランクに位置しておられる。俺たちなんか、1度も麻雀で勝ったことがない」

役満とは、麻雀の役の中でもめつたに出ない、レアな役のことである。ポーカーでたとえるなら、ロイヤルストレートフラッシュや5カードといったところだろうか。

上条「あ、ああ。すまなかった」

立直「こちらこそ、取り乱してしまってすまなかったな。だが、そうするといつたい誰が…」

討論は、もうしばらく続いたが、結局明確な答えは出せず、5人ともぼせてしまった。

「盃口」みなさん、長風田しすぎですよ…」

.....

断ヤオ「うらうら！この？を切つて立直だあああ！！」

ネット麻雀を楽しんでいる断ヤオ。そこに、1人の雀士が現れた。

アカギ「ククク…その？対面のロン牌だぜ」

闇に舞い降りた天才、赤木しげるであった。

断ヤオ「はあ！？何言つてんだお前。こっちは上がればトップだ、立直行くぜ！」

ロン！

断ヤオ「ガーーーーーン」

アカギ「…な？だから言つただろ」

断ヤオ（この男…俺達1翻役の精霊より、実力は上か…！？）

麻雀の精霊として、複雑な思いを持つ断ヤオであった。

.....

ここは、ジェット機内に設置されたカフェ。数人が集まっており、お茶を飲んだりして落ち着いた時間を過ごしている。

竜崎「結城、さつきからやけにおとなしいけど、どうしたんだ？」

結城「え…！？いや、なんでもないよ…」

八神「パニックになって日本語の意味少しずれてるやん」

結城「いや…別にパニックになってるわけじゃ…」

竜崎「いや、お前明らかにおかしいぞ。どうしたんだ、本当に？」

八神（はあ…なんで竜崎君は気づかないんやろうか…）

和やかに見えて、どこか空気がおかしいテーブルであった。そして、もう1つのテーブルには…

山本「おっ！なんかかわいいのがいるぜ！」

綾崎「わく本当ですね」ナデナデ

ドラえもん「ちょっと！機械の体なんて撫でないでよ！」

青そつな男3人がいた。

ちなみに、山本は戦闘に使う炎の色が青。綾崎は髪の色が青。ドラえもんは全体的に青である。

八神「おっい。その3人。こっちに混ざらへんか？」

山本「おっ、いいぜ！」

綾崎「僕でよければ…」

ドラえもん「どうせ暇だしね」

6人になり、さらに場が盛り上がった。

八神「それでな、こないだ戦闘機のボタン押し間違えてもつてくそのあとフェイトちゃんにめっちゃ怒られたわ」

山本「あははははは！それはうっかりだな！」

結城「フッフ、面白い話ですね」

竜崎「いや…それはまずいだろ。よく怒られるくらいで済んだな」

八神「フェイトちゃんは心が広いから許してくれたわ」

会話の内容が少しおかしいような気もするが、それでも6人は、逃走中からのひと時の解放を楽しみ、和やかな時間を過ごしていた。

そして最後に、クロノと安岡。

クロノ「これが、このジェット機で最高級とされている料理だ」

安岡「ああ、分かった。だがクロノ、お前が全額負担しなくてもいいんだぜ？」

賭けに勝った安岡が、高級料理を堪能していた。

クロノ「いや、皆があまり金を持ってないようだし、ここは僕が負

担する」

安岡「フツ…面白い奴だ。俺はお前を、少なからず応援するぞ」

クロノ「礼を言う」

クロノは安岡に1礼して、その場を去った。そして安岡…

安岡「あいつ…後半戦で落ちるな…」

クロノの性格を1瞬で熟知し、刑事の勘で今後の展開を予想していた。果たして、その考えは的中するのか…

…

ピンポンパンポン

機内に、アナウンスが流れた。

「えー当機は間もなく、後半戦会場へと着陸します。皆様、後半戦もがんばってください」

それだけいうと、アナウンスは切れてしまった。

竜崎「いよいよ…始まるのか」

ヒナギク「さすがに、緊張するわね…」

咲「ちゃんと逃げ切れるかなあ…」

さまざまな思いを抱く逃走者たち。だが、根っこの思いは皆一緒であつた。「絶対に逃げ切つてやる」大金をかけたゲームは、いよいよ後半戦へ突入する…！

空の旅6 それぞれの想い（後書き）

はい、ということ、長かった空の旅もようやく終了です。

逃走中大ファンの方、お待たせしました！後半戦がいよいよ次回から始まります！

オープニングゲーム1 心理戦

従業員「こちらが、後半戦会場になります」

逃走者たち「!?!」

ジェット機から降ろされた逃走者たち、彼らの目に映ったものは…

山本「こりゃ…やつべーな」

カイジ「ここは…!」

竜崎「カジノ街…だな」

あたりは、カジノやバーで埋め尽くされていた。通常のカジノはもちろん、パチンコ屋、ポーカー専門店、さらには雀荘まである。

咲夜「カジノってことは、アメリカのラスベガスなんかかいな！
?いやー、また来たかったんよ!」

どうやら、1度ラスベガスに来たことがあるようだ…しかし、浮かれている咲夜を竜崎が止めた。

竜崎「パスポートもないのにどうやって外国にこれんだよ。おそろくここは、日本。しかし、日本では賭け事は禁止されているから、ここは…裏カジノ!それも巨大な」

クロノ「ちよつと待て!それは違法じゃないか!今すぐこんなところつぶしてやる!」

従業員「ご安心ください、ゲームのためだけに特別に作られた場所です。ここは、沖縄県の町の1部です」

鷲巢「バカにしとるのか…！あのジェット機で東京から沖縄まで3時間もかかるわけがなかつう！」

竜崎「落ち着きなよ鷲頭さん。俺の思うに、あのジェット機はまっすぐ沖縄には向かわず、まずは北海道まで行った。それからまた沖縄に向かった。そういうことなら、時間の説明もつく。おそらく、主催者がくれた休憩時間だったんだらう」

カイジ「なるほど…それなら確かに…」

従業員「その通りでございます。では、私はこれで」

従業員は、逃走者たちに一礼してジェット機に戻った。

それと同時に、カジノに設置されたスピーカーから不気味な声が聞こえた。

「これより、逃走中後半戦を始める…！」

さすがに、逃走者たちもこの声にはなれないようだ。全員、微妙に体がすくんだ。

「君たちには、これよりオープニングゲームを行ってもらおう。その内容は、ギャンブルだ。君たちに今から50万円分のチップを渡す。他の逃走者とギャンブルで戦い、この50万円を80万円にした逃走者が逃走中に参加できる。尚、君たちが挑戦できるギャンブルは、

ポーカー、丁半博奕、麻雀、手本引きの4種類のみ、それも1種類しか挑戦できない。チップがいくら変動しようと、借金を抱えたりすることはないので安心したまえ」

今回のオープニングゲームは、人対人のギャンブルによるもの。

手持ちの50万円を80万まで増やせば逃走中に参加できる。

挑戦できるギャンブルは、ポーカー、丁半博奕、麻雀、手本引きの4種類のみ。

挑戦できるギャンブルは1種類。

ギャンブルで負けても、借金を抱えたりすることはない。

「では、各自度のギャンブルに挑戦するのかを決めてもらおう。5分間上げるので、その間に決め、近くの従業員に伝えること」

ヒナギク「え！？そんないきなり！」

マリア「うーん。やるとしたらこれですかね」

アカギ「まあ何でもいいんだが、ここはやっぱり……」

一ノ瀬「この中から選ぶなら、これしかないわね」

〈5分後〉

「決定した。これより、そのメンバーを発表する」

逃走者たちの名前が、モニターに映し出された。

ポーカー（6人）

丁半博奕（6人）

桂ヒナギク

辺理唯世

マリア

クロノ・ハラオウン

伊藤カイジ

ドラえもん

山本武

雲雀恭弥

上条当麻

一ノ瀬玲奈

八神はやて

江戸川コナン

麻雀（8人）

手本引き（4人）

竜崎悠太

結城秋子

赤木しげる

愛沢咲夜

鷲巢巖

クローム・ドクロ

綾崎ハヤテ

安岡さん

灰原哀

宮永咲

原村和

国広一

.....

竜崎「まあ、こんなところか」

上条「でもよ、このオープニングゲームって、予選みたいじゃないか？」

竜崎「後半戦から出てくる奴らに、あの程度の予選を突破したくらいで逃走中に参加できると思うなという、主催者からの意思表示だろっな」

上条「でもよ、俺たちは前半戦から参加してんだぞ？それなのに理不尽すぎやしないか？」

竜崎「確かに理不尽だが、ルールなんだから仕方ないだろう。とにかく、勝つしかない」

場にあるチップは50万×24人で1200万円。つまり、このオープンニングゲームをクリアできるのは、1200万円÷80で、15人。つまり、9人がここで消えてしまうのだ。

「勝負の場所を発表する。ポーカーの人はポーカー専門店。麻雀の人は雀荘。手本引きの人は、ここから50m北にある賭場。丁半博奕の人は、ここにテーブルを置いてギャンブルを行う。では、始め…！」

後半戦が始まると思い、ワクワクしていた逃走者を襲ったのは、まさかのオープンニングゲーム。その内容は、あまりに過酷なものだった。果たして、誰がクリアするのか…

今、心理戦の火ぶたが切って落とされた…！

オープニングゲーム1 心理戦（後書き）

後半戦が始まって、やっとこの小説らしくなってきましたね。

あ、もちろんこれが終わればハンター対逃走者の普通の逃走中に戻りますのでご安心を。もちろん心理戦はいれますが…

オープニングゲーム2 丁半博奕編

後半戦に参加する逃走者たちが行くギャンブル。
50万円を80万円にしなければ、後半戦にすら参加できない。
まずは、丁半博奕を試してみよう。

.....

ポーカー、麻雀、手本引きに参加する逃走者がいなくなり、残ったのは6人の逃走者と、1つのテーブルだけとなった。

唯世「それで...どうすればいいの?」

ドラえもん「さあ...」

人がいなくなり、困惑する逃走者たち。そんな彼らに、1人の従業員が近寄った。

従業員「皆様、ちゃんとしていますね。それでは、これより丁半博奕を開始します!皆様、テーブルの周りに置いてある椅子にお座りください!」

6人「.....」

一瞬の沈黙、突然のことに皆驚いているようだ。

雲雀「ねえ、何やってるの?」

従業員「こ、これは委員長!自分は、手伝いを頼まれただけでして

「！」

雲雀「ふうん…」

従業員は、雲雀の所属する風紀委員の副院長、草壁だった。

草壁「コホン…では改めまして、皆様、好きな席にお座りください」

逃走者たちは、戸惑いながらも椅子を1つ選び、座った。ちなみに、席順は下のようになっている。

唯世 クロノ

ドラえもん テーブル 一ノ瀬

雲雀 コナン

草壁「皆様、ご着席されたようですし、丁半博奕のルールを説明させていただきます！」

丁半博奕 ルール

今回は、非常にシンプルなルールを採用する。

まず、親と子を決める。6人がサイコロを2つ振り、最大の目が出た人が親。それ以外の人は子となる。

次に、親がサイコロを2つ振る。この時サイコロは、伏せたコップの中に入れ、他のプレイヤーに見せないようにする。

次に、子が丁（2つのサイコロの数の和が偶数）か半（2つのサイ

コロの数の和が奇数)にベットする。
ベットの上限は20万までとする。

最後に、親がコップを開け、全プレイヤーにサイコロの目を見せる。
丁半を当てたプレイヤーはかけ金が倍になり、外したプレイヤーは
かけ金を親に没収される。

これで1ゲーム終了。時計回りで親が移動する。

これを繰り返して、80万円に到達した人から抜けていく。0になっ
ても同様に抜ける。

.....

唯世「なんか…複雑なルールだね」

一ノ瀬「そうでもないわよ。ただ親が振って、子が丁半を当てるだ
け。それだけのゲームよ」

説明が長くなって難しそうに聞こえるが、結局はそれだけのゲーム
だ。

草壁「それでは、丁半博奕を開始します！」

.....

いよいよ、オープニングゲームの1つ、丁半博奕が開始された。最
初に親になったのは、11を出した名探偵、江戸川コナン…

コナン「うわ、最初に親かあ〜それじゃあ振るね、エイツ！」

コナンは意を決してサイコロを振った。

草壁「では次に、ベットをお願いします！」

1回目だからだろうか、皆ベットが少額だ。

コナン「それじゃあ開けるね〜」

ギャンブル独特の緊張感が場に流れた。そして目は…

サイコロ サイコロ 結果

2 5 半

クロノ「クツ…外したか！」

雲雀「獲ったよ」

唯世「これって、当たり？」

ドラえもん「あゝ残念」

一ノ瀬「当たったわね」

5人の子のうち、3人が的中させた。ベットは皆が2万だった為、当たった人は+2万。外した人は-2万。コナンは-2万となった。

こうして、丁半博奕が始まった…！

2回戦目…

サイコロ サイコロ 結果

2 5 半

ドラえもん「よしっ！」

3回戦目…

サイコロ サイコロ 結果

6 1 半

一ノ瀬「外れたわ…」

4回戦目…

サイコロ サイコロ 結果

2 3 半

コナン「当てた…」

コナンは、自分が当てたことにホッとしていたが、その裏で、何か違和感を感じていた。

コナン（なにかおかしいな。ここまで、サイコロは全部半の目を出している。4回連続で半になる確率は、 $\frac{1}{6}$ 分の1だ。偶然なのか？）

そして、5回戦。クロノの親。

コナン「ベット！半に10万円！」

クロノ「なにっ!?!？」

現在少し+になっているコナンは、大きな勝負に出た。そして：

サイコロ サイコロ 結果
3 4 半

クロノ「クツ…！やられた…」

雲雀「君、なかなかやるね」

一ノ瀬「……………」

ドラえもん「うわ〜すごい…」

コナン（やっぱりそうだ、まちがいねえ！このサイコロは、絶対半が出るようになってるんだ！）

6回戦、一ノ瀬の親。

コナン（よし、これで勝ちだ。俺の手持ちは67万。13万がけで一気に勝負を決めてやるぜ！）

草壁「では、ベットをお願いします！」

コナンを含めたこの5人が、チップを置いた。そのかけ金に、一ノ瀬は言葉を失った。

かけ金

コナン 13万円

ドラえもん 15万円

唯世 15万円

雲雀 15万円
クロノ 6万円

一ノ瀬「なにこれ…全員合わせると64万じゃない！それに、かけたのは雲雀以外全員半なんて…」

コナン（こいつら…さっきの俺の大量ベットで気付いたな。まあいいや、どーせここで勝てば俺は抜けられるし）

草壁「では、オープンです！」

一ノ瀬は、わずかに震えている。ここで半が出れば、一ノ瀬はこの1回戦だけで、-34万。絶望的な状況に立たされる。

バツ！

草壁の手で、コップが取り上げられた…！

サイコロ サイコロ 結果
2 2 丁

場に、沈黙が流れた。そして数秒後…

ドラえもん「…え？」

コナン「なんだよ…これ」

唯世「なんで…？半じゃないの！？」

クロノ「これは…」

今のゲームでチップ枚数を激しく落とした4人が、口々につぶやきだした。そして、その隣には、震えながら笑っている一ノ瀬の姿があった。

一ノ瀬「間抜けね、あなたたち」

クロノ「どういうことだ!？」

一ノ瀬「このサイコロが半が出るサイコロだってことくらい、私にだってわかってたわよ。おそらく、重りか何かがサイコロの中に入ってるんでしょうね。いわゆるグラサイ。でも、丁だって出せるのよ」

コナン「どうやって…丁を出した？」

一ノ瀬「簡単なこと。このサイコロを投げてコップをかぶせるときに、私が目を調整したのよ。貴方たちはコップの陰で気付かなかつたよっただけ」

クロノ「なにっ!?!?そんなのありなのか!」

草壁「ルール上は、問題ありません。今回のルールでは、コップをかぶせるとこまでがルールで、目を調整してはいけないなどというルールはありません」

一ノ瀬「そういうことよ。まあ、それでもたった1人だけ、気づいていたよっただけだね」

一ノ瀬が指差した先にいたのは、全プレイヤーの中で唯一丁にかけ

た雲雀だった。

雲雀「君のやりそうなことくらいわかるよ。それより、僕はこれでクリアだから、抜けさせてもらおうよ」

雲雀は、80万円分のチップを草壁に渡した。

一ノ瀬「私もクリアよ。でも、チップが4万円分余ってしまったわ。これはどうなるの?」

草壁「余ったチップは、他のプレイヤーに公平に分配されます!」

一ノ瀬「そう、ならどうぞ」

一ノ瀬は、残った4人に1万円ずつチップを手渡して、ゲームから抜けた。

一ノ瀬玲奈・雲雀恭弥 オープニングゲームクリア

.....

これで、残るは4人。場にあるチップは140万円。つまり、これだと1人だけしか勝ちあがれない。

草壁「補足説明させていただきます!今1人が勝ち上がると、60万のあまりが出ます。これは、敗者復活戦に廻させていただきます!」

ゲームはあっという間に決まるかと思えたが、サイコロの目を調整できる以上、半が出るという保証はない。ゲームは、予想以上に長

引いた。

そして、22回戦目…

サイコロ サイコロ 結果

4 3 半

コナン「よっしゃ！何とか勝ちあげたぜ！」

コナンが大勝負に勝ち、丁半博奕は終わった。

江戸川コナン オープニングゲームクリア

コナンの頭脳は、あくまでも推理。応用が利かないところが、コナンの弱点だ。後半戦では、その頭脳を活かせるのか…

草壁「それでは、これで丁半博奕を終了したいと思います！皆様、お疲れ様でした！」

オープニングゲーム2 丁半博奕編（後書き）

癖のあるサイコロってホントありますよね。

家のサイコロがへこんでるのを発見したときに今回のネタを思いつきました（笑）

オープニングゲーム3 手本引き編

さてお次は、手本引きを見てみよう。

.....

手本引きをする4人は、賭場にやってきた。賭場は小さな倉庫だったが、手本引きをやるテーブル以外は何も置いていなかったし、誰もいなかった。

安岡「ここが賭場か…この緊張感は、何とも言えねえぜ」

結城「でも、私たち以外にだれもいませんね…」

咲夜「本当に、ここであつてるんかいな？」

クローム「……………」

その時、倉庫の扉が開いた。

従業員「お待たせしました。では、これより手本引きを行いたいと思います」

低い声で言った従業員に、安岡が反応した。

安岡「お…仰木！お前、どうしてここに…？」

この人物は、仰木。以前、アカギと鷺巣が死闘を繰り広げた際に腕を賭けた人物。ヤクザの若頭でもあり、場を開くことには慣れてい

る。

仰木「賭場を開催するのもヤクザの仕事だ。それにしても、手本引きに参加するのが4人だけとはな…」

手本引きは、あまり有名なギャンブルではないので、人が集まりにくいのだ。4人集まっただけでもよしと思わなければいけない。

仰木「まあいいか。それでは、皆様好きな椅子に…」

丁半博奕同様、逃走者たちはテーブルを囲んでおいてある椅子に座った。席順は、下のようになっている。

クローム

咲夜

テーブル

安岡

結城

仰木「着席されたようですので、ルール説明をさせていただきます」

手本引き ルール

今回は、非情にシンプルなルールを採用する。

まず、クジで親を1人決める。

親が決まったら、親に1〜6と書かれたカードが6枚渡される。

親はそこから1枚のカードを選び、伏せて置く。

次に子がベットする。親の選んだ数字がなんなのかを予想するのがこの勝負の肝。

今回のルールでは、子は1点張り（1カ所にかけること）しかできない。

ベットの上限は10万円まで。

子が当てたら、かけたチップは6倍になって帰ってくる。外した場合は親が没収する。

これで1ゲーム終了。時計回りで親が交代する。

これを繰り返して、80万になった人から抜けていく。0になっても同様に抜ける。

.....

咲夜「ようは、親が出したカードの数字を当てればええんやな。それで当てれば6倍」と

安岡「このゲームは、運の要素がない。場数を踏んでいる俺には有利なゲームだな」

安岡よ、その発言は自分が賭博にかかわっていると云っているようなものだ...

そんなことを言っている間にも、仰木が親を決めるくじを引き終わった。

仰木「親が決定しました、親は...クロームさん」

クローム「はい...」

こうして、手本引きが開始された。

.....

クローム（このゲーム、普通に選んだら、あてられる可能性がある。でも、下手に迷彩を打つと逆に読まれて当てられてしまう…！ならいつそ適当に選んだ方がまし…）

幻覚を扱う霧の守護者といえど、ギャンブルで迷彩を作るのは、得意ではないようだ…

クロームは、1枚のカードをつまんで、テーブルの上に置いた。

仰木「では、ベットを…」

ベット額は皆一様に6万となった。これは当然の選択といえる。当れば6倍になって帰ってくるので+30万となる。1発でクリアできるからだ。

賭けた番号は、安岡が1、結城が4、咲夜が6となった。

仰木「ベットが終わりましたので、オープンさせていただきます」

仰木の手で、カードがひっくりかえされた。

出た番号は…2。

仰木「全員不正解のため、かけられたチップ18万はクローム様の元へ行きます」

安岡「さすがに、1回だけじゃよめねえよ」

結城「まあ、確率的にも当てるのは難しいですね…」

咲夜「それより、クロームさんが68万になってもうたわ。これはやばいで…」

〈2回戦〉

安岡「次は、俺の親だな」

クローム「あ…はい。どうぞ」

安岡が、クロームから6枚のカードを受け取った。

安岡「うーん…それじゃあ、これだな。4だ！」

3人「……………!?!」

何と安岡は、自分の選んだカードを言ってしまった。だが、これは…

安岡（嘘…なんだよな。まあ、あいつらもこれを信じるほど馬鹿じゃないだろう。だが、そこは人間の特性を使用させてもらったぜ）

安岡の作戦。それはもちろん4にかけさせることだ。だが、普通は嘘と気づくだろう。しかし…

結城（もしかしたら…本当に4なのかもしれない…）

咲夜（これは、どうすべきなんやろ…）

クローム（私たちの思考を4以外に向けさせて、実は4という作戦…?）

プレイヤーたちに、疑惑の種が生まれる。そしてそれはそのまま、行動に表れてしまう。

結城「4に…4万円です」

咲夜「4に、3万かけるわ」

なんと、どう考えても嘘だと思われる安岡の言葉に惑わされ、2人が4にかけてしまった。

安岡（決まったな…こんな奴ら相手ならちよろいもんだ）

そして、最後まで残ったクロームは…

クローム（もうこれは4にかけて…：…ちょっと待って、私、あの人の出したカードが何か、分かる気がする…！）

仰木「クロームさん、どうぞお早めをお願いします」

クローム「分かりました。私は…6に3枚！」

咲夜・結城「え!？」

安岡「なんだと…！」

プレイヤーたちの混乱が起こる中、仰木は冷静にゲームを進行した。

仰木「カードの数字は…6です。クロームさんのみの中しましたので、クロームさんのかけた3万円が18万円になります。これによ

り、クロームさんは83万円でオープニングゲームクリアとなりました。余剰分の3万円は、他のプレイヤーに分配されます」

クローム「…ホッ」

クローム・ドクロ オープニングゲームクリア

安岡「ちょっと待て！お前、どうやって…あっ！」

安岡は、クロームに向けて当てた理由を聞いたが、すぐに自分でも気づいたようだ。そして、他の2人も…

咲夜「なるほど、そういうことやったんやな…」

結城「やられた…」

クロームのとった作戦とは、実に単純なものだった。1回戦でクロームは親になった。その時、すべてのカードがどこにあるかを見ているのだ。そして、その後カードの動きを目で追っていけば、安岡の出したカードを当てることくらい、造作もないことだった。

安岡（心理戦に夢中になって、そんなことにも気づかないとは…！）

安岡、不覚を取った…

その後の3回戦は、結城の親だったが、安岡、咲夜ともにはずし、結城が9万円のチップを得た。その後、何事もなくゲームが進行していった。ことが起きたのは8回戦、安岡の親。

安岡（ここはしのがねえと、ほんとに終わりだ！）

この時点で、3人の所持金はこのようになっていた。

安岡	25万円
結城	57万円
咲夜	38万円

安岡は、あの2回戦で流れを失い、以後1回も当てられていなかった。

安岡「これでどうだ！5！」

安岡は、また自分の出したカードを言った。しかも、今度は出したカードも5だ。安岡の言葉は真実を言っていたのだ。これに対し、子の2人は、どうするのか…

咲夜「これは…4に7万や！」

結城「5に…5万で」

この瞬間、すべての決着がついた。

結城秋子 オープニングゲームクリア

.....

仰木「終了です。余りの40万は、敗者復活戦に廻させていただきます。では、失礼します」

仰木は、静かに倉庫から出て行った。

咲夜「あゝここで終わりか。でも、結城さん。あんたどうして5にかけたんや？」

結城「それは…前に竜崎君が言ってたんです。余裕がない人に勝つには、セオリー通りに戦うと…」

咲夜「あんた、いつもどんなゲームしとるんや…」

結城「ただのトランプゲームですよ」

咲夜「あの人なら、トランプゲームでもそうやって分析したりしそ
うやな。それじゃあ、後半戦がんばってな」

結城「はい！」

これで、手本引きは終了。残るゲームは2つとなった。果たして、
誰が後半戦参加の権利を得るのか…！

オープニングゲーム3 手本引き編（後書き）

やっぱり心理戦を書くときは、頭をフル回転させなければいけませんね…

オープンニングゲーム4 麻雀編（前書き）

さすがに今回はガチの対局なので、麻雀を知ってないとわからないと思います。

麻雀を知らない方は、スクロールバーを下げていただくと、勝ちあがった人の名前が出てるので、それだけご覧ください。

牌の表記の仕方をもう1度…

マンズ 一〜九

ソーズ ？〜？

ピンス 一〜九

字牌はそのままです。

オープニングゲーム4 麻雀編

従業員「麻雀部門…終了！」

オープニングゲームで選ぶことが出来るギャンブルの1つ、麻雀。その対局が、今終了した。買った者は喜び、負けた者は悔しんでいるが、スタッフの1人である俺こと七星洋介にとって、そんなことは問題ではなかった。

七星「なんだよ…この対局…」

七星は、プロ雀士だ。だが、プロの収入だけでは食っていけないため、時々アルバイトをして食いつなぐ必要があった。このスタッフも、アルバイトの1つだ。

そのアルバイトの途中に、とんでもない対局を見てしまったのだ。

七星「あの…今日の牌譜、全部もらえませんか！」

従業員「別にいいぞ、コピーして勝手に持ち帰ってくれ」

七星「ありがとうございます！」

七星は、すぐに牌譜をコピーした。そしてその場で、今日あった出来事を思い返していた。

.....

ギャンブルで、麻雀を選んだのは8人。麻雀部の咲、和、一、麻雀

打ちであるアカギ、鷲巢。そして、数字に最も強い男である竜崎に加えて、戦略家の灰原、執事のハヤテという面子になった。

従業員「えー皆様、お集まりいただき何よりです。それでは早速、今回のルールを説明させていただきます」

壇上に、1人の男が上った。

ハヤテ「あ…あなたは！変態…じゃなくて、虎鉄君！」

瀬川虎鉄。ハヤテと出会ってからというもの、ハヤテをずっとストーキングしている…いわば変態である。…これ以上のコメントは控えさせてもらおう。

虎鉄「おお、綾崎じゃないか！やはり私を追いかけて…？」

ハヤテ「そんなわけないじゃないですか。それより、早くルールの説明をお願いします」

虎鉄「ちえ…では、今回のルールを説明します。ここには8人の人がいますので、卓が2つ立ちます。A卓とB卓に分かれてもらい、半荘1回戦っていただきます。各卓の上位2名は下位2名から30万ずつもらってクリア。その後、負けた者同士で半荘を1回行い、トップの人のみクリアとなります」

竜崎「まあ…そうなるわな」

場にあるチップは全部で400万。5人が残れる計算となる。

咲「あの…細かいルールはどうするんですか？」

虎鉄「それに関しては、各プレイヤーにプリントを配るので、それを見てください。それでは、早速A卓とB卓のメンツを発表したいと思います。モニターにご注目ください」

A卓

B卓

東家 竜崎悠太

東家 宮永咲

南家 赤木しげる

南家 灰原哀

西家 原村和

西家 鷲巢巖

北家 国広一

北家 綾崎ハヤテ

麻雀 ルール

30000点持ちの原点返し。順位点なし。

赤なし、白ポツチなし。その他一切のローカル牌なし。

一発、裏ドラあり。

30符4翻は切り上げ満貫とする。

ドボンあり、西入なし。

ダブルロンあり。トリプルロンは流局。

大車輪なし。その他一切のローカル役満なし。

注 イカサマを使った者は即失格となる。

.....

虎鉄「それでは、さっそく1回戦を始めたいと思います。各卓、準備はよろしいですか？」

竜崎「A卓、問題ない」

綾崎「B卓、大丈夫です」

虎鉄「では…スタート！」

.....

（A卓）

七星は、スタッフとしての仕事もあったが、少し暇だったので、卓の観戦をしていた。

七星（とりあえず、タチ親の竜崎の配牌から…）

竜崎手牌

一三四?????34779發 ドラ發

七星（いい配牌だが、何を切る…？俺だったら一切りだが…）

竜崎は、何のためらいもなく發を捨てた。

七星（ほう…意外に攻撃的なタイプだな。数学の世界を麻雀に取り入れた…デジタル打ちといったところか）

そして…12順目。

竜崎「ツモ。断ヤオ、平和、三色、ツモ。4000オール」

七星（今の1局でわかった、こいつ、かなり強い打ち手だ。打牌にミスが1つもなかった。完璧に近いデジタル打ち…ダメにすることも、それを証明している）

竜崎は、よくネット麻雀を好んでやっている。数字に強い竜崎は、確率で麻雀を闘い。そして、勝ってきた。ネット麻雀での彼の平均順位は2、259。高校生にしてこの実力というのは、非常に将来有望だ。

だが、次局…

和「ツモ。立直、一発、ツモ、断ヤオ。2000・4000は、2100、4100です」

竜崎と同じくデジタル打ちで、ネット麻雀でも好成績を残している和が、竜崎の親を蹴った。

竜崎「なあ、もしかして…」

和「なんででしょう?」

竜崎「お前、のどっちじゃないか…? いや、違ってたら悪い。ただ、今のお前の切り方といい、立直をかけるタイミングといい、まさしくのどっちのものだった。名前も似てるし…」

和「…! よくわかりましたね…」

のどっちとは、原村和がネット麻雀をやるときに使っているキャラクターの名前である。素晴らしい成績をとっているため、竜崎も知っているのだ。

竜崎「実は、戦ったこともある。あの時は確か…お前が1位で俺が2位だったな。今回は、勝たせてもらっよ」

和「フフ…勝たせませんよ」

竜崎対和。A卓は、この2人の一騎打ちの予想を呈した。

そして、東場が終了した。

竜崎	37000点
アカギ	18900点
和	36200点
一	7900点

七星（すげえ…東場は2人の独壇場だ…！2人とも、打牌に無駄がない。これは、このままいつてしまってもな）

七星の想像通り、南1局も…

和「ロン。立直、断ヤオ。2600です」

一「はい…」

9順目で和があがり、暫定トップの座に就いた。

（南2局）

竜崎（2位でいい。この南2局は、現在3位のアカギの親。ここを流せば…勝てる！）

和（この局で、勝ちます…！）

この局が、事実上オースというても過言ではない。そんな局が始

まった。

竜崎配牌

二二二??? 134789南中 ドラ二

竜崎（これは…ついてるな。平和ドラ2でいい。9順目が10順目には張れるだろう…）

しかし…

アカギ「ポンッ！」

竜崎の切った南をアカギがポンした。

アカギ「ポンッ！」

続いて、中もポンした。

和（竜崎さんが2つ鳴かせた…でも、こっちは断ヤオ三色ドラ1のテンパイ。上がれば8000点だし、ここでアカギさんが張ってる可能性は50パーセント以下。ここは…行く！）

しかし、そんな和の思考をからめ取るように、アカギは打ち取る。

和の切った、1を…！

アカギ「ククク…ロン。南、中、發、混一色、全帯ヤオ。18000だ」

和「そんな…！」

期待値的には、親の2副露相手に、こっちが8000点を聴牌してたら、攻めることが正解なのだ。だが、時にはそれが裏目に出ることもある。デジタル的にはそれで説明がついてしまう。しかし…

竜崎（あぶなかった…！もし原村が1を打たなかったら、俺が打たされていた…！）

竜崎は、次にどんな牌が来ようと1を切ると決めていた。竜崎は、切り順に助けられたのだ。

七星（偶然といえば偶然。だが、トップ争いをしている2人が、両方1が余ってたなんてことがあるのか…？この卓…何かがおかしい…）

そして、1本場。

アカギ「ロン。一盃口、ドラ2。7700は、8000」

一「え…？つてことは、終わり？」

一が飛んでしまった。今回のルールでは、この時点で終了となる。つまり、オープニングゲームをクリアしたのは…

従業員「しゅ…終了です！竜崎選手、アカギ選手、オープニングゲームクリアです！」

アカギ「ククク…」

竜崎「なんか…勝った気がしないな…」

七星（すげえ…このアカギってやつ、親の2回で決めちまった！おそらくこれは、圧倒的強運と、雀力がもたらした結果…！世の中には、こんな化け物もいるのか…）

そしてその頃、B卓も終了していた。

綾崎「ロン。清一、一気通貫、16000。これで終わりですね」

鷺巣「ぐぬっ…！」

鷺巣麻雀ばかりやっていて、普通の麻雀の感覚を取り戻せなかった鷺巣が飛びで終了した。その結果、B卓を勝ち抜いたのは、綾崎八ヤテと宮永咲となった。

綾崎「しかしすごいですね、宮永さん。半荘1回で嶺上開花3回なんて…」

咲「ぐ、偶然です！」

本当は、偶然のような必然の事態が起こっているのだが、咲はあえて黙っていた。

その後、最後の1人を決める1卓では、原村和の勝利が予想されながらも、勝ったのは灰原哀という、意外な結果で麻雀部門は終了した。

虎鉄「麻雀部門…終了！」

結果、後半戦の切符を手に入れたのは、竜崎悠太、赤木しげる、綾崎八ヤテ、宮永咲、灰原哀という、少し意外な面子となった。

.....

七星「それにしても…本当にすごい対局を見てしまった。特に、咲の3連続嶺上開花。あれは人間業じゃない。少し自信、失くしたな…。…まあ、それでも俺はプロ雀士だ！今日見たことも勉強だと思っ
つて、明日からもがんばろう！」

まだまだ未来がある雀士たちは、現在のプロ雀士に、少しのやる気を与えたようだった…

オープニングゲーム4 麻雀編（後書き）

さて、後はポーカーだけとなりました。早く逃走中が見たいという方、本当に申し訳ありませんが、今しばらくお待ちください。m<)

竜崎「というかお前、逃走中全然書いてないな」

作者「いやいや、これは逃走中メインの小説ですよ？」

竜崎「だがこの小説、今10話連続逃走中と関係ないこと書いてるぞ？」

作者「おお！ついに10話か！イエーイ！」

竜崎「イエーイじゃないだろ……」

P・S アカギの親ツパネの和了役がどう見ても多牌でしたので、直しました。

誤 南、中、發、混一色、一氣通貫

正 南、中、發、混一色、全帯ヤオ

ご指摘してくださった方、本当にありがとうございました！

オープニングゲーム5 ポーカー編

長かったオープニングゲームも、ついに最後の種目。誰もが知ってるゲーム、ポーカー。ギャンブルの定番が故に、奥が深い。

極限の心理戦を制し、後半戦への駒を進めるのは誰だ…！

.....

ポーカー専門店にやってきた、ポーカーに参加する者たち。ポーカーに参加するのは、桂ヒナギク、マリア、伊藤カイジ、山本武、上条当麻、八神はやての6人。

従業員「みなさん、ようこそポーカー専門店へ！」

小柄な従業員が、6人を迎えた。

上条「あの…先生？」

上条が見た人物、それは、月詠小萌。上条の担任の先生である。

小萌「あれ、上条ちゃん？なんでここにいますか？」

上条「いや、俺は逃走中の途中…じゃなくて！先生こそどうしてここに…？」

小萌「なんか家にボランティア募集の広告が来てて、暇だったから来てみようかと思った次第です」

上条「バイト…してるわけじゃないんだな。よかった…」

ちなみに、今まで出てきた教師たちも、皆ボランティアであり、バイトではない。

小萌「とにかく、席に座ってください！ポーカーのルールを説明しますよ！」

6人が、テーブルを囲んで席に着いた。

ポーカー ルール

今回は、非常にシンプルなルールを採用する。

6人に5枚ずつカードが配られる。その後、カードを交換し、手札をオープンする。

1番強い役を作った人が勝利。勝った者は、無条件でクリアとなる。先着3名。

3回戦行い、残っていたものは脱落となる。

尚、今回のポーカーでは、降りはできない。

今回使用するトランプは、ジョーカー2枚を加えた54枚となっている。

.....

カイジ「な…なんだこのルール！」

ヒナギク「これじゃあ、ただの運勝負じゃない！」

小萌「そう言われても、主催者さんからこのルールでやれって言われたんですよ！？先生も抗議しましたけど、これで問題ないって言

われて…」

このゲーム、運の強いものが勝つ。この逃走中には、運も必要不可欠なのか…？そんな疑問が、逃走者たちの頭の中を支配していた。

小萌「あ、それと、皆さんにいい情報です。主催者さんが、さすがに3回は短すぎるということで、模擬ゲームを行う権利をもらえました。このゲームだけですよ！模擬ゲームは5回です」

山本「おいおい、本番より模擬ゲームのほうが長いじゃないか」

マリア「ゲームに慣れる…ということなんでしょうか？」

八神「どつちにしても、無駄な時間になりそうやな」

皆、主催者の意図が分からない。だが、ただ1人、カイジだけは、長年の博奕の経験から察する…！

カイジ（この模擬ゲーム、一見おかしなように見えるが、そうじゃねえ。ちゃんと狙いがある！それはおそらく、流れを見つけること。3戦で流れは見えない。だが、本番と合わせて8戦やれば…？きつと流れが見えるはずだ！そして、ついでる時を見て、大きい役を作るために動く！これが、この勝負に勝つコツなんだ！）

流れを見極めれば、大きな手が作れる。例えば、こんな手札をもらったとしよう。

??????
389JA

これはクズ手。だが、流れのいい時なら、スペードの3とハートの

Aを交換し、ダイヤ2枚を見事に引き込めるはず。これでフラッシュ。勝利はほぼ確実となる。

カイジ（やってやる…！俺以外は全員未成年のガキ！負けたら…俺の立場がない！）

そして、模擬ゲームが始まった。

……

小萌「ディーラーも先生がやるのです！それじゃあ、配りますよ〜」

小萌は、カイジの席から時計回りにカードを配った。

カイジの手札

??????

A 6 7 Q K

カイジ（チツ…ゴミ手か。普通のポーカーなら、5枚交換でもいいかもしれないが、6人の中で1番高い役を作るとなると…）

小萌「交換タイムです」

カイジ「2枚交換だ…！」

カイジは、ハートの2枚を交換した。もしもスペードが2枚来れば、フラッシュだからだ。

しかし、引いたのは2枚ともクローバー。（クラブともいう）

カイジ（スペードが1枚もこねえとは…流れがないな）

結局、このゲームを制したのは、ワンペアをそろえたヒナギクであった。

ヒナギク「でも、あんまりうれしくないわね…」

模擬ゲームに勝っても、クリアにはならない…！

……

模擬ゲームは続いた。流れを引き寄せたいカイジは、懸命に待った。自分の流れ、それが生まれる時を。だが…！

小萌「模擬ゲーム5回戦目は、ワンペアで上条ちゃん勝ちなので。それじゃあ、早速本番です！」

カイジ（だめだ…！こない！懸命に高い役を狙っても、こない！）

博奕打ちにとって、流れが来ないときは、勝負をしないほうがいい。だが、今のように勝負させられている状況では、勝負するしかない。つまりカイジ、この時点で敗色濃厚…！

だが、カイジはまだ気づいていなかった。このゲームの、本当の仕事掛け…

ヒナギク（さっきから、なんかおかしいわね…）

マリア（高い手が、出来ませんね…）

上条（クツ！イライラするぜ！）

そして、仕掛けに気付いていないのは、他のプレイヤーも同じだった。だが…！違和感があった、この場で、何かおかしいことが起こっているという違和感だけは。そして遂に、その違和感の正体に、ある者が気付く…！

ヒナギク（あ…！そうか、そういうことだったのね…！）

〈本番 1回戦〉

小萌は、新しいカードを取り出した。

小萌「カードを配ります。本番なので、気合入れてやってくださいよ！」

小萌の言葉で、プレイヤーの顔が引き締まった。気合を入れなおしたようだ。だが、それとは裏腹に…

カイジの手札

??????

A 6 7 Q K

ヒナギクの手札

??????

A 2 7 8 K

上条の手札

??????

A 2 3 8 9

マリアの手札

??????

2 3 4 9 1 0

山本の手札
??????
34510J

八神の手札
??????
456JQ

なんと、全員ノーペア…！だが、ストレートが見えないこともない者もいる。それにかけ、ほとんどの者が2枚チェンジを要請。

小萌「じゃあ次、ヒナギクちゃんはどうしますか？」

このゲームが始まる前に、何かに気付いたヒナギク。そんな彼女のとった行動は…

ヒナギク「5枚チェンジよ」

5人「…え!?!」

なんと、驚きの5枚チェンジを宣言。高い手を作るなら5枚チェンジは決してやってはいけないのだが…

カイジ（こいつ…何を考えている…）

そして、全員の交換が終了した。

小萌「オープンです！」

カイジ「ノーペアだ…」

マリア「あら、私もですわ」

小萌「では、交換タイムです」

今回、プレイヤーたちに配られたカードは、またしても全員ノーペ
ア…！これは、いったいどういうことなのか…

上条「2枚で」

山本「じゃあ…3枚で！」

カイジ「2枚だ」

八神「5枚や」

マリア「では、3枚で」

皆、思い思いの枚数を言う。ストレートや、フラッシュになる可能性にかけて。そして、勝ったのは…

小萌「オープンです」

八神「みんな、驚くで。ストレートフラッシュや！」

山本「なんだと！」

カイジ「2…2連続！そんなこと…あるのか!？」

八神はやて オープニングゲームクリア

クローバーの「」でのストレートフラッシュだった。そして、つ

いにカイジが、この現象に答えを出した！

カイジ（ああああああっ！そうか、そういうことか！なんで、今まで気づかなかったんだ俺は！あのストレートフラッシュ、出来たのは偶然ではなく、必然…！）

3回戦、カイジは5枚チェンジを要請。そして…

カイジ「ストレートフラッシュだ！」

揃える…必然のストレートフラッシュ…！

小萌「この勝負は、カイジちゃんの勝ちなのです！」

伊藤カイジ オープニングゲームクリア

上条「そ、そんなバカな！一体、どうやって…！」

カイジ「教えてやるよ。このゲームの、仕掛けをな…！」

ポーカーの戦いは終了し、これで、オープニングゲームのすべてが終了した。いよいよ、後半戦が始まる。ハンターから逃げきり、賞金を獲得するのは現れるのか！

オープニングゲーム5 ポーカー編（後書き）

上条「それで、あのストレートフラッシュはどうやって…?」

カイジ「簡単な話さ。あのトランプ、1ゲームごとに新しいのを使
つてたたる?つまり、マークと数字の並びが同じなのさ」

上条「あ…!」

カイジ「5枚交換をすれば、同じマークと連番が、ごっそり自分の
手に入ってくるって仕組みだ」

上条「チキショー!やられたぜ」

以上、ネタバラシでした。

敗者復活戦 運の力(前書き)

後半戦に参加するのは、敗者も含めて の25人です。

後半戦出場確定者

綾崎ハヤテ 桂ヒナギク 宮永咲 八神はやて 雲雀恭弥 クロ
ム・ドクロ

伊藤カイジ 赤木しげる 江戸川コナン 灰原哀 竜崎悠太 結城
秋子

一ノ瀬玲奈

敗者復活戦参加者

マリア 愛沢咲夜 辺理唯世 原村和 国広一 クロノ・ハラオウ
ン

上条当麻 ドラえもん 山本武 安岡さん 鷲巢巖

敗者復活戦 運の力

オープニングゲームが終了し、13人の逃走者が後半戦出場の権利を得た。

しかし、チップはまだ160万円残っている。

果たして、残されたチップは誰の手に…？

……

「これより、後半戦を始める…！」

竜崎「はじまるか…！」

カイジ「よし、やってやるぜ！」

アカギ「フフ…！」

オープニングゲームを戦った25人は、カジノ街の入り口に戻ってきていた。

「まずは、敗者復活戦を行う。オープニングゲームで負けた者にも、2枚だけ、後半戦出場のチャンスが与えられている。チップが160万円分余っているからだ」

上条「おおっ！」

山本「なんだ、まだチャンスはあるのか」

オープニングゲームで脱落した逃走者たちの目に、輝きが戻る。

「敗者復活戦は、純粋な運の勝負である、くじを行う。ただし、今回はくじの内容が少し特殊な為、これからモニターに表示されるルールをよく読むこと」

スピーカーからの声が途切れ、代わりにモニターにくじのルールが映った。

敗者復活戦 くじ ルール

オープニングゲームで脱落した11人は、これよりくじに挑戦してもらう。

くじである紙を引くことになり、引いた紙には文字が書いてある。

復活、ハズレ、ハンター放出の3種類だ。

復活は2枚、ハズレは8枚、ハンター放出が1枚で構成されている。復活を引けば、本戦に復活できるが、ハズレを引けばその時点で失格となる。

ハンター放出を引くと、ゲームがスタートする。たとえば、その時点で2人復活していなくても、ゲームがスタートしてしまう。くじを引く順番は、ランダムに決定される。

.....

ハヤテ「ということは、僕たちのように後半戦出場が決まっている人は、逃げる準備をすればいいわけですね」

ヒナギク「2人復活してほしいわね...仲間が増えるのは心強いし」

そして、4体のハンターボックスが、逃走者たちの前に運ばれてきた。

竜崎「…ん？4体のハンターボックス？たしか前半戦では、5体のハンターが残ってた気がするが…」

はやて「なのはちゃんが、アイテム使って1体消したんや」

竜崎「なるほどな…」

咲「それにしても、ハンターって怖いなあ…」

そして遂に、敗者復活戦が始まった。

…
…
…

1人目 辺理唯世

唯世「一番最初…緊張するね…」

山本「おーい！ハンター放出だけは絶対に引くなよー！」

ハンター放出が引かれれば、その時点で敗者復活戦は終わってしまう。

唯世「よし、じゃあこれで！」

ズボツ！

唯世は、箱の中から手を引き抜いた。紙に書かれていたのは…

ハズレ

唯世「あゝ残念」

確率的には、ここで引くのは難しい。

2人目 ドラえもん

ドラえもん「じゃあ…これで！」

カイジ「…え？おい、ちょっと待て！」

ズボツ！

ハズレ

ドラえもん「復活したかったなあ…」

コナン「いや、それよりも、引くときは一言いってから引いてよ！
逃げる準備してなかったよ！」

ドラえもん「い…いや、ごめん」

3人目 上条当麻

ヒナギク「みんな、逃げる準備しといたほうがいいわよ！」

灰原「ええ、ここで決まってしまうわね」

上条「おいおい、お前ら俺をどんだけ不幸な人間だと思ってんだよ
…ていうか、俺ここで復活しないとさっきの弁償代が…」

上条は、ジェット機を1部壊したせいで、20万円の借金を背負わ
された。

上条「それじゃあ行くぜ！おらっ！」

復活

上条「おっっっっっああああ…！…！どうだお前ら、俺はいつも
不幸だけど、追い詰められると結構やるんだよ！」

逆境無頼上条の誕生だ…

カイジ「……………」

上条当麻 後半戦出場

……………

続く敗者復活戦は、なかなか変化が起きなかった。

4人目に、安岡が引いてハズレ。

5人目に、原村和が引いてハズレ。

6人目に、クロノ・ハラオウンが引いてハズレ。

これにより、残るくじは5枚となった。

7人目 鷲巢巖

鷲巢「フン…！5分の1の確率だと？引けんはずがないわ！」

鷲巢の豪運は、天から授かったような物。現実では考えられないようなことも、起きてしまう。

アカギ「鷲巢、お前に復活のくじが引けるか？いや、引けない。例え4枚引いたって、引けない」

鷺巣「あゝ？バカにしおつて、引くに決まっておろう！」

ズボツ！

鷺巣「書いてあるのは、ハズ……」

ハズレ

鷺巣「な、なんじゃと!？」

この結果を受け、鷺巣を含む全員が、ハズレを予想したアカギに注目した。

アカギ「今日のお前には、ツキが全くなかった。まず、得意分野の麻雀で2度も負けたこと。これがお前の今日のツキ。得意分野で負けたってことは、今日のお前のツキは最悪。こんなところで、復活のくじなんて、引けるわけがない」

鷺巣「ぐぬう……!」

8人目 愛沢咲夜

咲夜「ということは、もう4分の1やな。ここで引いたるで」

生まれながらのお嬢様は、復活を引けるのか…！？

咲夜「せやっ！」

ズボッ！

復活

咲夜「おお、ほんまに引いたやん！」

愛沢咲夜 後半戦出場

ヒナギク「ってことは、これで2人復活ね！」

結城「よかった…仲間が増えて」

.....

9人目 マリア

マリア「まあどうせ、復活は残ってないんですものね。気楽に引き
ましよう」

ズボッ！

ハンター放出

マリア「あらやだ、引いてしまいましたわ。ではみなさん、がんばってください」

プシューーーーーー！

逃走者たち「逃げろー！」

4体のハンターが放出され、ゲームが開始された。他の誰よりも早く、ハンターのターゲットになったのは…

クローム「わ、私！？」

クロームは幻術使いのため、他の逃走者と比べて足が遅い。そんな彼女が、ハンターにかなうわけがない。

クローム「うっ…！」ポントッ！

クローム・ドクロ確保 残り14人

なすすべもなく、確保…

クローム「残念…」

.....

プルルルル…プルルルル…

カイジ「メール？」「カジノ街入り口付近にて、クローム・ドクロ確保。残り14人」まあ、これは仕方ない。運が悪かったな…」

エリアには、4体のハンター。

ハンターから逃げた時間に応じて、賞金を獲得できる。それが…

r u n f o r m o n e y

逃走中！

敗者復活戦 運の力（後書き）

次回は、逃走エリアの紹介とさせていただきます。

前半戦ではミッションの合間に書いたのですが、どうも読みづらかったので。

逃走エリア紹介

竜崎「とりあえず、このエリアのことを知らないとな」

開始早々、竜崎は地図を見た。

竜崎「なにになに…」

.....

今回の逃走エリアは、日本に設置されたカジノ街が舞台となる。

広さは東京ドーム6個分となっており、前半戦ほど広くはないが、逃げやすい。

エリアは、前半戦同様東西南北の4つに分かれている。

東には、カジノ街の入り口で、カジノへの勧誘なども盛んにおこなわれている「ドリームエントランスエリア」

南には、オープニングエリアの会場となったポーカー専門店、雀荘などが立ち並んでいる「ギャンブルエリア」

西には、ギャンブルに疲れた者が、憩いの場として利用するバーや、酒屋が立ち並んでいる「リラックスエリア」

北には、倉庫が立ち並んでいる「ブラックエリア」倉庫の中では、非合法的な取引も…？

そして、簡略図がこれだ。

ブラックエリア

リラックスエリア

ドリームエントランス

エリア

ギャンブルエリア

.....

竜崎「まあ、こんなところか。前半戦より狭い逃走エリアだが、そもそも前半戦が広すぎたんだ。これくらいが普通だろう」

そこへ現る、1人の人間。それは…

一ノ瀬「あら、竜崎じゃない」

クラスメイト、一ノ瀬玲奈だ…

竜崎「ああ、一ノ瀬か。驚いたよ。ていうかお前、黒い服着るなよな。ハンターと間違えるだろ」

一ノ瀬「今何時だと思ってるの？黒い服のほうが目立たなくて済むでしょう？」

現在の時刻は、p・M 7:30。黒い服を着ていた方が、見つかりにくい。

.....

一方その頃、暇を持て余している確保者たちの前に、カジノのディーラーと思われる人物が近づいていた。

スネ夫「え…何？」

ディーラー「4枚引いてください」

ディーラーはいきなり、スネ夫の前に14枚のカードを突き付けた。

スネ夫「え…？じゃあとりあえず、この4枚を…」

引かれた4枚のカードに書かれていたのは、逃走者の顔と名前だった。

なのは「ねえ、スネ夫君。誰の名前が書いてあったの？」

スネ夫「えつと確か…」

カードに書かれていた人は、竜崎悠太、宮永咲、伊藤カイジ、江戸川コナンの4人。果たして、何が起こるのか…！

…

プルルル…プルルル…

そして、逃走者たちに最初のミッションのメールが届く！

逃走エリア紹介（後書き）

中途半端なところで止めてしまってすみません。

ですが、これ以上かくとエリア紹介ではなくミッション5になってしまうので、ここで止めました。

次話は今日か明日にでもあげる予定ですので、しら承らくださいま

（ 〓 ） m ^

ミッション5 part1 偽物出現！

プルルルル…プルルルル…

上条「相変わらずうるさい、ハンターが来ちまうだろ！」

上条は、文句を言いつつメールを見た。

上条「なにになに…」ミッション5。現在エリアに、竜崎悠太、宮永咲、伊藤カイジ、江戸川コナンの偽物が放たれた』はあ？偽物？」

雲雀「『偽物は、本人のふりをして君たちに近づき、タッチする。タッチされると、その逃走者は確保扱いとなってしまう。ただし、偽物の走力は限りなく低い為、気を付けていれば確保されることはない』ふうん…」

ヒナギク「『偽物を消すためには、残り70分までに、ドリームエントランスエリアにおいて無料配布されている手錠をもらい、偽物にかけること。偽物は、手錠をかけられるときは素直な為、安心してたまえ。ただし、謝って本物に手錠をかけてしまうと、本物が強制失格となってしまう』よし…行きましよう！」

竜崎「『尚、残り70分になっても逮捕されなかった偽物の数だけハンターが放出される』ってことは、最大4体か…」

ミッション5 偽物を逮捕せよ！

このエリア全体に、竜崎、咲、カイジ、コナンの偽物が放たれた。偽物は、本人のふりをして逃走者に近づき、逃走者を確保する。

偽物を消すためには、残り70分までに手錠をもらい、それを偽物にかけなければならぬ。

ただし、誤って本物に手錠をかけてしまうと、本物が強制失格となってしまう。

偽物は、手錠をかけられるときは素直に従う。

残り70分になっても逮捕されなかった偽物の数だけ、ハンターが放出される。

.....

竜崎「まいったな…俺の偽物か」

咲「私と同じ人が、もう1人いるなんて…」

カイジ「絶対見つけてやる、偽物を…！」

コナン「さて、どうする？」

偽物がいるのは、この4人。この4人は、これからであった逃走者に、自分が本物だと信じてもらわなくてはならない。なんとも、きつしがらみを背負ってしまった…

.....

一緒に行動している、竜崎と一ノ瀬。だが、一ノ瀬の様子がおかしい。

竜崎「一ノ瀬…？何震えてるんだ？」

一ノ瀬「い…いや、なんでもないわよ。ただ、昔ちよつとね…」

一ノ瀬は、詐欺で一家をつぶされた経験がある。そのため、人を信じられない状況になるのが、怖いのだ。

竜崎「お前のこと、風のうわさで聞いたことはある。ただ、今そんな記憶を掘り返して、逃走中に支障がとるようなことがあってはまずい。とにかく、冷静にな」

一ノ瀬「分かってるわよ。ただ、ここまで露骨に人を疑わせるような状況になると、さすがにね…」

プルルルル…プルルルル…

竜崎「ちょっと待て、メールだ『ミッション見たか？俺は今、リラックスエリアのバー付近にいる。つまり、リラックスエリアにいない俺は、偽物ということだ。気を付けてくれ』……なんだよ、これ」

一ノ瀬「ちょっと、今のメール、誰から？」

竜崎「……………俺からだ」

一ノ瀬「ええっ!？」

一斉送信 俺の居場所を教える from 竜崎悠太
竜崎は今、リラックスエリアのバー付近にいる。
リラックスエリアにいない竜崎が偽物だということだ。

一ノ瀬「ってことは、私の隣にいる竜崎が偽物…わ、私、これで失

礼するわ！」

竜崎「待て、落ち着け！」

竜崎は、一ノ瀬の肩をつかんだ。

竜崎「俺は今、お前の肩をつかんだ。だが、お前は確保されたことになってないだろ？つまり、俺が本物だ。そもそも、俺とお前が出会ったのはミッションが来る前だ。俺が偽物であるはずがない」

一ノ瀬「……………」

竜崎「とりあえず、冷静になれ。いいか、俺とお前はこれから、ミッションに参加する。そして、手錠を獲得した後、リラックスイリアのバー付近に向かう。そこには、今メールを送った、悪知恵使いの俺の偽物がいるはずだからな」

一ノ瀬「いやよ…こんなミッションには、参加したくないわ」

一ノ瀬は、前半戦から一切のミッションに参加していない。

竜崎「一ノ瀬、お前は、俺のそばにいてくれるだけでいい。そうすれば、俺が他の逃走者と出くわしたとき、俺が本物だという証明になる。もちろんハンターが来たら、真っ先に逃げていい」

一ノ瀬「まあ、それくらいでいいなら、いいわよ…」

一ノ瀬は、しびしびミッション参加を決意した。

……………

カイジ「俺の偽物…絶対とっ捕まえてやる！」

コナン「よし、やるぜ！」

咲「怖いけど…やってみよう！」

偽物が現れた3人は、全員ミッション参加を決意したようだ。そして他にも…

綾崎「ここで行かなくて何が執事だ！必ずクリアしてみせる！」

ヒナギク「ええ行くわ！行くに決まってるじゃない！」

八神「うーん。ここはいかなあかんよな…」

責任感の強い3人がミッションに参加するようだ。これで、ミッションに参加するのは8人となり、クリアが濃厚になった。だがこのミッション、前半戦ほど甘くない…

.....

咲夜「とりあえず、ここは動かんとこ。ハンター以外にも警戒せんといかんのは、さすがに厳しいでんな」

結城「あんまりこういうの苦手だし、今回は竜崎君とかに任せよう」

上条「行きたいけど…偽物とか見分けるのきつそうだし、今回はやめよう」

ハンターや逃走者に臆して、動けない人々。今回は、見に回るよう
だ…

頭のいい者が参加することのミッション。偽物との心理戦を制し、ミ
ッションをクリアすることはできるのか…!?

ミッション5 part1 偽物出現！（後書き）

さて、後半戦はガチ心理戦です。

ミッション7くらいまでは心理戦主体で行こうと思っていますので、よろしくお願いします。

ミッション5 part2 逮捕!

ついに、後半戦最初のミッションが出された。

残り70分までに偽物を逮捕しなければ、ハンターが増えてしまう。ただし、偽物は逃走者たちを確保する。

果たして、逮捕できるのか…?

.....

ヒナギク「見つけたわ!これが手錠ね!」

誰よりも早く、ドリームエントランスエリアの入り口にやってきたのは、生徒会長、桂ヒナギク。

そして、それに続くようにして…

綾崎「あ、これですね?」

竜崎「よし、とりあえず手錠獲得つと…」

一ノ瀬「これでいいのね…」

この3人が手錠を獲得した。エリアが大して広くないため、入り口まで戻ってくるのは、比較的簡単だ。

そして、この高校生探偵も入り口にやってきた。

コナン「手錠…おっ、これが!」

手錠を持ち去ろうとするコナン。そこに…

カイジ「おう、コナン！」

伊藤カイジも、合流した…

コナン「あ、カイジさん！」

人と出会ったため、コナンは一時的に声を小学生モードに変えた。

カイジ「よし、手錠獲ったぜ！じゃあ早速……」

コナン「え？どうしたの？」

カイジ「ハンターだ…俺たちが偶然建物の後ろにいるせいで、まだ気づいちゃいねえが…」

コナン「それじゃあ、とりあえずこのまま……」

2人は、しばらくハンターの様子を見ていた。

カイジ「よし…いったな。偽物を捕まえるまでは、2人で行動するか」

コナン「うん、そうだね。ハンターを見つけやすくなるし…」

カイジ「よし、それじゃあよろしくな！」

コナン「こちらこそ！」

2人は、固い握手をした。

.....

プルルルル…プルルルル…

アカギ「ん？」「ドリームエントランスエリア入り口付近にて、江戸川コナン確保。残り13人」捕まったか…」

竜崎「『なお、この確保は、偽物によるものである』偽物…ついに動き出したか」

このメールを受け、一番動揺していたのは、当然コナンであった。

コナン「え…？え…？なにこのメール？」

カイジ（偽）「書いてある通りさ、俺は、伊藤カイジの偽物。さっきお前と握手したときに、確保が確定した」

コナン「ええ〜〜！！！」

騙された、名探偵…

江戸川コナン確保 残り13人

.....

ヒナギク「偽物による確保…ってことは、カジノ街の入り口に偽物がいるのね！」

入り口から離れていたヒナギクだが、確保情報を受け、入り口に戻った。

（1分後）

カイジ（偽）「他の逃走者は…いないな」

偽カイジは、逃走者を確保しようと、入り口付近を歩いていた。

そこに、ヒナギクがやってきた。

カイジ（偽）（来た！）

カイジ（偽）「おう、ヒナギクか。俺も今ここについたとこなんだ」

偽カイジは嘘をついた。しかし、確保情報を受け取っているヒナギクは、目の前にいるカイジが偽物であることを、知っている。

ヒナギク「うそおっしゃい！あなた、偽物でしょ？すぐに逮捕するわ！」

カイジ（偽）「…え？ちよ、ちよと待ってくれよ。俺は本物だ。

大体、俺が偽物って根拠がどこにある？」

ヒナギク「江戸川君の確保情報を見たわ。あの確保は、偽物による確保、そして場所はここ。貴方が偽物って考えるのが自然じゃない？」

偽カイジは、しまったという顔をした。

カイジ（偽）「でもよ、いいのか？今俺を逮捕して、もし俺が本物だったら、強制失格になるぞ。この俺が…！」

偽カイジは、打つ手がなくなり半ば脅しのような手段をとったが、そんな言葉に惑わされる人間は、まずいない…

ヒナギク「本物なら、そんなこと言はずないわ！逮捕よ！」

カイジ（偽）「……………クツ！」

こうして偽カイジは、あっけなく逮捕された。

偽カイジ逮捕 残る偽物は3人

……………

プルルルル…プルルルル…

またしても、一斉送信のメールだ…

カイジ「『今、伊藤カイジの偽物を逮捕したわ。この後会うカイジ君は本物ってことだから。それじゃ！』おお、これはありがてえ！」

カイジのため、ヒナギクが全体にメールを送った。これは、逃走中ならではの連携プレーである…

……………

咲「うん。開始早々遠くに行っちゃったからなあ…手錠とりに行くのが大変だよ…」

最初に、西エリアのリラックスエリアまで逃げてしまった宮永咲。反対側のエリアまで戻るのに、時間がかかる。

咲「ほんとにミッション放棄したかったけど、あたしの偽物だからなあ…」

このミッション本人同士の本物と偽物が出会うと、確実に逮捕できる。つまり、今エリア内に偽物が出現している逃走者は、ミッションに向かったほうが、皆のためにもなる。逃走者全体としても、有利になる。

その時、咲が何かを見つけた。それは…

咲「あつ、あたしの偽物だ。ほんと、似てる…」

咲は、自分の偽物を見つけた。だが、手錠がないため逮捕することはできない。

咲「とりあえず、ここにあたしの偽物がいるってことを覚えといて、手錠をとったらすぐに戻ってこよう」

この先の行動を決めた咲。そんな彼女の前に、ハンター…

咲「ふえっ！？まずいよ！」

意外と距離があつたため、咲は何とか逃げていたが。運の悪いことに、逃げているのはカジノ街ではめずらしい1本道。そんな道では、いくらハンターとの距離があろうと…

咲「…うっ！」ポント

逃げ切るのは、ほぼ不可能だ…！

宮永咲確保 残り12人

.....

一ノ瀬「あの子、捕まっただわね…」

竜崎「まあ、しょうがないな。あれは運がなかった。もしかしたら、オープニングゲームの3連続嶺上開花で、運を使い果たしたのかもな」

この2人は、リラックスエリアで竜崎の偽物を確保するために動いている。その途中で、咲の確保を見たのだ。

竜崎「まあ、仲間が減ったのは残念だが、今はそれよりも…」

一ノ瀬「宮永咲の偽物を逮捕する…って言いたいのでしょうか？でも、あの場所にはハンターがいるわ。あんな場所に行くのは御免よ」

竜崎「……俺が行ってくる」

一ノ瀬「あなた、捕まるわよ？」

竜崎「いいや、大丈夫だ。打開策はちゃんとある」

エリアに残っている偽物は残り3人。

そんな中、竜崎が思いついた打開策とは…？

ミッション5 part2 逮捕！（後書き）

中間テストが返ってきました。

はっきりに言ってる・・・な状態です。

ミッション5 part3 巧妙な罠

ミッション終了まで残り10分。

エリアには、まだ3人の偽物が残っている。

果たして、全員逮捕はできるのか…？

・・・

竜崎は、全力で咲の元へ向かった。

竜崎「宮永！逮捕だ！」

咲（偽）「え？」

竜崎は、咲の近くに近づくと、すぐに手錠をかけた。ここにいる咲は偽物だとわかっていているため、心理的な駆け引きは全く必要ない。

偽宮永咲逮捕 残る偽物は2人

ここまではいい。だが問題は、咲の近くにいるハンター。当然竜崎を見つけ、全速力で確保に向かう…！

一ノ瀬「あ…これは終わったわね」

その様子を見ていた一ノ瀬も、竜崎の確保を確信したはずだ。だが

…！

竜崎「はいはい。これでいいんだろ？」

竜崎は、ハンターの目の前にいるにもかかわらず、なぜか追いかけていないかった。その理由は…

一ノ瀬「サングラス…？」

そう、竜崎は無敵サングラスをかけていたのだ。

竜崎「戻ってきたぞ」

一ノ瀬が隠れていた茂みに、竜崎が戻ってきた。

一ノ瀬「あなた、サングラスを持っていたの？」

竜崎「いいや、前半戦では、アイテムを一つも手に入れられなかった。ただ、ジェット機でこの会場に向かっている途中に、買ったんだ。結城から」

結城は、前半戦で無敵サングラスを入手しており、まだ使用していない。

一ノ瀬「買ったって？」

竜崎「俺が逃走成功した場合、獲得賞金108万の内、40万を支払うという条件を結城に出した。そしたら、売ってくれたよ。いつも簡単に」

一ノ瀬「でも、なぜ買ったのよ？やっぱり、逃走成功の確率を上げるため？」

竜崎「まあ、それもあるが、それ以外にもある。この後半戦、何かおかしいことが起こると、俺の予感が告げていたんだ。相当嫌な予感だ。現に今、少しおかしなミツシヨンが出ている。そういうところで使うために、これを買ったんだ」

竜崎の嫌な予感。それが的中することは、わずか10分後に明らかになる…

.....

八神「あれ、君は確か咲夜ちゃんやん」

咲夜「おゝはやてや。何しとんの？」

ミツシヨンに参加している八神と、隠れていた昨夜偶然にも合流した。この2人の偽物はいないので、お互いを疑う必要はない。

八神「今ミツシヨンやってんや」

咲夜「それはえらいな〜うちなんか体力もあまりないからこのミツシヨンは見送りや」

八神「……」

咲夜「……」

八神「なんかうちら、声もしゃべり方もそっくりやな」

咲夜「たぶん、大人の事情がからんだるんやろ。そんなことよりも、

ハンターきたで…」

咲夜が、ハンターを見つけた。隠れているため、気づかれなければ大丈夫なのだが…

ハンター「……………！」

気づかれた…

八神「あかん！気づかれた！」

咲夜「よし、逃げるで！」

2人はハンターから逃げだした。そして、逃げた先にあつたものは…

八神「十字路…」

咲夜「うちが左、あんたが右に逃げるんや！」

八神「分かった。ほんじゃあ気を付けてな！」

2人は、十字路で別れた。しかし、尚もハンターは逃走者を追う。追われている逃走者は…

咲夜「って、うちかいな！」

十字路をに入れば、後は1本道となっている。これでは、逃げ切れ
ない…

咲夜「うひゃあああああ！」ポンッ

愛沢咲夜確保 残り11人

.....

プルルルル…プルルルル…

綾崎「『リラックスエリア付近にて、愛沢咲夜確保 残り11人』
咲夜さん、捕まってしまったんですか…」

確保情報を見ていた綾崎。そこに現れたのは…

ハンター「……………」

ハンターだ…

綾崎「うわわっ！隠れてないと…」

綾崎がとっさの対応をしたため、ハンターは、綾崎に気付かず去って行った。

綾崎「ふう、驚きました…」

.....

カイジ「暗いし遠いからよく見えねえが、あれは竜崎じゃないか？
メール通りの場所にいるな」

リラックスエリアのバー前で竜崎を見つけたカイジ。竜崎は、この場所にいると全員にメールを送っている。だが、メールを送った竜

崎は、偽物だ…

カイジ「おーい、竜崎！」

竜崎（偽）「…ん？ああ、カイジか。何か用か？」

カイジ「いや、偶然近くに来たから…」

竜崎（偽）「そうか。あ、そうだ。せつかく来たんだし、これをやる。さつきそこでもらったんだが、2個あったからな」

カイジ「なんだこりゃ？お守りじゃねえか」

竜崎（偽）「もしかしたら、いいことあるかもしれないしな。ほら」

偽竜崎は、カイジにお守りを渡そうとした。もちろんこれは偽竜崎の罠。このお守りが手渡しでカイジにわたった瞬間、カイジは確保となる。だが、そこに…！

竜崎「騙されるな、カイジ！そいつは偽物だ！」

なんと、本物の竜崎が現れた。

カイジ「なにっ!？」

カイジは、とっさに偽竜崎から離れた。

竜崎（ふう、どうにかカイジを守ることが出来た。だが、逮捕が出来ない…!!…!!）

竜崎は、ここに来る前に、あることをしていたのだ。

ミッション5 part3 巧妙な罠(後書き)

次回は、竜崎の回想から始まります。

ミッション5 part4 矛盾と証明

〈回想〉

少し前のことだ。竜崎と一ノ瀬は、偽竜崎を逮捕するために2人で行動していた。

しかし、そんな2人の前に現れたのは、偽竜崎ではなく…

コナン（偽）「あ、こんにちは」

偽コナンのほうだった。本物のコナンは偽カイジによって既に確保されているので、このコナンが偽物だということは、明白だった。

竜崎「こつちに先に出会ったか」

一ノ瀬「私が手錠を1つ残してるから、逮捕はできるわよ。逮捕するの？」

竜崎「見つけたからには…逮捕するか」

一ノ瀬「分かったわ。それじゃあ、はい」

一ノ瀬は、ためらいもなく偽コナンに手錠をかけた。

コナン（偽）「あ、そういえば、本物はもういないんだっけ…」

偽コナン逮捕 残る偽物は1人。

これで、残るは偽竜崎だけとなった。

一ノ瀬「それで、あなたはこれからどうするの？もう手錠はないわよ」

竜崎「そうだな。とりあえず近くに隠れて……ハンター来たぞ！」

話し込んでいて、一瞬だけ反応が遅れた。そんな2人の後を、ハンターは全速力で追う！

だが、2人の運動神経はかなりいい。ハンターとの距離がなかなか縮まらない。そんな2人の前に、左右に分かれたY字路が…

竜崎「俺は左に逃げるぞ」

一ノ瀬「なら私は…右ね。それじゃあ、お互い逃げ切れるといいわね」

2人は、このY字路で別れた。そして、ハンターが追ったのは…

一ノ瀬「こっちに来たわね…」

一ノ瀬玲奈のほうだった。だがしかし、追いかけても大丈夫なように、一ノ瀬は、走りながら逃げるルートを考えていたのだ。そして…

一ノ瀬「何とか撒いたわね…」

建物の影と、自分の運動神経があってこそその結果である。

〜回想終了〜

竜崎（つまり、俺にはもう手錠がない。カイジが手錠を持っているから、カイジに逮捕させればいいのだが、俺が本物だという証拠はない。一ノ瀬が一緒にいればよかったんだけどな…）

竜崎（偽）「おいカイジ、何騙されてるんだ。俺が本物だ。早く目の前にいる俺の偽物を逮捕してくれ」

竜崎「いや、俺が本物だ。お前が偽物なんだ」

2人の竜崎は、必死に自分が本物だということをアピールした。

カイジ「ど…どうすりゃいいんだ」

現在、カイジが手錠を持っている。カイジが本物を見分けられれば、偽物を逮捕してミッションクリアとなるが、もし見分けられなければ、竜崎は誤認逮捕で強制失格となってしまう。

竜崎「カイジ、もし俺が、自分が本物だということを証明できれば、あの偽物を逮捕してくれるな？」

カイジ「ああ、もちろんだ」

竜崎（偽）「証明？そんなことできるわけないだろ」

竜崎「それはどうか、偽物。お前は、1つだけ致命的なミスをしている」

竜崎（偽）「言ってみろ。俺の偽物がどんな作り話をするのか、聞

いてやる」

竜崎は、にやりと笑うと、自分の携帯を取り出して、操作した。

ブルルルル…ブルルルル…

カイジ「メール？竜崎、お前が送ってるじゃないか」

竜崎「俺は今、カイジに空メールを送った。中身を確認してくれ」

カイジ「確認もなにも、なんも書いてない…」

竜崎「書いてあるだろ？このメールがだれから送られてきたものなのか」

確かに、本文の上には、from竜崎悠太と書かれてあった。

竜崎「さてここで、このミッション開始と同時に俺の名前で送られたメールをもう1度見てみよう」

カイジは、メールを出した。

件名 俺の居場所を教える from garasuhai.ko
kushimusuou@docamone.jp

ミッション見たか？俺は今、リラックスエリアのバー付近にいる。つまり、リラックスエリアにいない俺は、偽物ということだ。気を付けてくれ。

竜崎「このメールが、本物の俺が送ったとしたら、矛盾が生まれる。逃走者の携帯には、逃走者の数だけ、アドレスが登録してある。だから、俺がカイジにメールを送ったりすると、from竜崎悠太という表示が現れるんだ。だが、もしも偽物がメールを送ったら？」

カイジ「……fromの後が、名前ではなくてメールアドレスで表示される！なぜなら、偽物が持っている携帯のアドレスは、俺たちの携帯に登録されていないから！」

竜崎「その通りだ。つまりこのメールは、皆を嵌めるために、偽物の俺が送ったメールということになる。ここまでくれば、どっちが本物か、もう明白だろう？」

カイジ「ああ……！さっき竜崎が俺に送った空メールには、きちんとfrom竜崎悠太と書かれていた。つまり、お前は本物……！」

実に見事な証明だった。偽物と本物は、姿や性格はそっくりだが、頭の中までそっくりにすることは出来ない。通っている高校の成績でNo.1をとっている本物の竜崎には、いくら姿かたちが似ている偽物と言えど、勝てるわけがない。

竜崎「最後に偽物、言っておきたいことはあるか？」

竜崎（偽）「俺の負けだ。だが、気をつける。この先、お前には更なる試練が与えられることだろう。その試練をクリアしない限り、逃走中のクリアはない」

竜崎「心に刻んでおくよ。さて、カイジ」

カイジ「ああ…！御用だ…！」

こうして、偽物はすべて逮捕された。

偽竜崎逮捕 ミッションクリア！

.....

プルルルル…プルルルル…

結城「もう時間が…あ、メールだ」ミッション5結果。竜崎悠太、一ノ瀬玲奈、桂ヒナギク、伊藤カイジの活躍により、偽物は全員逮捕された』みんな、すごい…！」

綾崎「『よって、偽物は全員消え、ハンター増加もなしとなる』結局ミッションできませんでしたね…でも、皆さんすごいです！」

アカギ「次くらいは、ミッションに参加してみるか…！」

雲雀「風紀委員として、次は…！」

この結果を受け、今回ミッションに参加しなかった者も、やる気が出たようだ。

ミッション5が終了。この時点で、残る逃走者は11人。残り時間

は70分となっていた。
そして遂に、あのストーリーが再び動き始める…！

ミッション5 part 4 矛盾と証明(後書き)

はい、ミッション5終了です！終了記念に、次の話はミッション6に入るのではなく、1話だけ使って、ちょっとしたお祝いしたいと思います。

え？何をお祝いするのかって？それは、次回説明します！

番外編 逃走中裏話&パーティー！

作者「フ…フフ…フフフ…」

竜崎「冒頭から何を笑っているんだ？」

一ノ瀬「そうよ。戻るボタン押されちゃうわよ」

作者「フフフ…アツハツハツハ！」

藤田「ちよっと、本当にどうしたの？」

結城「病院に…行かせる？」

沼川「よし、それじゃあ俺が救急車呼ぶわ！」

…

ピーポー ピーポー

作者「ちよっと待て、なんで救急車きてんだよ!？」

竜崎「お前の精神がおかしくなったと思ったから、呼んでやったんだ」

作者「呼ぶな!あ、救急隊員さん、もう大丈夫ですので…」

救急隊員「あ…そうですか」

救急車は、帰って行った。

竜崎「それで、なぜ俺たちがここにいる？」

一ノ瀬「まだ逃走中の途中なのよ？」

作者「作者権限で呼んだんだ。この小説について、あるパーティーを開こうとおもってな」

藤田「なんとも自分勝手な権限だね。それで、パーティーって？」

作者「うむ、よく見るがいいー！」

????????????????????

? 祝! 30000アクセス突破! ?

????????????????????

沼川「おお! まじでか!」

竜崎「これは…素直にすごいな。この作者の小説ともなるとなおさらだ」

作者「一言多いよ、君。まあ、そんなわけで、記念のパーティーを企画した。オリキャラの5人を呼んでな。あと、今までの話を1回振り返っておこうと思ってね。俺もつろ覚えのところ多いし…」

結城「…え？」

沼川「問題発言でたww」

作者「ま、まあいいじゃない。それじゃあ、振り返っていくよ！」

.....

作者「まずは予選。A会場で戦った君たちは、どうだった？」

竜崎「確か、他人と接触してポイントを増やしていくゲームだったな」

作者「俺としては、あのゲームならもう少し高度な駆け引きが書けたんじゃないかと少し後悔している」

一ノ瀬「竜崎ばかり目立って、私の出番が少なかったのだけど」

結城「確かに、少なかったよね」

沼川「俺なんて変なアイテム買って負けたんだぞ。勝ち上がっただけいいと思えお前ら！」

竜崎「ちょっと、それくらいにしてくれないか。さっきから向こうで先輩が……」

藤田「.....」

一ノ瀬「そういえば、あなたのバイト先の先輩だったわね。あの人作者すら今思い出した設定らしいけど」

作者「ギクッ！どうしてわかった……？」

一ノ瀬「顔に出てたわよ」

作者「と、とりあえず次行こう！B会場は君たち関係ないから…ミッション1！」

竜崎「内容は確か、エリア拡大だったな」

一ノ瀬「大工セットを買って、大工に渡せばいいというミッションね」

作者「竜崎が唯一なんもしてないミッションだな」

竜崎「一応大工セットは買ったぞ。じゃんけんで勝ったからその後は任せただけだ」

作者「あゝそうだ。そんな感じだった」

沼川「こいつ、本当に大丈夫か…？」

作者「OKだ！次はミッション2だな。これは、ハンター放出阻止のミッションだな」

結城「あれ？竜崎君はこのミッションやってないんじゃないっけ？」

竜崎「そうなんだけどな…」

作者「直接は参加してないけど、間接的にはやったからね。具体的には、ハンターボックスの場所を推定して、海里に電話でそれを伝えてそれから…」

沼川「ストップ！ちょっと長くなりそうだから止めるぜ！次はミッ

シヨン3だな」

一ノ瀬「ステージに行くミッションね…私はここで捕まったのよ」

竜崎「慎重になりすぎだ。あの場面では強行突破以外ないだろ」

一ノ瀬「それでも、私は隠れ場所については最善の方法をとったつもりよ」

作者「運がなかったってとこだな。それが逃走中クオリティ！」

結城「意外と足速い人もつかまつてるよね」

作者「足速い人…フェイトとかだな。それだけハンターは速いんだよ…本当に速かった」

竜崎「お前、本物のハンターにあったことがあるような言い方するな。会ったことがあるのか？」

作者「いや、無いけど？」

沼川「紛らわしい言い方するな！」

作者「はい、すみません。じゃあ最後に、ミッション4。ジェット機に避難するミッションだな。正直言って、このミッションだけは場面の移り変わりが多くて書くのが大変だった」

結城「逃走者全員を書かざるをえないからだね」

作者「そうそう。んで、内容だけど、当初は上条さんを後半戦に出

すつもりじゃなかったんだよね」

一ノ瀬「それじゃあ、なぜ？」

作者「いや、書いてたら気づいたんよ。こいつ…書きやすいつて！」

沼川「また問題発言でたww」

竜崎「まあ、書きやすそうな性格をしているのは認める」

作者「だろ！まあそんな感じで、前半戦は終了というわけですな」

沼川「じゃあ次は、ミッション5か」

作者「いや、そこからはまだ振り返らないことにしようかなあと。書いたの最近だし。この小説が完結したらもう1度ここの開くからその時にね。なんかずいぶんと裏情報暴露した気がするし」

竜崎「そうか、ならこれでお開きだな」

一ノ瀬「まったく、逃走中の途中なのに、呼び出さないでくれる？」

作者「安心しろ。作者権限で、ここでの記憶はすべて消えることになってる！それじゃあ、戻れ！」

5人「え？うわああああ！」

作者「ふう、終わった。あ、そうだ。最後にこれだけは言っておかないといけないな。え〜と、これももう1度…」

????????????????

?祝!30000アクセス突破!?

????????????????

作者「こんな小説が30000アクセスを突破するなんて思っても
いませんでした。本当にありがとうございます>m(____)m<せ
いぜい5000あれば上出来だと思っていました。まだまだ逃走中
は続きます!最終回まであと2か月ほど、よろしければお付き合
い下さい」

ミッション6 part1 欲のままに…

ミッション5も終わり、ゲーム残り時間は70分となった。
残る逃走者は11人。

だが、彼らに安息の時間はない。恐怖のミッション6が幕を開ける

…！

………

立直「ここだ…」

断ヤオ「やっぱり、カジノ街は怖いぜ…」

平和「ええ、特にこういった、高レートの裏カジノもある場所は、
僕も嫌いです」

自分たちを襲撃した相手を追い、カジノ街まで足を運んだ麻雀の精
霊御一行。かなり、怯えているようだ…

三色「フツ。それでも来てしまったのだ。進むしかなかろう」

一盃口「そうですね、弱気になってどうするんですか」

断ヤオ「わ、分かってるよ！」

彼らがいるのは、カジノの地下。このカジノ、見てくれは普通、客
もヤクザのような悪人はほとんどいない、レートも低いといった、
息抜き程度のカジノなのだが、このカジノの地下はものすごいこ
ろになっている。

それは、別名「魔物だらけの賭場」と言われている。足を踏み入れたら最後、持ち金はおろか臓器さえもなくなっていることがあるという。

立直「じゃあ…開けるぜ」

立直が、魔物だらけの賭場の扉についているドアノブを握った。その瞬間、5人の緊張感はピークに達する。

立直「オラッ！」

ガタッ！

立直「あれ？」

平和「なんですかね…ここは」

三色「どうも…イメージと違う」

5人が賭場の中に入る。が、その中は賭場とは思えない場所だった。

一盃口「ここは、何の部屋なんですかね」

5人がいるのは、天井、床、壁、すべてが白い、殺風景な空間だった。唯一ある物といえば、部屋の角に設置されているスピーカーのみ。

そのスピーカーから、声が聞こえてきた。

??「よく来たな。俺が今、世界で最も憎んでいるクソ精霊共！」

断ヤオ「ああ来てやったよ！この裏切り者が！」

??「裏切り者ねえ…まあ、そうだな。だけど、俺は裏切るしかなかったんだ！俺の扱いは、精霊の中で相当低い！正直言つて、精霊の仕事だけじゃ、食っていくのもやっとなんだ！」

立直「一体…お前は誰なんだ？」

??「いま、そこに行ってやるよ」

ブツッ！

放送が、途切れた。

そして、5人の前に、1人の男が現れた。だが、その男はマスクをしていて、正体がわからない…！

立直「おい、顔を見せろ」

??「簡単に顔を見せるわけないだろ。今顔を見せたら、精霊の上層部に報告されてアウト…だ。そもそも、俺が裏切ったのは、精霊を続けることは、俺にとって利が少なかったからだ。俺は、お前らより給料も少ないからな！」

一応、精霊も人間の姿をしている以上、人間界で生きていく必要がある。そのために、給料が渡されているのだ。

平和「でも、いくら給料が少なかったって、精霊を続ける意味はある

はずです！僕たち精霊は、全国の麻雀打ちたちに、麻雀を楽しんでもらうために、いろいろなアシストをする役目があるんですよ！そしてその結果、麻雀打ち達が麻雀楽しんでるのを見て、幸せな気持ちになることだってあるはずですよ！」

??「甘い！そんなもののために、精霊を続ける？甘すぎる！いいか、生き物というのは、自分の利でしか行動しない。俺が裏切ったようにな。それは、人間も同じだ」

立直「そんなこと…ないだろ！人間たちには、温かい心というものがある。決して、自分の欲のために、仲間を裏切るようなことはしない！」

??「ほう、俺に意見するのか。いいだろう！見せてやる！人間が、自分の欲のままに行動する姿を…！」

.....

プルルル…プルルル…

ゲーム残り時間65分。この時、この後半戦の醍醐味ともいえるミッションが発令された…

カイジ「きやがった…！」『ミッション6。これより、裏切り者を募集する。裏切り者とは、他の逃走者を見つけたら、ハンターにそれを通報する役割を持つ』裏切り者だど！」

雲雀「裏切り者が逃走者を通報し、その逃走者が捕まると、現在1秒100円ずつ上昇している賞金が、残り時間50分より1秒200円となる。さらに通報すると、その分だけ賞金単価が100円

ずつ上昇する』ここで裏切ったら…かみ殺す！」

竜崎「『そして、逃走者を通報し、見事捕まれば、裏切り者は特別ボーナスとして、10万円を獲得できる。ただし、ハンターにつかまれば当然0となる』ひどいミッションだな…」

ミッション6 賞金単価をアップせよ！

只今より、裏切り者を募集する。

他の逃走者を見つけ次第通報し、その逃走者が確保されれば、賞金単価が100円上昇する。

賞金単価の上昇は、残り時間50分から。

見事逃走者を確保させた裏切り者には、特別ボーナスとして10万円が渡される。

ただし、ハンターにつかまれば、賞金は0となる。

.....

主催者「フフ…これがやりたかった」

エリー「私が言うのもなんですが、本当にひどいミッションですね。何のために、こんなミッションを？」

主催者「言つたる？逃走者たちの心を壊すつて。だが、もしも彼らがこの試練を乗り越えたのなら、彼らの絆はより一層深まることになるだろう」

エリー「彼らは、欲に溺れて絶望への道を歩みだすか。それとも、仲間を裏切らず、最後まで信頼し合える関係を築けるか。と、言ったところですね」

主催者「楽しみだよ…フツ、フフフ」

エリーと主催者は、静かにモニターを見つめた…

ミッション6 part1 欲のままに…（後書き）

ドラマパートが長すぎる気がしますね、はい。

この小説のもう一つのストーリーだと思って見逃してください（笑）

ミッション6 part2 裏切り者0

ゲーム残り時間70分。

裏切り者募集のミッションが始まった。

果たして、裏切り者は現れるのか…！

……

竜崎「逃走者を通報して、捕まえることが出来れば、ゲーム残り時間50分になった時から、賞金単価が100円ずつ上がる。つまり…」

	賞金
1秒100円	108万円
1秒200円	138万円
1秒300円	168万円
1秒400円	198万円

竜崎「こういうことになるのか。さて、どうなるのやら…」

竜崎がこれを計算するまでわずか5秒。天才の頭脳は、半端ではない…

……

上条「裏切り者が、とんでもないミッションだぜ」

灰原「まさか、裏切らないでしょうね？」

上条「当たり前だろ！」

偶然出くわした、上条と灰原。お互いを、警戒しているようだ…

上条は知らないが、灰原は予選ですでに3人の人間を裏切り、通報している実績がある。今回も、裏切るのか。

灰原「それじゃあ、ハンターに気を付けて。私は移動するから」

上条「ん、わかった」

灰原は、上条と距離をとった。そして2分後、上条の視界から外れたところで…

プルルルル…プルルルル…

電話を、かけた…

灰原「まあ、1人くらいはいいわよね」

主催者（声）「もしもし？」

灰原「ああ、灰原哀よ。ちょっと通報を……してる暇はないみたい」

なんと、電話をしている彼女の前に、ハンターが接近。だが、気づくのが遅すぎた。逃げることは、不可能だ…！

灰原「うっ…」ポンッ

灰原哀確保 残り10人

仲間を裏切ろうとした、罰だ…

.....

プルルルル…プルルルル…

アカギ「『ギャンブルエリア雀荘付近にて、灰原哀確保。残り10人』」

綾崎「もうすぐ1桁…きついですね」

逃走者の数が減れば、それだけ自分が追われる可能性も高くなる。逃走者の確保は、他の逃走者にとって、デメリットしか生まないのだ。

綾崎「夜のカジノ街って、明かりはたくさんあるんですけど、怖いですね。主に空気とかが…」

ちようど、カジノが立ち並んでいる場所にいる綾崎。明かりがあるおかげで、周りがよく見渡せる。

バニーガール「貴方、かつこいいね〜どう、ちょっと遊んで行かない？」

綾崎「ハハ…遠慮しておきます」

可愛いバニーさんに話しかけられ、顔を赤くしている、借金執事。

だが、気を緩めている暇はない、気を緩めようものなら…

ハンター「……………！」

見つかってしまう…！

綾崎「わっ、ハンターだ！」

いつも不幸な目に合っている経験からか、すぐにハンターを見つけた。そして、持ち前の身体能力で逃げる！

だが、綾崎の前に、別のハンター！

綾崎「ええ〜〜〜」

不幸な少年、挟み撃ちだ…

〈牢獄〉

ワタル「ん？あの借金執事、挟み撃ちにされてねえか！？」

フェイト「あれは…捕まるね」

牢獄から綾崎が見えた。それを見ていた確保者たちは、誰もが綾崎の確保を確信した。だが…！

綾崎「お嬢様のため、こんなところで捕まるわけには、いかないんだあああ！」

ブワッ！

ハンターA「……………!!!」

ハンターB「……………!!!」

マリア「あらあら、ハヤテ君たらもう…」

咲夜「あの借金執事、やるやんけ！」

なんと綾崎、1回転してハンターの頭上を飛び越えた！ハンターは振り返ったが、その一瞬の間が、綾崎を勝利に導いた。なんと、ハンターを撒いてしまったのだ。

綾崎「はあ…はあ…さすがに、厳しいですね…」

規格外スペックの持ち主が、真の力を発揮した瞬間だった…

……………

カイジ「残り時間60分20秒！今どれくらいたまってんだ？」

ゲーム残り時間 賞金

60:20 718000円

カイジ「おおすげえ！これならもう自首してもいいかもな…」

自首に心が揺れる、博奕打ち…

カイジ「よし、自首しちまうか！電話ボックスはどこだ？」

今回のエリアには、各エリアに1つずつ、計4つの電話ボックスが設置されている。カイジから一番近い電話ボックスは、300mほど西にある。

カイジ「よし、走るぜ！」

賞金獲得に向け、走るカイジ。そして、電話ボックスまでの距離が100mまで縮まった。

しかし、電話ボックスの前に、ハンター…

カイジ「うおっ！やべえやべえ…」

カイジは、とつさに建物の陰に隠れた。その機転がきいたのか、気づかれなかったようだ。

カイジ「早くハンター行つてくんねえかな…」ポンッ

カイジ「……え？」

カイジの肩に走る、手の感触。まぎれもなく、ハンターの手…

カイジ「うわああああ！ひでえっ！！」

伊藤カイジ確保 残り9人

自首に目がくらんだ逃走者の、哀れな末路だ…

.....

ブルルルル…ブルルルル…

結城「『バー付近にて、伊藤カイジ確保。残り9人』また減っちゃった」

一ノ瀬「でも、裏切り者の通報で確保とは書かれていないわね。よかった…」

カジノ街の入り口で出くわした2人。裏切り者がまだ出ていないことに、ほっとしているようだ。

結城「でも、もし裏切り者が出たら、玲奈ちゃんはどうするつもり？」

一ノ瀬「私は…すぐに自首するわ。裏切り者は、怖いから…」

結城「玲奈ちゃんがそんなこと言うなんて、ちよつと意外」

一ノ瀬「私は、裏切りや嘘を最も憎んでいるから。出来れば、裏切り者がいる場所になんて、いたくないもの」

結城「そうなんだ」

ハンターもいないため、ちよつとした話をしていた。

逃走中では、他の人と接触する機会があまりないため、こういった時間は貴重なのだ。

ミッション終了まで、残り5分…！

果たして、このまま裏切り者は現れないのか。それとも、欲に目がくらみ、裏切ってしまう者が現れてしまうのか…！

ミッション6 part2 裏切り者0（後書き）

本家の逃走中が放送されましたね！

自分としては、サイコロを転がすタイプのオープニングゲームを見たのがうれしかったです。

当然、ドラマパートも面白かったですね。

次回の放送日はいつなんだろう…

ミッション6 part3 残り50分!

竜崎「ついに1ヶタか…これはきついぞ」

アカギ「カイジという男は、捕まったか…期待していたが、残念だ」

八神「ほんまよう残れたな、私」

カイジの確保により、残る逃走者は9人となった。

そして、ミッション6がついに終了する…

.....

雲雀「あれは…」

ブラックエリアの倉庫にやってきた雲雀。そこで雲雀は、怪しげな集団を見た。

雲雀「麻薬取引…違法だね。止めてくるよ」

倉庫の中には、大量の現金を渡している男と、それと引き換えに小さな袋を渡している男がいた。他にも、護衛と思われる黒服が5人ほど。間違いなく、薬の取引だ。

カメラマン「1体7では圧倒的に不利ですよ？」

雲雀「有利も不利もないさ。この町の風紀が乱れている以上、止めるのが僕の役目だからね」

雲雀は、トンファアを構えた。そして、そのまま倉庫に突っ込もうとした。

だが、倉庫の前にハンター…雲雀を、捉えたようだ。

雲雀「邪魔だよ、まずは君から…！」

カメラマン「わー！だめです、雲雀さん！ハンターが相手なら逃げてください！それがルールですから！」

雲雀「……っ！」

雲雀は、仕方なく向きを変えた。だが、逃げた先に、別のハンター…

雲雀「攻撃してもいい？」

カメラマン「ダメです！」

雲雀「麻薬取引も止められず、ハンターも攻撃できず、これはそういうゲームなんだね。だったらもう興味はないよ」

雲雀は、なんとその場で立ち止まった。そしてそのまま、あっけなく確保…

雲雀恭弥確保 残り8人

雲雀「参加するだけ無駄さ、こんなゲーム」

どうやら、ゲーム自体に興味をなくしてしまったようだ…

そしてこの時、ちょうどミッション6が終了した！

.....

プルルルル…プルルルル…

ヒナギク「2通メールね」倉庫付近にて、雲雀恭弥確保 残り8人
あの暗い感じの人ね…」

竜崎「そして2通目は…」ミッション6結果。裏切り者の通報により、2人が確保された。これより、賞金単価は1秒300円となる
な…なに!？」

逃走者たちに、衝撃が走る…!

八神「そんな…裏切り者の通報により確保なんて、確保情報はこなかったやん!」

アカギ「誰も、そんな詳しく確保情報を送るとは言っていない…クク、面白い」

上条「裏切り者…出やがったか!」

結城「一体…誰なの?」

綾崎「メール…まだ続いています」このミッションで裏切り者となっ

た者には、これからも裏切り行為を続けてもらう。他の逃走者を通報し、確保されれば、ボーナスとして30万円が渡される』さ、30万円!？」

竜崎「『ただし、裏切り者も確保されれば、賞金は0となる』まあ、それはそうだが…」

八神「『尚、今後裏切り者の通報により確保された場合、確保情報に記載する』裏切り者の居場所がわかるっちゅーことやな」

裏切り者に対する報酬は、ミッション中の3倍。裏切り者にとっては、最高の条件だ。

プルルルル…プルルルル…

その時、竜崎の電話が鳴った。

竜崎「もしもし…結城か。何の用だ？」

結城（声）「竜崎君、今すぐギャンブルエリアのポーカー専門店前に来て！」

竜崎「何があつた？」

結城（声）「とにかく大変なの！お願いだから早く来て！」

竜崎「分かった、すぐに向かう！」

竜崎は、電話を切って走り出した。

.....

竜崎「結城、何があった？」

結城「それが、玲奈ちゃんが……」

2分ほどで、竜崎が到着した。するとそこには、ベンチに腰かけて下を向いている一ノ瀬の姿があった。

竜崎「どうした、一ノ瀬？」

一ノ瀬「ああ、竜崎……」

結城「玲奈ちゃん、さっきまですごく荒れてて、大変だったんだよ」

竜崎「裏切り者が出たんだ。無理もない」

一ノ瀬「2人とも、私は自首することにするわ。もうこんなゲームはたくさんよ。私はもう、誰も信じられない……2人も通報されたくなければ、早く自首したほうがいいわよ」

どうやら、自首に向かうようだ……

竜崎「それは出来ない。俺たちは、前半戦で自首をするために使う自首用コインを、ミッションのために使ってしまったっているんだ」

ミッション1で、自首用コインを引き替えに、大工セットを購入してしまっている竜崎と結城。自首はもう出来ない……

一ノ瀬「そう。それは残念ね。それじゃあ、私はこれで」

一ノ瀬は、立ち上がると、電話ボックス向けて歩き出した。

竜崎「お前、どうして自首するんだ？」

竜崎の声に、一ノ瀬が振り返る。

一ノ瀬「言わなかった？もう私は、誰も信じられない。そんなゲムはたくさんよ。だから、自首をするの」

竜崎「それは…嘘だな」

結城「え！？」

一ノ瀬「どういうことよ」

一ノ瀬の機嫌が悪くなっていく。

竜崎「もし本当に、お前がだれも信じられない人間なら、俺たちから離れて自首をするはずがない。俺たちのどちらかが裏切り者だった場合、通報されてしまうからな」

結城「あ…確かに！」

竜崎「お前は、俺たちのことを信じているんだろ？だから、俺たちと離れることが出来る」

一ノ瀬「……………」

竜崎「俺はお前の過去を知ってる。そのせいで、お前がだれも信じられない性格になってしまったことも知ってる。だが、お前は今、俺たちを信じている。なぜか？お前が、少しずつ変わっているからなんだ」

一ノ瀬「…私は、何も変わってなんかいないわ。あなたたちから離れたのも、あなたたちが裏切り者ならという考えにたどり着かなかっただけ。ただそれだけの話よ！」

あたりに、一ノ瀬の声が響く。それに反応して、何人かの通行人が振り返った。

竜崎「もうさ…やめろよ。そうやって自分をごまかすのは」

一ノ瀬「……！」

竜崎「いいか、今回の逃走中は、お前が変われるチャンスかもしれないんだ。ここで人を信じることが出来たら、お前は確実に変わる」

一ノ瀬「信じれるわけじゃない！この中に裏切り者が最低1人はいるのよ！これだけはゆるぎない事実！あなただってわかってるでしょう!？」

いつもの彼女らしくない声が上がった。

竜崎「裏切り者は…俺が見つけてやる」

一ノ瀬「え？」

竜崎「お前が、人を信じれない原因となっている裏切り者は誰か、俺が突き止めてやる…！」

一ノ瀬「あなた、何のためにそんなことを…」

竜崎「俺は、お前がそんな風に苦しんでいる姿は、見たくないんだ。いつものお前に戻ってほしい…いや、それ以上の、人を信じれる人間になってほしい。だから俺は、裏切り者を探すんだ」

その言葉を聞いた一ノ瀬は、小さく笑った。

一ノ瀬「フフ…竜崎って、案外バカね。私のためにそんなことをするなんて」

竜崎（…ん？バカとは失礼な）

一ノ瀬「でも、面白いわ。付き合っただげるわよ。ただし、裏切り者が見つかるまでは、あなたは私のそばから離れないこと。いいわね？」

竜崎「…わかった」

竜崎（絶対に見つけてやる…裏切り者…！）

こうして、竜崎を筆頭に裏切り者捜索隊が結成された。果たして、裏切り者は誰なのか？

そして次回、新たなミッションが始まる…！

結城「あの…私空気になってない？」

「カメラマン」気のせいですよ

ミッション6 part3 残り50分！（後書き）

竜崎は、裏切り者を見つけられるのか！？

そして、ミッション7の内容とは！？

「竜崎の台詞がクサすぎて変」「逃走中にこつこつ話は無しだろ」などの感想は自重をお願いします。
作者凹んじます。

ミッション7 part1 裏切り者の存在

ゲーム残り時間は45分。

ここにきて、裏切り者が発生してしまった。

だが、それと同時に裏切り者捜索隊も結成された。

勝つのはどちらなのか！

そして、その様子を見ていた麻雀の精霊たちは…

??「どうだ、これが愚かな人間どもの本性だ！」

平和「…クツ！」

三色「裏切り者が出たか…」

落胆の表情を隠せない精霊たち。だが、その中で1人、リーダーの立直が薄ら笑いを浮かべた。

立直「フフ…お前、それであいつらの本性を出したつもりか？」

??「どういうことだ？」

立直「ここに映っている逃走者…これは真の姿ではない！」

??「何言ってるんだ!？」

立直「彼らは、強い絆で結ばれている者たちだ。お前がそいつらの絆を壊したというなら、俺がその絆を元通りにしてやる！そして、それが出来たら、お前には正体を明かしたうえで、捕まってもらう」
??「面白い！ただし、お前がその絆とやらを元通りにできなかつたら、お前は精霊をやめる！どうだ？」

立直「いいよ。だって、あいつらがこのままであるわけがないからな！」

.....

アカギ「とうとう、半分を切ったか……」

残り時間は、45分。すでに約半分の逃走者が捕まったことを考えると、裏切り者の存在がとても重要なのがよくわかる。

八神「裏切り者は…何人いるんや！」

さらに、裏切り者の数が分からないのも、逃走者たちを苦しめている。

上条「とりあえず、裏切り者は多くとも3人だな」

ミッション6の間につかまった逃走者は3人。よって、裏切り者の数は最大でも3人となる。

そしてこの話題は、牢獄でも大変な話題となっていた。

安岡「裏切り者が出たか…（アカギじゃないだろうな）」

良平「クソ！裏切り者って誰だよ！」

静香「この状況でみんなを裏切るなんて、信じられない！」

裏切り者に対する怒りは、皆半端ではない…

…

プルルルル…プルルルル…

アカギ「電話…上条からか」

上条（声）「アカギか！お前、裏切り者じゃないだろうな！？」

どうやら、アカギを裏切り者とらんで、電話をかけたようだ…

アカギ「ククク…まあ、俺を見たらお前がそう思うのは仕方ないかもしれないが、俺は裏切り者ではない」

上条（声）「本当か？なら証明してみろよ！」

アカギ「それは出来ない。悪魔の証明になっちまう」

上条（声）「それ…なんだ？」

アカギ「ククク…とりあえず、切るぞ」

アカギは、ゆっくりと携帯のボタンを押した。

その数秒後…

プルルルル…プルルルル…

アカギ「また電話か。もしもし？」

ヒナギク（声）「ちょっとあなた、裏切り者じゃないわよね!？」

その容姿と性格からか、疑われる麻雀打ちであった…

…

さらに時間は進み、残り時間は40分となった。

そして、ついにミッション7が幕を開ける!

プルルルル…プルルルル…

竜崎「『ミッション7。カジノ街の入り口に、賞金減額装置を設置した』減額だと…?」

八神「『装置を止めた時間に応じて、それまでためた賞金が減額される。残り時間30分までに止めた場合は減額なし。残り時間28分までに止めた場合は賞金10%減額とする』これ、まずいやん!」

ヒナギク「『残り26分までに止めた場合は20%の減額…』といったように、2分ごとに10%ずつ賞金は減額していく。ただし、特別ペナルティとして、残り20分までに装置を止められなかった場

合は、90%の減額とする。だが、裏切り者の通報によるボーナスは減額されない』90%!?」

上条「『装置を止めるには、入り口に設置してあるレバーを2人同時に下さなければならぬ』なんだ、意外と簡単だな」

ミッション7 賞金減額装置を止める!

カジノ街の入り口に、賞金減額装置が設置された。

これを止めなければ、賞金が減ってしまう。

残り30分までに止めれば、減額は逃れるが、それ以降は2分ごとに10%ずつ賞金が減ってしまう。

残り20分までに止められなければ、特別ペナルティとして、賞金は90%減額となる。

ただし、裏切り者の通報によるボーナスはこれに影響されない。

装置を止めるには、入り口に設置してあるレバーを2人同時に下せばよい。

.....

結城「これ…さすがにまずいよ!」

一ノ瀬「減額が進めば、私たちが獲得できる賞金は…」

竜崎「ちよつと待ってる。紙に書いて計算する」

竜崎は、地図の裏に計算式を書きだした。

（1分後）

竜崎「：出た。賞金はこうだ」

	賞金
減額なし	168万円
10%減額	156万2400円
20%減額	143万7600円
30%減額	130万5600円
40%減額	116万6400円
90%減額	49万2000円

結城「竜崎君、凄い…でも、168万の10%引きが156万2400円って、おかしくない？」

竜崎「おかしくないさ。このミッションは、装置を止めた段階で、それまでに貯めた賞金が減額されるんだ。だから、装置を止めた後は、普通に1秒3000円の賞金となる」

一ノ瀬「それで、行くの？」

竜崎「……………」

結城「竜崎君？」

いつもの竜崎なら、間違いなくこのミッションに行っただろう。だが、懸念すべきことが1つあった。

そう、裏切り者だ。

竜崎「裏切り者の通報によるボーナスは、これに反映されない。つ

まり裏切り者は、最悪90%減額でも、たいして痛手にならない
てことになる。そうなれば、裏切り者はミッションを捨て、通報に
回るかもしれない…」

現在、裏切り者の通報ボーナスは、1人につき30万円。3人通報
すれば、90万円。これなら、減額になってもたいして痛くない。

簡単そうに見えて、簡単ではないこのミッション。それは、裏切り
者という存在のせいだ。

竜崎「裏切り者を探すか、捨て身覚悟でミッションに向かうか、ど
つちが有利なんだ？」

裏切り者を見つければ、安全にミッションに行くことが出来る。も
ちろん、ハンターは警戒しなければならぬが…

そんな考えに、気を取られてしまっている竜崎。なんと、その隙を
突かれて…

??「竜崎悠太、結城秋子、一ノ瀬玲奈、ギャンブルエリア、ポ
ーカ―専門店前にいます」

通報されてしまった…！

ミッション7 part1 裏切り者の存在（後書き）

ふう、やっと書けたぞ…

今回は、明日か2日後、遅くとも3日後には更新しようと思います。

ミッション7 part2 逃走者ピンチ！

裏切り者によって、通報を受けてしまった竜崎たち。
だが、彼らはまだそのことに気付いていない…

竜崎「とりあえず、今ここで話し合っても始まらない。早めに結論を…」

その時、一ノ瀬が竜崎の口をふさいだ。

一ノ瀬「待って、ハンターが来たわ。隠れましょう」(小声)

その言葉を聞き、3人は建物の陰に隠れた。そして…

一ノ瀬「行ったみたいね」

なんとかその場をやり過ごした。だが…！

竜崎「…！？おい、後ろからハンターが来たぞ！」

結城「えっ！？」

一ノ瀬「そんな…！」

通報により、近くにいるハンターは、彼らの位置を知っている…！
すぐさま3人は逃げ出した。逃げるルートを確認していなかったため、ハンターとのガチ勝負となる。彼ららしからぬ、失態だ…

竜崎「おい、十字路だ」

一ノ瀬「右と左…どちらに逃げるの？」

結城「もうハンターきてるよ！」

竜崎「クツ…！とりあえず、3人同時に同じ方向に逃げるのは危険だ！分かれるぞ！」

3人は、十字路で2つに分かれた。右と左、どちらが逃げやすいかなどは考慮せず、ただ直感で分かれた。

左の方向には、竜崎と一ノ瀬。右の方向には、結城が逃げた。そして、追われたのは…

結城「ええっ！私！？」

1人になった結城、狙い撃ちだ…

結城「ああっ！」ポンッ

結城秋子確保 残り7人

結城「ここまでかあ…残念」

.....

プルルル…プルルル…

八神「『ポーカー専門店近くにて、結城秋子確保。残り7人』あの

子やな…」

竜崎「『尚、この確保は裏切り者によるものである』…裏切り者！」

一ノ瀬「ってことは何？私たちは見られていたということ？」

竜崎「そうなるな。とりあえず、一刻も早くここから離れよう。まだ裏切り者が近くにいないかもしれない」

一ノ瀬「ええ」

2人は、ギャンブルエリアを離れ、ドリームエントランスエリアへと足を進めた。

.....

ヒナギク「裏切り者…やっぱり通報するのね」

八神「そうみたいやな。気をつけんと…」

ブラックエリアの倉庫前で出会った、生徒会長と部隊長。なんとも立派な組み合わせだ。

ヒナギク「でも、この状況で皆を裏切ったのはどこのどいつなのかしらね！」

八神「もしや…ヒナギクちゃんじゃないよな？」

ヒナギク「わ、私！？冗談じゃないわ！あなたこそ、裏切ったりしてないでしょうね？」

八神「してへんがな！」

険悪なムードになってしまっている2人。その2人を、裏切り者が捉えた…

??「桂ヒナギク、八神はやて、ブラックエリア、倉庫前にいます」

逃走者の位置情報を知ったハンターが、一斉に2人に襲い掛かる…！

ヒナギク「……………」

八神「ヒナギクちゃん、どうしたんや？」

ヒナギクは、ずっと下を向いている。かと思うと、今度は一気に走り出した！

八神「ヒナギクちゃん！？」

あわててヒナギクの行動の意味を知ろうとする八神。その答えは、すぐに明らかになった。

八神「ハンター来とるやん！なんで教えてくれへんのや！」

気が付くと、ハンターはすぐそこまで迫ってきていた。八神は、何とか倉庫の狭い道を通り、ハンターを撒こうとするもの…

八神「だめや、撒ききれん！」

ハンターの異常な速度に、最早、なす術なし…

ポンツ

八神はやて確保 残り6人

八神「も〜最悪や！怨むでヒナギクちゃん！」

して、その頃ヒナギクは…

ヒナギク「何とかなったわね。一応、あの人が裏切り者って可能性もあるんだし、これでいいのよね？」

完全に、疑心暗鬼状態に陥っていた…

………

プルルルル…プルルルル…

竜崎「『倉庫前にて、八神はやて確保。残り6人』いくらなんでもペースが早すぎる…」

綾崎「『尚、この確保は裏切り者の通報によるものである』また、裏切り者ですか…」

（牢獄）

なのは「はやてちゃんが捕まった！しかも裏切り者による通報だつて！」

ジャイアン「くそつ！一体誰なんだ！」

沼川「竜崎の奴…早く見つけろよ！」

……

竜崎「どうにか、裏切り者との距離はつけたか？」

一ノ瀬「ええ、ここまでくれば心配ないでしょう」

裏切り者を恐れ、エリア移動をした2人。

竜崎「そついえば、今時間は？」

一ノ瀬「残り時間…32分。賞金減額まであと2分しかないわよ。どうするの？裏切り者を警戒するなら、10%減額くらいは目をつぶって、慎重に行動するっていう手もあるわ」

竜崎「ああ、それなら問題はない。なぜなら、裏切り者の人数がはつきりしたからな」

一ノ瀬「分かったって？何人よ？」

竜崎「裏切り者の数は…」

瞬間、辺り1面が静かになる。

竜崎「2人だ」

ミッション7 part2 逃走者ピンチ！（後書き）

作者「スライディング土下座あ！」>m()m<

アカギ「…とりあえず説明をしてくれ」

作者「ああ、アカギか。それがですね、前回の後書きで3日以内には更新するって言ったのよ」

アカギ「それで、結局前回更新から4日目になったと。ククク…」

作者「ああ、というわけで、読者の皆様にスライディング土下座だ」

カイジ「お前、ほんとバカ作者だな。んで、次の更新はいつなんだ？」

作者「とりあえず、明日か明後日を予定しています。遅れた場合は…逝きましょう」

カイジ「この小説を終わらせる気が！」

アカギ「遅れなければいい。遅れても作者が逝くだけで、この小説は続くさ。作者の友人か何かが書くらしいし…」

カイジ「まじか！」

作者「いやいや、代筆してくれる友人なんていないから！」

カイジ「いないのかよ…」

アカギ「それなら、なおさら逝けなくなったな」

作者「ま、そういうことですので、明日か明後日には更新します。
絶対！ですので、どうか見捨てないでください」

カイジ「それでも作者はナイーブだからな」

ミッション7 part3 裏切り者発覚？

ミッション7終了まで残り2分。

このままでは、賞金が減額されてしまう。

だが、裏切り者のせいで、思うように動けない。

そんな中、竜崎が裏切り者の人数を見つけ出した…！

.....

一ノ瀬「2人つて、なぜそう思うの？」

竜崎「とりあえず、走りながら話そう。現在、逃走者はこの6人だ」

竜崎悠太

一ノ瀬玲奈

綾崎ハヤテ

桂ヒナギク

上条当麻

赤木しげる

竜崎「そして、ミッション6の間に確保されたのは3人。つまり、裏切り者は最大でも3人ということになる」

一ノ瀬「そうね」

竜崎「1人以上3人以下。ただし、1人ということはありえない。裏切り者の通報で捕まった奴の、確保情報を見ればわかる」

ポーカー専門店近くにて、結城秋子確保。残り7人

倉庫前にて、八神はやて確保。残り6人

竜崎「この2人は、ブラックエリアとギャンブルエリアで確保されている。位置関係では、南と北。離れすぎている。あの短時間で、この距離を移動するのは不可能だ」

一ノ瀬「分かったわ。なら、なぜ3人はいないと思ったの？」

竜崎「プレイヤーの、状況と性格で分かった」

その時、2人はちょうど、減額装置の前に来ていた。ハンターは、裏切り者の通報により、1カ所に集められているので、ハンターとの遭遇はなかった。

竜崎「下ろすぞ」

一ノ瀬「ええ」

ガシャン！

減額装置の、電源が切れたようだ。

.....

ブルルルル…ブルルルル…

綾崎「『ミッション7結果。竜崎悠太、一ノ瀬玲奈の活躍により、減額装置が停止した。停止時間は、残り時間30分55秒のため、賞金減額は無しとする』裏切り者がいる中で、すごいですね…」

上条「あの2人すげえ！」

アカギ「ククク…やるじゃねえか」

ヒナギク「すごいわね…裏切り者がいるっていうのに…」

残る逃走者も、2人を、高く評価したようだ…

………

一ノ瀬「それで？」

竜崎「ああ、逃走者の状況と性格で分かった。って言ったところか。俺たちを除いて、残る逃走者は4人。この中で、確実に裏切らないやつが1人いる」

一ノ瀬「誰よ？」

竜崎「…綾崎ハヤテ。あいつは、三千院家の執事をやっているそう。だ。そして、会場をセッティングしたのは、あいつの主である、三千院ナギ。つまり三千院ナギは、このゲームで綾崎ハヤテが何をしたか、すべて知ることになる。その時、もし自分の執事が仲間を裏切るようなことをしていたら…？」

一ノ瀬「…確実にクビね」

竜崎「そう。だから、綾崎ハヤテは裏切り者ではない」

綾崎にとって、裏切り者になることは、自分の将来をなくすような

もの。そう、竜崎は読んだのだ。

一ノ瀬「でも、残る3人が全員裏切り者という可能性もあるわよ」

竜崎「いや、それもないと思われる。残り3人のうちの2人、桂ヒナギクと上条当麻の性格を考えてみる。両方とも、正義感があふれる人間だ」

一ノ瀬「まさか…それが根拠？」

竜崎「他にもある。この逃走中には、参加している逃走者に、皆共通のある特徴があるだろ？」

一ノ瀬「…分かったわ。知り合いが、必ず4人いるというところね」

竜崎「その通り。さすがだな、一ノ瀬。ここで裏切るということは、今後の生活において、かなり信用を失うことになる。アカギみたいな人間ならいいが、生徒会長をやってるヒナギク、高校生の上条において、かなりきついところだ」

一ノ瀬「綾崎と同じく、裏切ることによって、社会的信用を失ってしまうということね。納得したわ。でも、実際この2人のどちらかは裏切ってるわけだけど、その点についてはどう考えているの？」

竜崎「…実は、裏切り者の目星もすでについている。裏切り者は…アカギと、上条だ。アカギは説明しなくてもいいな。そして上条。こいつは、ジェット機の弁償代含め、かなり生活が苦しいようだ。社会的信用と天秤にかけても、裏切る可能性が高い」

竜崎が、ついに裏切り者を特定した…！

.....

上条「ぶるっ…なんだ！？今変な身震いがしたぞ？」

竜崎の動向に、なんとなく気づいた上条。さすが、いつも不幸な目にあっているだけのことはある…

上条「つと、言ってる間にハンターだ。隠れるか」

上条、いち早くハンターを見つけ、その場をやり過ごした。

上条「ふう〜辛いぜ」

.....

そして、もう一人竜崎に疑われている、アカギは…

アカギ「誰だ？」

バニーガール「お兄さん、かつこいいね！飲んでいかない？」

アカギ「悪いが、気分じゃない。それじゃあ」

バニーガールを、華麗にスルーしていた…

ついに裏切り者の正体に目星をつけた竜崎。
これから、どのように行動するのか。

ゲームは、ミッションの訪れと共に、新たな展開を迎える…！

ミッション7 part3 裏切り者発覚？（後書き）

作者「……………ガクッ」

綾崎「わーっ！どうしちゃったんですか!？」

ヒナギク「前回、2日以内に更新するとか言っというて、結局遅れたから逝ったらしいわね」

ナギ「ええ！それじゃあ、この小説どうなるのだ?」

ヒナギク「このままいけば廃止ね…」

ナギ「なんだと！あ、そうだ。ハヤテ、あの料理を食べさせれば!」

綾崎「あ、その手がありましたね」

あの料理とは…ハヤテのごとく！単行本で、死にかけの漫画家の先生を起こすためにハヤテが作った料理である。味の保証は…できません。

綾崎「では、これを…」

作者「ちよーっと待ったあー！ー！」

綾崎「あれ、生きてましたね」

作者「嫌な予感したから生き返ったぜ！と、いうわけで小説は続きます。ご安心を（笑）」

ヒナギク「じゃあ、次回の更新はいつ？」

作者「言わない。もう逝きたくない…」

綾崎「と、言うことですので、また次回よろしくお願いします> m

（――）
「^ m

作者「それは俺の台詞だろ！」

ミッション8 part1 ラストミッション！

始めは、皆で協力し合いながら、楽しみながらハンターと戦っていた…

だが、今のこの状況はなんだ？人が人を信用できなくなり、あまつさえ裏切り者が出る始末。

逃走者たちは、再び信頼関係を取り戻すことが出来るのだろうか。それとも…

逃走者6人。ゲーム残り時間30分の時のことであつた…

・・・

綾崎「あと30分…逃げ切つて見せます！」

ゲーム残り時間を見て、気合の入る綾崎…

カメラマン「綾崎さん、賞金の使い道はなんですか？」

綾崎「お嬢様に借金があるので、その返済に充てようかと思つてます」

カメラマン「借金ですか…失礼ですが、大体いくら位…？」

綾崎「はあ…だいたい1億5千万くらいで…」

カメラマン「ええっ!？」

カメラマン(どうやってたらそんなに借金できるんだ…というか、貸

す方も貸す方だ)

上条「う…またハンターが近くにいる。こいつはやばいぜ…」

上条、1分前にハンターに遭遇したにもかかわらず、またしても遭遇。不幸すぎる、男…

上条「とりあえず隠れて…」

ビルの陰に隠れた上条。どうやら、気づかれなかったようだ…

上条「これは、慎重に行動したほうがいいかもしれないな」

ここまで残っているだけあって、慎重に行動するスキルは、高い…

………

プルルルル…プルルルル…

竜崎「来たか…それも2通。両方とも主催者からだが、1つはミッションじゃない。何だ？」

『ミッション8の内容を知らせる前に、1つ知らせがある。ミッションは、いよいよこれで最後だ。残っている逃走者は6人。ミッション8は、逃走者全員が協力して、初めてクリアできるミッションとなっている。残り30分。君たちの運命を決めるのは、君たちの判断がすべて。ゲーム終了時に、君たちが笑って家に帰れることを祈っている。ミッション8の内容は、次のメールに記載した。覚悟

を決めて読みたまえ』

アカギ「ククク…大層なメール送ってくるじゃねえか」

綾崎「みんなで協力しなければ、ミッションがクリアできない…！」

一ノ瀬「いったい、どんなミッションだというの…？」

そして、牢獄でも…

カイジ「残り30分で、逃走者6人…全滅になるかもしれねえ！」

雲雀「このメールから察するに、ミッション8は相当過酷なもの。果たして、彼らにそれができるかどうか。と、いったところだね」

のび太「でも…あの人たちなら…あの人たちならきつとやってくれるよ…！」

ジャイアン「おうよ！あいつらなら、どんなミッションでもクリアできる！」

良平「いけー！逃走者！」

美琴「ここまで残ったのよ、絶対にクリアしなさい！」

牢獄の中の確保者たち。ミッションクリアを懸命に祈る…！

.....

一ノ瀬「それで、結局どんなミッションなのよ？」

竜崎「ああ…『ミッション8』。現在、リラックスエリアのバーの中に、10体のハンターがいる』10体…きついかもしれないな」

上条「『彼らは、ゲーム残り時間10分になるとエリア内に解き放たれ、ハンターの合計は計14体となる』そ、それはまずい！」

ヒナギク「『阻止するには、バーの前で逃走者全員が写っている写真を撮り、逃走中本部に送信しなければならない』逃走者全員…！？」

ミッション8 ハンター大量放出を阻止せよ！

現在、バーの中に10体のハンターがいる。

彼らは、ゲーム残り時間10分になると、エリア内に解き放たれる。阻止するには、逃走者全員が写っている写真をバーの前で撮り、本部に送らなければならない。

.....

上条「…ん？これだけか」

アカギ「意外と、シンプルなミッションが最後に来たもんだ」

竜崎「だが、このミッション、確かにシンプルだが…」

ヒナギク「そう、限りなく…」

逃走者たち「難易度が高い！」

全員で集まることだけでも難しい。それが、裏切り者のせいで、逃走者たちが疑心暗鬼になっている状況となればなおさらだ。

.....

ヒナギク「出来ることなら、動きたくはない。でも、動かないとハンター10体放出確定……」

このミッション、全員が強制参加のため、1人でもミッションに行かなければ、ハンター放出が確定してしまう……！

ヒナギク「今、残り時間は25分。ここからバーまでは5分あればいける。とりあえず、様子見ね」

すぐには、ミッションに向かわないヒナギク。そして、別の場所でも……

上条「ハンター10体はやべえ！だが、裏切り者もいるし、うかつには動けねえ。……隠れて様子見だな」

裏切り者の存在が、逃走者の行動力を奪う……！

.....

アカギ「ククク……なるほど、そういうことか」

携帯のメールを見て、不気味に笑うアカギ。

カメラマン「アカギさん、どうされたんですか？」

アカギ「このミッション8の内容。実はこれ、今までのミッションと明らかに違う点が1つだけある」

カメラマン「ああ、確かに。難しいですもんね」

アカギ「そういうことじゃない。実は、前半戦を見ていた時に、竜崎がちらつと言ったことなんだが…」

アカギは、カメラマンに耳打ちした。

カメラマン「おお！言われてみれば確かにそうですね！で、そこから何がわかるんですか？」

アカギ「裏切り者の正体が…分かつちまうぜ」

カメラマン「本当ですか！？じゃあ、今すぐほかの逃走者にメールでも送りましょうよ！裏切り者の正体がわかつたって！」

アカギ「いや、ダメだ。俺は今、逃走者全員から裏切り者じゃねえのかって疑われてる。俺がメールを送ったって、誰も信用しやしない」

カメラマン「あ、そっか」

アカギ「だが、もしも俺以外の人間がこのことに気付いたら…クク、この状況は、1発でひっくり返る…！」

アカギが気付いた真実。その内容とはなんなのか。
そして、逃走者たちは、無事にミッションをクリアすることが出
来るのか…！

ミッション8 part1 ラストミッション！（後書き）

更新が遅れて本当に申し訳ありません！> m () m < () m <
テスト期間だったのと、作者のアイデア不足でこのような事態に陥
ってしまいました。

しかし、テストはもう終わりましたし、この逃走中も最後までスト
ーリーが出来ているので、これからは早く更新できると思います。

よろしければあと1か月ほど、このダメ作者にお付き合い下さい。

ミッション8 part2 ホームズの名言

ついに、最後のミッションが発令された。

ゲーム残り時間10分までにバー前に行き、全員で写真を撮らなければならぬ。

ミッション失敗は、ハンター10体増加。逃走成功は、とてつもなく困難になる…！

.....

一ノ瀬「このミッション、強制参加ね。どうするの？」

竜崎「とりあえず、ミッションに参加しないという選択肢はない。それだけは頭に入れてくれ」

メールを受け取り、今後の方向性について話す2人。

一ノ瀬「ただ、逃走者たちは今、他の逃走者を完全に信じられなくなってきているわ。私も、あなた以外は信じていないもの」

竜崎「そうだな…この状況を何とかしない限り、ミッション成功は不可能…か」

一ノ瀬「そもそも、このミッションもたち悪いわね。ハンター放出が10体なんて」

竜崎「ん、なぜだ？」

一ノ瀬「ハンター放出が100体とかなら、裏切り者なんて無視し

て、全員ミッションクリアに向かう。でも、10体なら…そして、ゲーム残り時間が10分なら？」

竜崎「…隠れて逃げ切れると考える奴もいるということか。だが、ハンター100体となると、ミッションに失敗したとき、絶対に逃げ切れなくなる。前半戦でも三条に言ったんだが、このゲームの主催者は、乗り越えられる試練しか与えない。つまり、主催者がこう来るのは、当然ということだ」

一ノ瀬「そうね…って、あれ？」

竜崎「どうした？」

一ノ瀬「今の竜崎の発言、少し矛盾してるわよ」

竜崎「…え？」

一ノ瀬が、何かに気付いた。そしてこれが、この状況を打開する第一歩となる…！

.....

綾崎「この状況、怖いですね…」

周りの状況を見て、慎重に行動する綾崎。

綾崎「……ところでヒナギクさん、そんなところで何やってるんですか？」

ヒナギク「!？」

綾崎が、10mほど後ろにいたヒナギクを見つけ、声をかけた。

ヒナギク「ハ、ハヤテ君、どうしてわかったの!？」

綾崎「いえ、ヒナギクさんの気配がしたので…」

ヒナギク「どこかの殺し屋なの、ハヤテ君は？」

綾崎「ハハハ…あ、そういえば似たような会話をお嬢様としたような記憶があるのですが…」

ヒナギク「そういうのは、デジャブっていうのよ」

綾崎「そうですね」

ミッション中なのに、実に和やかな2人…

……

場面は戻り、再び竜崎と一ノ瀬。

一ノ瀬「…ね、矛盾しているでしょう?」

竜崎「確かに、矛盾している………もはや!」

天才の閃き…しかしそこに、ハンター…

一ノ瀬「ハンターが来たわよ」

竜崎「ああ、だが大丈夫だ。このまま隠れていれば、見つかることはない」

2人は今、建物の陰に隠れている。そこは、ハンターから見える場所ではない。

竜崎「よし、しのぎk!？」

一ノ瀬「追ってきたわよ！」

竜崎「逃げるぞ！」

竜崎は、逃げながら考えた。

竜崎（なんだ今のは、まるで俺たちがいることをわかっていたかのように追ってきた。そうか、裏切り者か！）

実はこの2人、2分ほど前に、通報されていた…！

竜崎（だが、誰が通報した？アカギか？上条か？いや、違う。俺はこの近くを注意深く見ていたが、逃走者は1人も通らなかつた。俺たちを見つけられるわけがない。なら、通報したのは…！）

一ノ瀬「竜崎、十字路よ！」

竜崎「右に曲がるぞ！」

足が速い2人。ハンターも、なかなか距離を縮められない。だが、脚力は確実にハンターのほうが上である。

頭脳明晰な2人と、陸上選手並みの脚力を持つハンター。勝つのは、どちらなのか…！

竜崎「どうやら…撒いたようだな」

曲がり角を利用し、ハンターを撒いた…！

一ノ瀬「でも、いったい誰が通報をしたの？私は気づかなかった。あの状況で私たちを通報できる逃走者なんているの？」

竜崎「いないだろうな。少なくとも、逃走者の中には…！」

一ノ瀬「…え？」

竜崎「お前が、俺の発言の矛盾に気付いてくれたおかげで、逃走者の中に裏切り者がいないことが分かった」

竜崎「…隠れて逃げ切れると考える奴もいるということか。だが、ハンター100体となると、ミッションに失敗したとき、絶対に逃げ切れなくなる。前半戦でも三条に言っただが、このゲームの主催者は、乗り越えられる試練しか与えない。つまり、主催者がこう来るのは、当然ということだ」

この発言に対して、一ノ瀬が気付いた矛盾。それは…

一ノ瀬「主催者は乗り越えられる試練しか与えない…？そんなのおかしいわよ。このミッションは、裏切り者がいる限り絶対にクリアできない。裏切り者と会えと言っているようなものだからよ」

竜崎「つまりこのミッション、乗り越えられない試練ということだ。ただそれは、逃走者の中に裏切り者がいた場合だ。逃走者の中に裏切り者がいなければ、このミッションは実に簡単だ」

一ノ瀬「でも…そんなことってあり得るの？」

竜崎「逃走者の中に裏切り者がいるという可能性は、さっき俺たちが通報されたときに、逃走者が周りにいなかったという理由で完全に消えた」

一ノ瀬「見逃したということも…」

竜崎「俺たちがか？それはない。つまりだ、逃走者の中に裏切り者がいる。この前提自体が崩れてしまう…！となれば、裏切り者は逃走者以外の誰かだ」

一ノ瀬「そういえば…ホームズの名言にこんながあるわね」

『ありえないことをすべて除去して最後に残ったもの…それがどんなに不合理に見えてもそれが真実だ』

竜崎「今回で言えば、逃走者の中に裏切り者がいるということが、ありえないことになるわけだな」

一ノ瀬「でもこれで、ミッションクリアはできるわね」

竜崎「いや、まだまだ。裏切り者…いや、通報者の正体を暴かない限

り、この状況が打開されることはない」

一ノ瀬「あ、そうね…」

竜崎（待ってる、俺は必ずたどり着く。通報者の正体に…！）

ミッション8 part3 通報者とは…？

裏切り者は逃走者の中にいないという事実に気付いた竜崎と一ノ瀬。すべてを解き明かし、真実を隠しているアカギ。生活のため、借金のために逃げ回る綾崎と上条。状況に流されている生徒会長、ヒナギク。

残っている逃走者全員の協力で、ミッション8はクリアできるのか。そして、逃走者たちは再び信頼を取り戻すことが出来るのか。

ゲーム残り時間

25:00

.....

一ノ瀬「通報者がいることは分かったわ。でも、それっていったい誰？…って、分かるわけないわね。この会場には何百人もの人がいるから」

竜崎「一ノ瀬、そういう時は、発想を転換するんだ。つまり『通報者は誰か』を考えるのではなく、『通報者になれるのは誰か』を考える」

一ノ瀬「…なるほどね。となると鍵は、携帯電話ね」

竜崎「さすが一ノ瀬、頭の回転が速い。俺たちは、裏切り者募集のミッション6の情報を、携帯電話で知った。つまり、携帯電話を持っている人間が通報者ということだ」

一ノ瀬「ただの携帯電話じゃないわ。主催者からミッション情報が送られてくる携帯電話よ。でもそれは、逃走者しか持っていないはず…。」

竜崎「そこが、問題なんだ…。」

どうやら、推理に行き詰ったようだ…

………

ヒナギク「ハヤテ君とは別れたけど、やっぱりハヤテ君が裏切り者なんじゃ…。ちがう！ハヤテ君は絶対にそんなことしない！何考えてるのよ、私…。」

精神的に、参っている生徒会長…

カメラマン「あの、ヒナギクさん。ミッションは？」

ヒナギク「まだ、ミッション終了まで15分ある。このギャンブルエリアからなら、バーまで5分で行けるから、まだ動かなくても…。」

裏切り者（通報者）の存在は、逃走者のやる気をも奪っていく…！

そんな彼女を、通報者が見た…

通報者「桂ヒナギク、ギャンブルエリア、雀荘前にいます」

見つかりにくい場所。だが、見つかるときは見つかる。

ヒナギク「うそっ！ハンターきてる!？」

さすがは生徒会長。ハンターにいち早く気づき、曲がり角を利用して撒いた。

ヒナギク「はあ…いきなりなんて、びっくりするわよ…」

しかしそこに、もう1体のハンター…

ヒナギク「ええっ!？」

体力的にも、精神的にもボロボロのヒナギク。勝てるわけもなく…

ヒナギク「もう…いいわよ」ポロンッ

桂ヒナギク確保 残り5人

白皇の生徒会長も、ハンター相手になす術なし…

……

プルルルル…プルルルル…

上条「『雀荘前にて、桂ヒナギク確保。残り5人』ヒナギクって、あの赤毛の女か!」

綾崎「ヒナギクさんでも捕まってしまうなんて…」

竜崎「続きがある…」尚、この確保は裏切り者によるものである『やってくれたな…』

一ノ瀬「もう何人通報者のせいで捕まったと思ってるのよ…」

〈牢獄〉

ツナ「桂ヒナギク確保！」

山本「げえっ！ツナ、それマジかよ！」

なのは「しかも裏切り者による通報だって！」

カイジ「ゆるせねえ！」

良平「こら、裏切り者！仲間を売って楽しいか！！」

正確には、仲間を売っていない。もとより、初めから仲間でもない…だが、そのことには気づいていない…！

………

そして、通報者による通報は、まだまだ止まらない…！

通報者「竜崎悠太、一ノ瀬玲奈。ドリームエントランスエリア、ちようどカジノ街の入り口にいます」

先ほど、2人を通報した通報者。まだ完全に振り切れてはいなかったのだ…！

そして、ハンターが接近…

竜崎「とりあえず、ミッション時間の問題もある。早急に結論を出

さなくては…」

一ノ瀬「しっ！ハンターよ…」

竜崎「ただ歩いてるだけか…？いや、こっちに向かってくる！通報された、逃げるぞ！」

一ノ瀬「ええ！」

竜崎「ん？これは…一応持っていくか」

一ノ瀬「竜崎、早く行くわよ！」

2人は、全力で逃げる。その先に、十字路…

竜崎「右か左か…考えてる暇はない！」

竜崎は右、一ノ瀬は左に進む。ハンターが追ったのは…

一ノ瀬「こっちな…」

脚力には自信がある一ノ瀬。だが、ハンターに勝てるほどではない。運のないことに、道も1本道。確保は、時間の問題…

と、そのとき！

アカギ「ん？あれは…」

アカギが、逃げている一ノ瀬と合流した。

アカギ「こっちにくる…ったく、めんどくさいったらありやしねえ」

一ノ瀬「アカギ!？」

どうやら、一ノ瀬も気づいたようだ。

アカギ「……………」

一ノ瀬（なんで?なんで逃げないの?)

一ノ瀬が、アカギのほうに向かってハンターを連れてきている。普通なら、一目散に逃げるところだ。だが、アカギは動かない。そしてそのまま…

一ノ瀬（追い越した…）

その瞬間、ハンターの標的が一ノ瀬からアカギに変わった…!

アカギ（逃げるのも1つの手なんだが、ここで逃走者を減らすのは得策じゃないんでな。ククク…）

フワッ!

ハンターが、アカギに手を伸ばした瞬間。アカギは、その姿を消した。

ハンター「!？」

ハンターは驚いて周りを見渡した。すると、アカギが右の壁を1蹴りして、ハンターの反対側に回り込んでいた。

ハンターは、もう動けない…アカギの完全勝利である。

アカギ「ククク…」

闇に舞い降りた天才は、麻雀だけでなく、逃走中でもその天才ぶりをいかんなく発揮した。

………

一ノ瀬「確保情報が来ない…まさか、あの状況から逃げ切ったの…？」

驚く一ノ瀬。そこに…

アカギ「逃げ切ったぜ」

天才…

一ノ瀬「…よく逃げ切れたわね」

アカギ「そんなことより、いい情報がある。聞きたくないか？」

一ノ瀬「いい情報…？」

アカギ「ククク…お前らが捜している通報者の正体。俺はとっくにわかってた。その通報者の情報を、教えてやる」

一ノ瀬「!？」

ミッション8 part3 通報者とは…？（後書き）

風邪をひいてしまった…

竜崎「バカは風邪をひかないという言葉は、科学的根拠のない迷信なんだな…」

どういう意味だよ、それ…

ミッション8 part4 逃走者VS通報者

一ノ瀬「通報者の正体がわかるの…?」

アカギ「ああ、簡単な事さ」

一ノ瀬「でも、どうして私たちが、逃走者の中に裏切り者はいないってことに気付いたってわかったの?」

アカギ「…お前が、竜崎と一緒にいるところを見た。竜崎なら、気づくだろ。それくらいは」

一ノ瀬「!!!」

一ノ瀬（たったそれだけで、そこまで推測するなんて…この男は、ただ者じゃない!）

アカギ「それで、通報者の正体だが…警察官だ」

一ノ瀬「警察官…?」

アカギ「そうだ。ミッション5のことを思い出してみろ」

ミッション5。逃走者の偽物が現れたため、そいつを逮捕しなければならぬミッションだ。

アカギ「あの時、俺たちは手錠で偽物を捕まえた。その後、偽物の身柄は警察に送られる。その時に、警察は偽物の持ち物を押収する。…分かったか?」

一ノ瀬「持ち物…？そうか、携帯電話ね！」

アカギ「偽物が持っている携帯には、裏切り者募集のメールが送られてくる。そのメールの内容を唯一確認できるのは…警察官以外にいない」

一ノ瀬（この人…凄い！私と竜崎が気付かなかった謎を、解き明かしてしまった…！）

アカギ「クク…さて、これからどうする？」

一ノ瀬「…え？」

アカギ「この先どうするかは、お前が決めることだぜ」

一ノ瀬「とりあえず、竜崎にこのことを伝えるわ」

一ノ瀬は、携帯電話を取り出した。

…

竜崎「はあ…はあ…」

竜崎は今、リラックスエリアに向けて走っている。そこに…

ブルルルル…ブルルルル…

一ノ瀬からの、電話だ…

竜崎「もしもし、竜崎だ」

一ノ瀬（声）「アカギが、通報者の正体を明かしたわ」

竜崎「何!？」

一ノ瀬は、これまでのアカギ言ったことを話した。

竜崎「そうか…警察官が。今どこにいる?」

一ノ瀬（声）「ギャンブルエリアと、リラックスエリアの境よ」

竜崎「残り時間18分…今すぐバーに向かってくれ」

一ノ瀬（声）「あなた何言ってるの!? 通報者は今回のミッションメールも受け取っているのよ。バー前で待機されているかもしれないじゃない」

竜崎「大丈夫だ…俺に考えがある」

そういうと、竜崎はすぐに電話を切った。

一ノ瀬「……もう!」

……

上条「あと17分…!でも、もしハンターが10体増えたら、やべえな…でも裏切り者が…」

ギャンブルエリアにいる上条。ミッションに行くか、迷っているよ

うだ。

プルルルル…プルルルル…

上条「メール…竜崎からか」

件名 裏切り者について from 竜崎悠太

驚くべきことが判明した。裏切り者は、逃走者の中にはいない。

根拠は後で説明するが、とにかく、逃走者の中に裏切り者はいない。それは信じてくれ。

何なら、今俺がいる場所を言ったって構わない。俺は今、ギャンブルエリアとリラックスエリアの境にいる。これでいいだろ？

つまり、俺たちはもう逃走者を疑う必要はないんだ。ハンターにだけ気を付けて、バー前に来てくれ。そして、ミッションの成功を…！

上条「な、なんだこのメールは…」

上条は、メールの内容に驚いていた。だが、一番驚いていたのは…

一ノ瀬「このメールに書いてある竜崎の居場所…ちよつど私たちがいるところじゃない！」

アカギ「このメールは、登録してあるアドレス全員に送られるようになってる。当然、警官が持っている携帯にも…ククク」

一ノ瀬「それって、警官が私たちを通報するってことじゃない…！竜崎、まさか裏切ったの！？逃走者を減らして、ミッションクリアの可能性を高めるために…竜崎！！！」

アカギ「…いや、これは違うぜ」

一ノ瀬「何が違うのよー！」

アカギ「ククク…これは竜崎が打った、このゲーム最大の…策さ」

…

警察官（以下通報者）「こ、このメールは…！」

ある場所で、メールを受け取った通報者。竜崎衝撃の行動に、喜びを受ける。

通報者「こりゃいいぜ！今すぐ通報だ！」

電話をしようとする通報者。だが、その手が止まる。

通報者（までよ…逃走者の中に裏切り者がいないこと。竜崎ってやつは、それに気付いた。そんな奴が、この携帯にメールを送ってしまった。そんなミスを犯すか？通報者の真実に気付いたやつが…！）

そして、通報者は携帯をしまった。

通報者（誤認通報は、最悪通報者としての権限も失いかねない…！
確認しなければ…ギャンブルエリアとリラックスエリア。その境目
に行つて…！）

通報者は、その場から全力で走りだした。

そして1分後…

通報者「いたいた…だけど、竜崎じゃねえな？あれは確か、アカギ
と一ノ瀬だ…そうか！プレイヤー数を減らしてミッションクリアの
可能性を高める作戦だな！竜崎も悪人だねえ…」

通報者は、再び携帯電話を取り出した。

通報者「よし、通報だ！」

しかしそこに、人影が…

アカギ「そうはさせねえぜ」

通報者「ア、アカギ！？」

そしてアカギは、ためらいもなく手をあげた。

バキィッ！！！！

アカギの拳が通報者の顔面にヒット！完全に伸びてしまったようだ…

するとそこに…

竜崎「アカギ、感謝する」

竜崎が現れた。全力でリラックスエリアまで走ってきたのだ。

アカギ「フフ…しかしお前も、よくこんな作戦を思いつたな。大したもんだぜ」

一ノ瀬「竜崎、どういうこと!？」

竜崎は、1つ息を吐くと説明を始めた。

竜崎「俺が、俺自身の場所を教えたメール。あれを見た通報者は、俺を通報しようとするだろう。だが、そのメールの内容は嘘だった。そのことに通報者が気付かないはずがない。当然確認しにくる」

一ノ瀬「そうね…現にここにいるし」

竜崎「俺はお前らに、リラックスエリアにすぐ向かうように言った。通報者のほうもリラックスエリアでミッションをクリアしてくる逃走者を待ち伏せていた。だが、俺のメールで通報者がそこから離れた。そして、お前らと合流した。そしてそこにアカギがいる以上、通報者はアカギによって倒される。…計画通りだ」

一ノ瀬「で、でも!無謀すぎるわよ!例えばアカギが通報者に気付かなかつたりしたら…そもそもアカギはこの作戦を知らされていないかったじゃない!」

竜崎「そこは信じていた。アカギなら、このメールから伝わる俺の意志を、絶対に汲み取ってくれると。そして、アカギなら絶対に通

報者に気付くはずだと」

アカギ「フフ…俺も信じていたぜ。竜崎が絶対に俺たちを裏切っていないということだけは」

竜崎「これは、お互いがお互いを信じることで、初めて成立する作戦だった。ありがとな、アカギ」

アカギ「礼はいらねえ。それより、これからやることがあるだろ？」

竜崎「ああ。これで裏切り者の恐怖は完全に消えた！いいいよ…」

アカギ「ミッションクリアに向けて…！」

ミッション8 part4 逃走者VS通報者(後書き)

ミッション8もついに佳境!

次回、ミッション8完結です!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7676v/>

逃走中～体力と頭脳で勝て～

2011年12月10日21時47分発行